

# 天うつ浪

第三

幸田露伴

明治四十年一月 春陽堂



## 其一

親しきが中の絶えて久しくして相會ひたるに、痛飲快談して歸るを忘る、日方を、幾度か羽勝の促し立て、漸くに二人の暇を告げし時は、日は既に暮れ果て、一時間餘も経たり。

お濱お鍋は後片付に忙しく、水野は獨り机に憑つて酔を吐きつつ、飲み慣れぬ酒に聊か苦みて、頻に微溫き茶に渴を癒しながら、羽勝が言ひたる海上の生活の如何に興味あるべきかを想ひ遣り、或は又翻つて日方が我を撲ちたる時の勢の烈しかりし醉に我が心は蒸さるゝが如くにして、身の筋は弛み骨節は和いで快く懈きやうなるに、精神は何にか憧るゝ、空に浮きて止まず、たゞく我を笑ますに足るものを得て、面白く破顔して笑みたまやうの氣の水野は、明らかに此を酒のさする事と知りながら、猶我が心の自然と動くに任せて、何とせん念慮も無く恍然となり居たり。

珍らしくも水野の表は暖かげに微紅色に、其眼は優しき光を湛へたれど、例の癖の物思に耽れるかと見えて身動きもせざるに、此方に入り來れる吉右衛門は、

『御酒の後ですから御考へ事は毒です。些御話でもなさいませんか。日方さんと仰ある方は結構な方ですが、軍人で在らつしやるだけに荒い方ですネ。ゑかし羽勝さんと仰ある方でも彼の方でも、皆心底から貴下を思つて居らつしやる、眞實に結構な好い方々です。御氣に入らない事も仰あつてゝしやうが、何も彼も皆御親切から出た事ですから、御氣に御止めなすつて悪くなんぞ御考へなさないが宜うございます。』

と言ひたり。

吉右衛門は水野が身動きもせで物を思へるを、胸の中に羽勝日方が振舞言語を忘れ兼ねて繰り返し繰り返せると猜したるなるが、かく云はれて水野は我に復りてハツと驚きぬ。實に我は今此老人が言へるが如くに、羽勝日方の我に與へたる數々の言葉に就いて物をこそ思ふべ

き筈なるに、我は今抑何をか思ひ居し。

羽勝が言ひし海の上の生活に就いて歟。あらず、海の上などの事は既に思はざりき。日方が我に加へし鐵拳に就いてか。あらず、日方が事などは既に忘れ居たりき。我は我が胸の中に何を思ひ居たりしや。我は今日日方に逢はず羽勝に逢はざりし前、大士堂前に圖らず相會ひたる彼の物優しきお龍を思ひ居たりしなり。如何なる人の憐みをも惹かんととも思はざりし愚なる此の我がために、我が思へる五十子の病の疾く癒れかしと、日々に歩を運びて祈りて呉れしといふ優しくも優しき彼のお龍をば思ひ居たりしなり。其の親し友なりといふ驚くべき美人——年は既に三十に近かるべきながら人を驚かす美人の、扮装も極めて立派なりしおとうとやらいへるより、お龍が悲しき身の上を臆氣に聞きて、終に堪へ得て、我は涙を濺ぎて泣きたりしが、其の憐れなるお龍をのみ思ひ居たりしなり。美はしく清かりし戀の誠の、人の偽りに情無く廢りて、狂ひに狂ひ、悲みに悲みたる末の其の女の、苦しき思ひに疲る、我を憐れと見て、猶有り餘る優しき情を傾けて我に寄せく

る、其その行爲ふるまひばかりに樂たのしみ無なき今いまの自己おのれを自みづから慰なぐさむるといふ薄命はくめいのお龍りゅう  
 をのみ思おもひ居ゐたりしなり。我われは我わが迷まよひて泣なき、苦くるみて悶もだえたる心こころの  
 闇やみに、優やさしき光ひかりの線いとすぢを投なげ呉くる、星ほしを認みとめし『心地ちここ、ちして、我わが  
 其その人ひとに會あひしをば滿身まんしんに悦よろこび愉よつこびつ、我わが懷なつかしきお龍りゅうをのみ思おもひ居ゐた  
 りしなり。

## 其二

思はんともせずして思ひ居たるは、心の其に染みたればなるべし。されども吉右衛門に話し掛けられて、水野は忽ち覺めたる如く、

『悪く思ふなんぞといふ考が何様して私に……。羽勝だつて日方

だつて皆私の兄同様なのだもの！、何を言はれたつて悪く取つたり氣に仕たりするやうな事は有りは仕ないので。私は今ただ恍然として居

たところでした。いや今日は大層御世話でした。お蔭で一同悦んで歸りましたが、あれを残らず御厄介になる理由はありますから、せめ

て御酒だけでも私の分にして、』

と云ひ掛くるを主人は悦ばぬ氣なる顔して、

『また水野さんの他人行儀がはじまつた。几帳面過ぎて厭氣がさします。宣いちやありませんか些細の事ですもの。』

と打消しつ、

『それは左様と先刻老夫が高田さんに逢ひましたら、水野さんに一寸來て貰ひたいことがあるから然様云つてくれ、他人の居ない時會いたいから成るべくば今夜あたり、といふ御談でございました。御酒氣は大分御有んなさるけれども、貴下の事ですから宣うございませう。更けない中一寸行つて居らつしやいせんか。』

と云ひ出したり。

高田は我が職を奉ずる學校の長にして、吉右衛門とも心易き男なれば、水野は更に考ふるまでも無くして、

『何だかさつぱり分らないけれども、其様なら一寸行つて來ましやう。』

と答へつ、吉右衛門がお濱を呼び立て、提灯をと云ふを、それにも及ばずと制め、たゞ纔に帶締め直し、のみにて立出でたり。

高田が家は學校の直後面にて、農家造りにてこそはあらね、趣味も無き平々凡々の住居なるが、主人も其家に相應しき平々凡々の、何の奇處も無き五十男にて、農夫にてこそはあらね、面白味も無き氣の小さな



る謹直三昧の人なり。

半白の髪の毛は割合に多かれども、光澤無く黄色に瘦せきつたる顔の、口の傍の條文、額の皺など目立って深く、光無き小なる眼、骨立って高き鼻、おちつきの無き起居動作、活氣の無き物の言ひぶり、すべての乾燥びたる状態は、如何にも能く此人の『人の子を誤るが如き強き人』ならで』決して人の子を害はぬ古りたる教育家』たる事をば現しめせり。

高田は今水野の來り訪ふに會ひて、一昨日も昨日も會ひたる同士なるに、三年四年も隔て、面を見たるもの、如く、慇懃に時候の挨拶など管々しく仕て、三十匁ばかりの廉價茶を事々しく湯を冷ましなどして入れ、隠れ蓑、隠れ笠、打出の槌なんどの寶盡しを描きたる水金の光り爛々とする菓子鉢に、三月も前より盛られし儘かと想はる、やうなる最中の月の淋しげに干縮りたるを、

『何様ぞ詰らんものですが御摘みなすつて。』  
と叮嚀に薦め、何時用事を云ひ出すべき氣色も無く、興も無き世の噂、

他所の事をのみ、熱心も無く氣咎も無く、溫和に冷靜に打語りたり。

水野も初は謹み居しが、終に堪へ得ずして口を開き、

『山路の老人に御言傳でしたので出ましたのですが、御用を何様か伺ひ

たいもので。』

と促すが如くに云い出づれば、

『イヤ、何様もハヤ詰らん事で、』

と磊落らしく右の手を上げて頭髮を撫でしが、やがて然もく決心したりといふやうに眞面目になつて自己が膝を見詰め、

『水野さん決して御怒りなすつてはいけませんよ。萬已むを得んからは

非無く御話しを致しますがネ。これも小生の地位から致しまして詮方

が無いので、何様か惡からず御解釋を願ひますのです。實は貴下の

御評判が甚だ思はしくないので。イヤ小生は何所までも貴下を信じて

居りますから、他が何と申しても關ひませんが、何様も種々の事を

申しまするので。ハ、、、世間といふものは煩いものでしてナア、信

仰の自由といふ事は嚴然と許されて居りまするのに、貴下の事を妄信

に陥つたの何のと申しましてナ、其は又斯様いふ理由からだの彼様いふ仔細からだのと下らん事を云ひましてナ、それで何様も兎角小生の耳へ煩い事が入ります。就きましては小生の考へまするには、貴下も其では生徒の父兄の手前や何ぞ、どうも教職をお執りなさり難いやうな譯ですから、一應此村の校の方を御退きなすつて頂いて、他の校へ行つて頂いた方が貴下の御利益で、又延いては校の爲にも聊か利益かと勘考致しましたです。御轉校の事は貴下の御不都合にならんように、必ず小生が取計らひまするから。』

と、辛くして云ひ出したる其の眞意は、我をして職を辭さしめんといふことなりけり。

高田は重大の事と思へるなるべし、水野は斯ばかりの事かと毛より軽く思ひて、

『解りました。早速御諭しの通りに致しませう。』  
と心易く答ふれば、高田はホット息をつける様なり。

其三

我が職務を卑む意などは露ばかりも有らざりしが、もとより一生を其任に委ねんとも思はざりしなれば、水野は難る色も無く職を辭せんと云へるに、高田は我が意の通りたるより胸は安くせしもの、却つて又對手の餘りに未練氣無きに薄氣味惡く、懸念らしく小き眼を瞬きて水野を見居たり。

『まかし水野さん決して御不快に御思ひなすつてはいけません、何様か感情を害して下さらんやうに願ひます。小生は何處迄も貴下を信じて居るのですから、貴下に校から離れて頂きたい心は更に無いのでして、長く貴下と圓滿な御交際を繼續いで参りたいのです。貴下は失禮ながら學力は御有りなさるし、なかく長く小學の教師などを仕て居らつしやる御仁では無いのです。が、差當つて校の方を離れて戴いては御困りでもございませうから、小生は小生の貴下に對する眞情を表し

て、貴下を他所の校へ御周旋致しましょうと存じて居ります。何様か小生が貴下に對する敬意を御汲み取り下すつて頂きたいもので。』

と、是もまた三十匁の茶を入れるゝに湯を冷まして後にするが如く叮嚀に言へば、水野は他に憎まれじとする心遣ひの、いと明らかに見ゆる此の半白の教育家を、惘然に思ふやうの情も起りて、

『はい、有り難うございます。御高情はまことに有り難うございます。

御言葉に甘えまして何處かへ御周旋を願はなくつてはならんのですが、ゑかし小生は何様も教鞭を執るには適せんやうに思ひますから、差當つて他所の校へ参りたいとも存じませんです。御厚意は何處までも有り難く存じますけれども、當分は遊んで見たいと思つて居ります。それでは辭表は明日早速差し出しますから、何分宜しく御計らひを願ひまする。』

と、飽まで謙退して柔和に應へたり。

水野が面に怨氣をも盛らずして、平常の如く何氣なき言の調子に職を辭せんといいふを聞き、高田はやうやく荷を下したる心地してか、

『や、それでは當分御遊びも宜しうございませう。疾から小生は貴下を目して、蛟龍永く池中のものたらずと申して居りましたのです。ハ、ハ。何様か今後何分御見棄無く御交際を願ひまする。』  
 と可笑くも無きところに磊落めかして妙に笑つて、最後には改めて肘を張つて堅くろしく頭を下げて一禮すれば、水野も是非なく禮を返して、

『いや今後の御交際は小生の方からこそ願ふべきで、では今日はこれで失禮致します。』

と慇懃に挨拶して辭し歸りたり。

區々たる職と些々たる俸給とは、之を得るも之を失ふも一羣一笑にだに價せずと、水野は其事を繰り返しても思はず、たゞ猶微かに残れる醉を吹く風の薄寒きを覺えつ、歸り着けば、お濱は待ち兼ねしが如く飛で出で、茶の間に迎入る、や否や、満面に笑を輝かしつ、他人には何言ふ間をも與へずして、  
 『今先生と入れ違つてネ、彼の尾竹が變に威張つて遣つて來ましてネ。

とう／＼此方こつちのものに仕た、もう大丈夫だ、もう屹度きつとうけあ保證ひます、もう宣ようございます、もう是これからは快癒なほるばかりです、必ずかならず五十子いそこさんは本復ほんふくするといふ見込みみこが立ちました。水野みづのさんに十分じゅうぶん悦よろこんで貰もらはな  
くちやあ、と云いつて今まで饒舌しやべつて行ゆきましたよ。嬉うれしいのネエ先生せんせい。  
妾わたし嬉うれしくつて！。ほんとに妾わたし嬉うれしくつて／＼！。』

と急せきに急せきて喜悅よろこびの音信おとづれを傳つたへたり。

お濱はまは我が此この言葉ことばを聞きくと齊ひとしく水野みづのの如何いかに悦よろこびて笑あむならんと思おもひ設まつけつ、心樂こゝろたのしみにして水野みづのの面おもてを差視さしのぞけるに、悦よろこび極きはまつてか其その  
人は笑あまず、目まのあたりに神佛かみほとけを拜をがめるが如ごとき、敬つゝしみに敬つゝしめるが中なかに  
和やさしき見ゆる面おもてになつて、抑々おもて何なにをか見詰みづむるや頭かしらを斜ななめに、物ものも無なき  
空くう中ちゆうを凝然じつと仰あふぎたるが、見みる／＼動うごかざる其その眼めの中うちよりは、汪々わうく  
漣々れんくとして涙なみだの溢あふれたり。悦よろこび涙なみだとはこれなるべきにや。

## 其四

相良さがらにも尾竹をだけにも回復くわいふくの望無のぞみなしとこそは言いはれざりつれ、十じうに六七ろくぢちまでは危あやふく思おもはれたるらしき徴しるしには、變狀へんさへ無くば、變狀へんさへ無くばと、遁路にげみちのある保證うけあひの仕方しかたを爲されたる、其その重おもき病やまひに惱なやみし人ひとの、今は必かならず癒なほるべしとは眞實まことの事ことなりや、覺さめての後のちの口惜くやしかるべき夢ゆめの中うちの果敢はかな無なき悦よろこびにはあらざるや。あ、夢ゆめにはあらず、確たしかに現うつなり、虛妄いつはりにはあらず、確たしかに眞實まことなり。かつては人ひとの運命うんめいの頼たのみ無なきを悲かなしみて、訴うったふる方無かたなき我わが思おもひの、空むなしく流水ながれに描えがく文字もんじとなつて消ゆべきかを歎なげきしも、今は天地てんちの間に愛情なさけ有り道義みちぎ有あつて、神明佛陀かみほとけの慈愍じみんの御おん皆みなは人間ひとの上うへを離はなれず、愛護あいごの御手おんては一切いっさいの衆生じゆじやうを攝取せつしゆして捨てざらんと仕玉したまへることを思おもひ奉たてまつり、愚おろかしき一念いちねんの誠まことを籠こめて、他人ひとには言いへぬ心中しんちゆうの秘事ひごに、あはれ彼かの人ひとの壽いのちの無なきに定さだまれるるならば、我わが生命いのちを殺そぎ縮ちぢめても助たすけさせ玉たまへ、かかる道理ことわり無なき願ねがひを



掛け奉ること、愚にも愚なるをば知らぬにはあらねど、知りて猶已  
 まんとして已み難き胸の苦しきは、御覽はさぬところ無き神明佛陀の  
 見透したまひて、憫然とも思して我が心をば納れさせたまへ、と祈り  
 たりしが、彼の人の壽命の本より有りしか、我が命の彼の人の命を補  
 ひしかは知らず、大旱に萎れし玉苗の、一夜の露に蘇つて、田面を渡  
 る曉風には猶弱々と戦ぎながらも、はや行末の頼もしき榮を見する其  
 の色の青々と勢好きが如く、危くも心細かりし病の瀬を過ぎて、全く  
 復現世の光に美しく照らさる、やうになりし彼の人の運の目出度さ、  
 我が心の嬉しさ。思へば神明も佛陀も確に御坐す世なり。人間を包め  
 る運命は雲霧と冥くして得知れねども、其中に神明の御心佛陀の御心  
 は動き働きて、人間の抱く心のさまに酬ひたまふやうの氣とする。冥  
 くの中に靈しき力ありて神佛の意を受け、吉も凶も皆其力の爲る事の  
 やうにぞ思はるゝ。神明も遠からず、佛陀も遠からず、一念の微なる  
 動きも洩らさず知りたまふと覺ゆ。嗚呼、神明も佛陀も猶御覽はせ、  
 我が心の誠を邪無く、汚無く、偽無く人を思ひて、我が如何にしてか

有り果つべき我が世の末を見んとぞ思ふ。實に地を掘れば水に逢ひ、  
 壁を穿てば光に逢ひ、人の心の奥に入れば必ず神明佛陀に逢ひ奉る  
 ものと云へるも言ひ得たることかな。我今幸にして眼のあたりに利  
 生を仰ぎ得、冥々の中に御坐して果敢無き此の我を愛しみたまふ大慈  
 大悲の御心の忝きを感じて、此の嬉しさ有り難さ肺腑に浸み徹りぬ。  
 願はくは我長く此心を失はずして頼み奉らんほどに、猶行末掛けて  
 彼の人の上に幸福多からしめ給へ。我が身の幸福をば祈り求むればこ  
 そ、たゞ彼の愛好かれとのみ思ふころの、此の虚偽無き眞實を汲ま  
 せたまへ、と水野は默念したり。  
 そのよみづの其夜水野は何事を思ひつゞけしにや、更くるまで終に睡りに入らで、  
 二番鶏の唱ふ頃辛くも夢を結びぬ。たゞ思ふ人の病の快き方に向  
 へるを悦んで、おのが職を失へることなどは悔みもせざりしなる  
 べし。

## 其五

お濱は可笑さに堪へぬ如く笑ひを耐へながら、

『マア如是に晏く起きて置いて、而して變に沈着いて居らつしやるのぞ。先生、今日は日曜ぢやありませんよ。早速となさらないともう遅れますよ。彼人が快いもんで安心して仕舞つて、それで全然氣が弛んで御仕舞ひなすつたの。妙に今朝はゆつたりとして澄まして居らつしやるのネエ。何様なすつたの？、餘りだは！、をかしくつてよ。』と戯るゝが如く云ひしが終に堪へかねて、

『ホ、ホ、ゝゝ。』

と笑ひ出したり。

夢の名残を洗ふ朝茶の淡き味を樂みて、悠然として湯呑を手にして居たりし水野は此の笑に驚かされつ、實に我が心の中の昨日に今日は甚く異なりて寛なれば、外に現るゝ身の様子も、他には可笑しきほど變

れるなるべし。特に掌上てのひらに乗るばかりの微小わづかなる俸米ほうまいに繋がれても、職務つとめと思へば其職そのしやくを疎畧おろそかにせん心は無くて、身體からだの疲れきつたる時にも、氣合きあひの如何いかにしても進まざる折をりにも、強しひて勉めて果すべきだけの事ことを果したる、其の苦しさを今は免れて、起きるも睡るも心のまゝ、肩かたに荷には無き境界きようがいとなりたるを、まだ知らねばお濱はまの怪あやしむも無理ならずと微笑ほゑまれ、

『ハ、ハ、何も可笑をかしいことも何も有ありは仕ないよ。今日けふはもう學校がっこうへも何へも出でやあ仕ないのだもの、いくら沈着おちついて居ても可笑をかしい事こと有ありやあ仕ない。』

と輕かろく答へたり。

『ぢやあ今日は怠なまけて御休おやすみなさるの？。嫌いやな先生せんせいネエ！、何故御休なげおやすみなさるの？。』

『なあに怠なまけて休やすむ譯わけぢやあ無いが、今日けふツからは私わたしにやあ毎日日曜まいにちにちようなのだ。だからもう先生せんせいくつて云ふのも止よして貰もらはなくつちやあ。仕方かたが無いから今までは呼よばれて居たけれども、先生せんせいくつて云はれる

なあ、先せんから私わたしあ好きぢやあ無なかつたのだからネ。』

『あら、それぢやあ學校がくかうをもう御止およしなすつたの?。』

『あゝ。高田たかださんが止よしたら宜よからうといふから止よして仕舞しまふことにした。』

『何故高田なぜたかださんが其様そのんなことを云いひ出だしたの。憎にくらしい高田たかださんだことネエ、何故先生なぜせんせいに御止およしなさいつて云いつたの?。』

問はれては流石さすがに勇いさんで答こたふべきならねば、水野みづのは唯默然たゞもくぜんとして笑わらつて語かたらず。

『昨夜高田ゆふべたかださんところへ入いらしたしたのは其その事ことでしたか。』

『あゝ、』

『ほんとに可厭いやな高田たかださんだこと!。可いいは、祖父おぢいさんに左様さういつて叱しからせて遣やるは。左様さうして復先生またせんせいを舊もとの通とほりにするやうに爲させるは。』

『ハゝゝ。折角丁度止せつかくちやうどよして仕舞しまつたものを、其様そのんな世話せわを焼やかれちやあ却かへつて困こまるよ。打棄うつちやつて置おいて呉くれ無なくちやあ。』

『だつて、それぢやあ先生せんせいは、何處どこか他所よそへ行いつて御仕舞おしまひなさるんで

しやう。此様な詰らない村にやあ居て下さらないでしやう。屹度妾の家を出て行つてお仕舞ひなさるんでしやう。』

と云ひさして水野の面を凝然と見居たりしが、

『嫌だは、嫌だは、妾嫌だは！。祖父に左様云つて高田さんを叱らせるから宜いは。』

と眼に露持つて腹立しげに悶えたり。

『ハ、ハ、祖父が何程幅利でも、高田さんは高田さんだから、左様自由の利くわけのものでも無い。また私は今何處へ行くといふことも有りや仕無いから、矢張いつまでも此村に居るつもりだよ。』

『眞實？、眞實？、矢張いつまでも此家に居らつしやるの？。』

『あ、別に何處へ行かうと云ふ料簡も無いから。』

『嬉しい！。それぢやあ學校へも出ないで始終此家に居らつしやる。』

あ、そんなら學校なんか先生が止し仕舞つた方が宜い。澤山先生が此家に居らつしやるのだから。今後また先のやうに種々の面白い御話を仕て頂けるはネ。』

人の胸の中は更に知らず、飽まで我儘なる處女氣の長閑さに、水野は笑つて點頭かざるを得ざりき。

『これでもう淺草へも行らつしやらないと、眞實に好いのだけども。』  
猶不足氣に如是云ひて嫣然と笑める面つき、また無く美し。

## 其六

罪も無く念も無きお濱の願の是の如きには引かへて、水野が今朝差當つて先づ思へるは、淺草の御堂に詣りて心靜かに報恩謝徳の誠意を運び、かつは猶行末を頼み奉らんとこの事のみなりしなり。

されど淺草に詣らんと思ふ意の側には、強ひて求むるといふほどにはあらねど、若し機會よく我が御堂に詣りてより歸るまでの間に、彼の同情深き信心深き優しく懷しき不幸福の人に相逢ふことを得ば、願はくば相逢ひて一ト言二言の言葉をも交へたきやうの念も潜めるなり。昨日の談話にて、其人の詣るは、毎日大抵午前の事にして午後には詣りしは昨日のみなりと知りたれば、職務に縛らるゝ身の午前は我が自由ならで其人に再び行逢ふことも無かるべきを遺憾く思ひ居たるが、昨日に今日は變れる我が上の、今は何時參らんも心の自由なるまゝ、先づ彼の人の詣るといふ午前に詣りて、幸にして若し相見ゆることを



得たらんには、我が五十子の病氣の本復疑ひ無きに至りたる事をも告  
 げて、御佛の加護を悦び、彼の人の親切を謝しもせんとの念の潜める  
 なり。優しく懷しき彼の人に、我が五十子の甚危きところを免れて、  
 復び現世の日に照らさるゝに至りしことを、人を吸ひ入るゝが如き其  
 の愛深き笑顔に悦び欣びて貰ひたき念の潜めるなり。

水野はお濱が假初の語には耳を假すことも無く、やがて淺草さして立  
 出でたり。

幾度か往來し馴れたる路の、眼に古りたる景色は心の留まる方も無く  
 て、早くも御堂に到り着きたり。先づ常例の如く祈念を籠めて、少時  
 は何事をも思はざりしが、念じ終りて閉ぢたる眼を開き、下げたる頭  
 を擡げ、身を起して我が居たる四邊を見れば、夢の裏に現れ來る人の  
 聲音も無く衣の音もせずして俄然に我が前に湧き出づるが如くに、何  
 時か知らず、我が傍に跪きて御佛を念ぜる人ありたり。其の柔かに合  
 せたる掌の白々と殊勝氣なる、其の領のすらりとして見好き、其の髪  
 のめでたき、其の肩つきの如何にも女らしく優しき、其の横顔の能く

は見えぬながら櫻色に美はしきは、嗚呼我が相見んと希ひたりし其の人にあらずや。正しく昨日は見、今朝は思ひたりし其のお龍ならずや。御佛を念ぜし今少時の間のみ忘れ居たりし其の優しく懷しき親切の人ならずや。我が涙を濺ぎて聞きし不幸福の物語を有せる悲しき薄命の婦人ならずや。何ぞ其の掌を合せて念ぜるさまの哀れ深くして、首を垂れて思を凝らせるさまの人の心を動かすや。不思議にも何時の間にか此堂には参り合せたる！と思ふ時漸くに念じ終りてか、身じろぎして靜に女は立上りたり。

『……………』

『……………』

聲無くして其處に呼ぶ聲ありたり、應ふる聲ありたり、言無くして其處に語れる言ありたり、酬ひたる言ありたり。

## 其七

『昨日はいろく御厄介に、』

『いゝえ、却つて御迷惑でございましたらう。おとうさんが彼様な氣合の人だもんですから、御遠慮の無いことばかり致すうになりました。定めし御蔑視なすつた事だらうと、後になつて二人で左様申して居りました。』

『イヤ、どうして其様なことを思ふのですか。たゞ私は何の因縁も無い方にお世話をおかけしたのが濟まぬ様な氣がします。お會ひなすつたら彼の方に宜しく仰あつて下さいまし。』

『ホ、大層折目高に物を仰あること。彼の人は彼様した人なのてすもの、御氣にお掛けなさる事はありません。それはまあ何様でも宜いとしまして、今日は何でも無い日でございますのに、どうして今頃御いになりましたの。貴下の拜んで居らしつ御後姿を見まして、

妾は初は氣の迷ひかと思ひましたよ。だつて貴下が今頃御いでなさう譯は無いと思ひ定つて居たのですもの。』

『ハ、ハ、私はまた何時の間にか私の傍に貴嬢の來て居られたのに吃驚しました。』

『ホ、ハ、貴下が一心になつて拜んで居らしたから、吃驚なさらないやうにと思つて悄悄地妾も拜んで居りましたのよ。』

『それは兎も角も、今日若し貴嬢に御目にかゝれたら、先づ第一に御話をして、悦んで戴きたいと思つて居りましたが、御蔭様で病人も何様やら持直して、醫者が屹度本復すると保證つて呉れたやうなところ迄には漕ぎつけました。もう心配は無さ、うになりました。御案じ下すつた甲斐もあつて、御親切もまあ届いたと申すものでございます。ほんとに病人とは御縁も薄い貴卿が、かうして毎日々々歩を運んで下さつて、御願を御掛け下さつた御芳情はおろぞかには思ひません、病人が快くなりましたにつけても有り難く思ひます。今といつて今はどうおれい、何様御禮の爲やうも存じませんが、何ぞの折には屹度貴卿のために、

貴卿あなたの優しい御芳情おこゝろもちに對して其丈それだけの御返禮おかへしを爲なやうとは思おもつて居をります。費卿あなたの御芳情おこゝろもちは長く忘れわすれません。』

此この事ことを言いはんとおもふ意こゝろの充みち満みちたるに、言こと葉はも自おのづから勢いきほひ籠こもりて、口くちばかりの挨拶あいさつならぬは確しつかり乎かとしたる眼めつきにも著しるし、お龍りゅうは生き眞面目まじめに如かく是い云いはれては、眞触まともには當あたり得えざるやうの氣きも仕して、安やすか  
らぬ心地こゝちの竊ひそかに爲なればにや、たゞしは又また他ひと知しらぬ考かんがの別べつに有あればにや、  
我が祈願きぐわんの甲斐かひの見みえしを悦よろこぶとも無なく、水野みづのに斯かばかり禮れいを云いはれ  
しを嬉うれしと思おもふとも見みえず、却かへつて物差ものさしたるが如ごとく沈おち着つかぬ様子やうすに  
なりて、時々ときどきは見みても宣よき遠方とほくの額がくなどにちらくと其その美うつくしき眼めを  
辻すべらせて聞きき居あしが、

『まあ眞實ほんとにそりやあ何なによりの事こと、こんな嬉うれしいことはもうございませ  
ん。どんなにか貴下あなたの御嬉おうれしいこととございませう！。貴下あなたの御胸おむね  
の中うちを思おもつて見みますと、妾わたしも何なんだか嬉うれし涙なみだが出でさうになります。何  
も妾わたしなんぞが御願おねがひ申まをしたからといふ譯わけではございますまいが、あれ  
程ほどに一心いっしんになつて御願おねがひなすつた貴下あなたの御念力ごねんりきだけでも、佛ほとけ様さまが打棄うつちや

つては御置きなされなくつて、それで五十子さんが快く御なりなので  
 ございませう。ほんとに五十子さんは御羨ましい、御不幸のやうで  
 御幸福の方です。神様佛様の御憐愍さへかゝつて居る方ですもの！』  
 と末は誰に云ふとも無く言ひたりしが、はしたなしと思ひてや、調子  
 を變へて、  
 『歸りましたら早速師匠にも左様申しまして、御丹精甲斐の有つた事を  
 聴かせまして悦ばせませう。定めし屹度有り難がる事でございまし  
 やう。』  
 と言を添へたり。

## 其八

際限無く御堂の内に若き女と立ち話して參詣の老若に面見られんことの好ましからぬ心地すれば、水野は談の切目に本尊の方を一拜して、漸く下向の路に就かんとするに、お龍は間隔たらず連れ立ちては、遅々として却つて水野の歩を漚らせんとするが如し。

御堂の階段は降り盡しぬ。貴賤行交ふ長々しき石疊の路を二人は辿れり。こゝは賑はしからぬ時も無きところとて、ぼつくるの響き、雪駄の鳴り、人聲物音一つになりて、たゞがやくと譯無く騒がしく、七子の袖は擦れ違ふ縮緬の袂、矢の字の帯は觸る海軍帽、甲家の旦那様乙家の奥様、女の兒も男の兒も目まどるしく往來すれば、遂げては我も他を見るに由無く、他もまた我を見るに由無く、能くは他の談も耳に入らねば、我が談もまた他には聞えぬなり。お龍は此の中を連れ立ちて歩きつゝ、ややもすねば獨立ちて先に行かんとする水野を追ひかくる

やうにして、

『アノ、今日は御休みの日ぢやあございますまいのにネエ。わざわざ御休みなすつて御禮参りにいらした譯なの?。』

と、若し然もあらば、餘りに彼の人の事を思ふ心の強くして、何も彼も忘れ果てたるが甚し過ぎたりといふやうに、聊か笑を含んで問ひかけたり。

先刻にも受けたる問ながら、答ふるも煩はしと思ひて顧ざりしが、今又如是様子に問はれては黙りても居難く、

『ハ、ま、まさか左様いふ譯でも無いのですが、丁度職務は辭して仕舞つたので、それで萬一したら貴卿に御目にかゝれやうかといふ考も有つて、平日よりは早く出て來たのです。仕合に巧く御目にかゝる事が出来て、聞いて戴かうと思つて居たことも聞いて戴いたので、悉皆思つた通りになりましたが、これも下らない職務なんか廢して仕舞つた故でしやう、ハ、ハ、ハ。』

と軽く打笑ひたり。



水野は軽く打笑ひたれども、職務を棄てたりといふ事の、お龍には輕からず聞えやしけん、其の眉を顰めて心配げに、

『お職務を御止しなすつたのですつて！。何故其様なことをなすつたの？。何も御困りなさる様な事は御有んなさりやあ仕ますまいけれどもネエ、何だつて其様な事をなさいましたの。そんな事をなさら無くてもぢや有りませんか。』

と満腔の同情より私に生活の道の便宜惡かるべきを氣遣ふものの如し。

『ナニ、別に無理に辭めたいと思つたのでも無いのですけれども、辭めさせられて見れば仕方がないわけですもの。』

『だつて、何故ネエ？。餘り御不勤でもなすつたの？。』

『イ、ヤ、そんな事は決して爲ん私です。』

『ぢやあ其様な事になる譯が無いぢやあ有りませんか。もしそれぢやあ萬一したら五十子さんの事で評判でも立つて、其の爲といふやうな譯ぢやあ無くつて？。』

『ハ、云はゞ其様な事の爲なんでしやうが、何様でも其様な事は構やあ仕ません。まさか下らない職務を止したからといつて困りも仕ますまいから、いつそ卑小な職務なんかに縛られない今日の方が宜い心持が仕ます。』

『そりやあ左様でも御有んなさりましやうが、でもまあ差當つて……………。ほんたうなら五十子さんの御母さんが何様にでも仕てあげるのが道なんですけれども。』  
何をおもふ、お龍は言ひ澱んで考に沈みしが、水野は却つて訝訝として、

『ハ、決して何も心配して下さらんでも可いのです、考案があるのですから。信心を仕て、愚だと云はれて、擯斥されて仕舞つた、こんな馬鹿でも、男は矢張り男ですからネ。イヤ此處で失敬しましやう、左様なら。』

と書生風に淡泊に挨拶して別れ去らんとす。何時か石路は既に歩み盡せるなり。

何にか心を奪られ居しお龍は、水野の告別の辭に打慌て、

『ぢやあ明日また御眼にかゝれますの？。』

と辛くも一句問ひかくれば、既に十餘歩を隔たりし水野は無言に點頭

きて、情無きが如く其儘終に東に去りたり。

去り去る百歩餘りにして、水野は徐ろに首を回して見れば、人の繁く

くるまの煩きが中に猶悠然と立つて、我が方をや見送り居たる、お龍の面

の花と白きが仄かに見えたり。

## 其九

疾病のやうやく快くなり行くさまを、薄紙を剥ぐが如しとは誰が云ひ  
 初めけん、さしもに一時は危かりし五十子の、天壽いまだ盡きねば  
 人力効ありて、實に此頃は薄紙を剥ぐが如く、日に日に少しづつ快く  
 なりゆけば、年齢の勢も藥餌の能もこゝに現れ來りて、一陽來復の機  
 待ち得たる若樹の、猶雪には籠められ氷には鎖されながらも、既に漸  
 く芽をも蕾をも含み居て、やがて春風の渡らん曉に誇らんとするが如  
 く、寔れ果てたるが中にも、はや行末の榮ゆる色は微見ゆるに至れり。  
 されば愁の雲厚く蔽ひて、火の消えたるやうに陰氣なりし此の家の、  
 五十子が面の色の美くなり行くに連れて、一室の中は日の出でし如  
 く賑やかになり、先づ年少の松之助より何ぞに付けて笑聲を洩せば、  
 元氣溢るゝばかりの看護婦も折節は高笑ひして、こゝは人々の機嫌も  
 好く、談話聲も冴ゆる、陽氣の家と打て變りたり。

體溫は高下少くなりて漸く平常に復さんとするの勢を示し、脉搏は猶弱けれども走らず澁らずして危険の虞の既に去りたるを現せり。恐ろしき熱に悩める日の少からざりしかば、肉は落ち骨は立ちて、今猶一人しては何とする事も叶はぬほどに衰へ果てたれど、一昨日より昨日は好く、昨日より今日は確乎として、病勢の烈しかりしに纖弱き婦人の身なれば衰弱こそ尋常越えて甚しけれ、これより五六週間も立たば、必ず病まぬ往日の健康に回つて、日々の勤務を執るに至るを得べしとの相良尾竹の言葉も偽りなるまじく思はれぬ。

五十子が状態是の如くなれば、松之助は自ら熱き乳を薦めたる或曉、其の姉の面をつくぐと打護りて、

『もう大丈夫だ、もう大丈夫だ！。ほんとに怖いと思つた時也有つたけれ共、とうく僕の姉さんは僕の姉さんになつた！。』

と無邪氣に叫び出して笑ひ悦び、相良が手より來れる看護婦の芳野は、或夜體溫表を記し終れる次に、其表をつくぐ眺めながら、

『マア宜かつた事、もう如はいふ様子になつて來れば心配は無い。一時

はほんとに何様なるかと思つたけれど、マア患者さんも幸福、私も幸福で、患者さんは辛棒甲斐があり、私は看護甲斐がある事になつて、相良さんに對つても面目がある!』

と獨語ち、又、吉右衛門に命けられてお澤が許にありて人々が爲に難事の勞を執れる下婢のお鹽も、

『水野さんの念力だけでも治癒ると人が言つたが、ほんとに可怖いものだ! とう／＼治癒るだあ。病の高じた時あハア、何様しても彼世へ迂り込みさうな様な顔を仕て御座つた彼の人——彼の危かつた人を取り止めることが出来たかと思ふと不思議でならない。おらあハア始めて人の念力といふ可怖いものを目の前に見て魂消た。醫者業ぢやあ無いだ、全く醫者業ぢやあ無いだ!』

と下司の常とて言葉こそ多けれ、これもまた五十子が回復を悦べる數には洩れぬに、たゞ彼の強慾のお澤婆のみは、

『生きたつて面白いとも定つて居ない世の中に、とう／＼彼の人も生残つたやうだ!。まだ業が滅しないので死ねないと見えるだ!。水野の

世話で死な、かつた丈に、却つて今後が面倒らしい。無錢で買へるものは一つも無いだ！、借は返さずには眩度濟まないだ！。物を取れば代りを與る、借りた茶は茶で返す、酒は酒で返す！。人の親切は何で返す？。生命の恩は何で返す？。生きたが彼の人の幸福だか何様だか？。病氣は無くなつただらうが、可厭なものが残らう！。死損つて氣の毒の様な！。治つてから彼の人が何様な氣持がさつしやらうかさ！。業が盡きないだ、業が残つたゞ！、何癒ることが芽出度いに決るかい！。』

と、頻りに松之助やら看護婦やらの尾に従いて悦べるお鹽に對つて、例の如く憎さげに冷笑ひて言ひ聞かせたり。

## 其十

凝れるものを觀れば石あり壁あり。生ふるものを觀れば雜草おり百合あり。同じ人間にも、一生おろかしく衣食のために逐ひ使はれて、猶其の足らざるを憂ふる額の皺を深々と疊み、おのが働きの無きは省みずに、他人を恨み世を謗りて甲斐無く悶えながら老境に入るもあり、又生れつきの心の丈高く胸の海濶くして、此のむづかしき世に身の取り置き拙からず、憂さも苦しさも、するりと切り抜けて、屈託せぬ顔色上に居る月の、澄し返つて暮すやうなる優れ者もあるなり。

お龍は自己が身の上の今の果敢無さを羞らひて、我が口より我が友なりとは憚りて云はねど、彼方は何處までも隔意無く、お龍を友とも妹とも待遇ひて、親身も及ばず優しくするお形といへる一美人あり。

叔母が無理壓制の婿取沙汰を厭ひて、駿府を脱け出で、東京に來りし時、お龍が先づ頼りしは此女にして、お龍と共に淺草に遊びし日水野



に遇あひて、水野みづのをして其その美びに驚おどろかしめしも此この女をんななりけるなり。

お形とうが身分みぶんを問とへば、世よに聞きこえたる一代いちだい分限ぶんげんの筑波つくば何某なにがしといへる六十男むそをとこの外妾ぐわいせうに過すぎぬなり。然さなり、藥研堀やげんぼり附近あたりに數寄すきを凝こらせる家を構かまへて、賑にぎやかなるが中なかに靜閑しづかに暮くろすほどの贅澤ぜいたくを縦ほにし、美衣びいを纏まとひ美饌びせんを口くちにし、萬般よろづ幸福しあわせに世よを経ふるとはいへ、實まことに其その身分みぶんを問とへば外妾めかけには過すぎぬなり。

されどお形とうは人ひとの正室つしまたるを得えざるが故ゆゑに身みを日陰者ひかげものの其位それに安やすんぜるにはあらず。今いまを去さること七年しちねんほど前まへの事ことなりき。筑波つくばが其その正妻つしまを失うしなひし時とき、面おもての美うつくしさばかりに迷まよひ溺おほる、がごとき痴漢おろかもならぬ筑波つくばは、よくよく見定みさだめたるところやありけん、お形とうを引ひきあげて正室つしまとせんとは云いひたりしなり。されば其時そのときお形とうにして強しひて辭いなみ立だてだにせざりしならば、今いまは此この世よの表面おもてに立たちて、立派りつぱに筑波夫人つくばふじんと崇あがめ仰あふがれ、夫おつとの勢力せいりよくの及およぶ境域さかひには反身そりみになりて誇ほこりて生活くちすことの叶かなふべき筈はずなるを、我われから我わが出世しゅつせを遮とどり止とどめて今いまも猶なほ外妾めかけたるなり。

筑波つくばが引ひきあげて正室つしまとせんと云いひし時とき、お形とうは如何いかなる意こころにて之これを

辭いなみしか知しらず。されど其その外そとに現あらはれたるところにては、お彤とうは  
 一向ひたすら謹つつしみ慎つつしみて、

『妾わたしを引ひき上げて下くださうとい御お召ぼし召めしは嬉うれしうございですが、妾わたしは實さと家とも  
 無なく後うしろ櫛だても無ない身みですから、左さ様よう仰おつしあつて下くださるから好いいはで成なり上あが  
 りましたら、人ひとの謗そしり嘲あざけりは何どの様ようでございませう。其それも妾わたしが惡わるく  
 云いはれるだけで濟すめば宜ようございしますが、針はりほどの事ことも棒ぼうほどに云いひ  
 たがる人ひとの口くちですもの何なんぞの折をりには妾わたしのことを云いひ出だして、彼あ様んなも  
 のを引ひき上げたのは何なに事ことだと、屹きつ度と貴あなた下をを惡わるく云いはずには居をりません。  
 よし何なにを人ひとが云いつたつて氣きになさるほどの弱よわい貴あなた下をでは無なくつても、  
 妾わたしの所せ爲ゐで貴あなた下をの金はく箔はくを剝おと脱とすのは妾わたしは嫌いやです。どうせ今いままで日ひ陰かげ者もの  
 で濟すまして來きた妾わたしですもの、いつそ一いっ生しやう日ひ陰かげ者もので濟すまして終しまつて、人ひと  
 に目め角かくを立たてられずに生く活かつした方はうが性しやうに合あひさうです。貴あなた下をさへ見み棄す  
 て、下くださらなければ、自じ分ぶんが出しゅ世つせして貴あなた下をを惡わるく云いはせやう氣きはござ  
 いません。』

と、いと眞ま面め目めに道だう理り正ただしく斷ことわれるのみか、扱さて打うち解とけて碎くだけて笑わらふ醉よひ

の後などには、面と對ひて遠慮も無く直接に、

『正室になりやあ正室だけの荷を背負はなけりやあなりませんからネ。力ちからの無い妾わたしが其様な事ことを仕して肩かたを凝こらすよりやあ、氣樂きらくにして斯樣かうして居ゐる方がマア宜よさ、うですから。』

と云いひて肯うけがはず。乗のらば乗のるべかりし玉たまの興こしを自みづから棄すて、吝おしまざりしかば、某子なにがし、しやく爵ひめぎみの姫君つくばは筑波つくばの妻つまとして今いまの榮華えいぐわを受け得えたまふに至いたりしなり。

されば筑波つくばはお形とうを日陰者ひかげものとして世よにこそ隠かくし居をれ、之これを愛めで重おもんずることは今いまの正室つまにも勝まされり。

お形とうは是かくの如ごとくにして此この世よにたゞ一人ひとりの筑波つくばの意こころを失うしなはざらんとする外ほかには、何なんの心こころを用もちひ氣きを勞つからすことも無く、年としの首はじめより年としの尾おしりまで、身みの周圍まわりの物ものより庭にはの隅すみの草木くさきまで、一切いっさいを榮華えいぐわの頂上てつべんの仕度したいざんまい三昧ふるまに振舞ふるまひて、誰たれに苦情くじやうを云いはる、ことも無く日ひを過すごせるなり。

## 其十一

六疊ろくでふの茶ちやの間ま、茶ちやの間まとはいへ大抵たいていの家いへの客室きやくまより美しく、柱はしらより敷居しき鴨居かもゐの木口きぐちの結構けつこうさ。格くの配ばいりに物好ものずきを見せたる細骨ほそぼねの纖巧きやうなる二間にけん四枚よんまいの障子しやうじに、繼目つぎめ無しの紙かみは雪ゆきより白く椽えんの方かたより光線くわうせんを取りて、上うへは嫌味いやみ氣無けなき桎まじの天井てんじやう、下したは縁無へりなしの備後表びんごといふ室まの内うちの、好よきほどに据すゑられたる多分いづれおほた太田おほたあたりで指ささせたるらしき島桑しまぐはの長火鉢ながひばちと、其その横手よこてに置おかれたる思おもひ切きつて立派りつぱなる支那製しなせいの紫檀したんの茶棚ちやだなとは、先まづ入いるもの、目めを惹ひきて、此家こ、の女主人あるじの十二分じうにぶんに財たからに富とみ足りて、且かつは其その勸工場品くわんこうばものに望のぞみ足たれりとするやうなる没趣味者わからずやならぬを示しめし、壁かべの塗ぬり色いろ、押入おし入れの襖ふすまの模様もやうまで、すべて釣合つりあひてしつとりと整と、のひたるが中なかに、おのづから薄手うすでならず又またわびしげならで飽あくまで『良よいもの好ずき』『粗い惡やなもの嫌きらひ』『趣おもむきは見みえたり。』

『お龍りうちゃん、お前まへ御客様おきやくさまらしく仕し無ないでも、もつと此方こつちへ寄よつて御おあ

たりナ。』

大島紬は好いものなれども、何處となくぼやついて、すつぺりとせぬが厭なり、平常着は此に限ると、平生御召縮緬を着通せるお彤の、今も相變らず其品づくめの衣服つき見よく、絹物の坐蒲團の上に居て、火鉢より南部の鐵瓶を重さうに取り下しながら斯く云へば、

『え、姉さんのところへ来て御客様らしくなんぞ仕や仕ませんがネ、まだ火の傍へ行きたいほど寒かあ有りませんもの。』

と笑ひつゝお龍は言に従つて聊か坐を進めたるが、實に其の顔は見るからが冴々しく櫻色に艶にして、如何にも此の頃の寒さ位は何とも思はぬらしき様子をあらはせり。

お彤は坐を進むるお龍が頭髮を一寸見しが、女同士の談の緒は先づ其より解る、習なり。

『今日もまた束髪にしておいでだネ。此節は何時見ても結つては居ないのネ。』

『ハア。姉さんでさへ矢張束髪になさるぢやあ有りませんか。まして妾

なんか。出る先に立つて一々人手を假りるのが億劫なものですから、  
つい自分でもつてぐるぐと巻いて仕舞ふので。似合は無いで可笑く  
つて?。』

『ナアニ似合はない事は有りやあ仕ないよ、ぢやあ今日ももう何處かへ  
御出だつたのだネ。』

『ハア一寸。』

こゝに至りて女主人は其の美しき面に微笑を泛めて、

『當て、見やうかへ。』

と戯るゝが如く云へば、お龍は言も無く莞爾と笑みて親しげに軽く  
點頭けり。

『屹度また淺草へ御出だつたのさ。』

『いゝえ。』

『なに、いゝえの事が有るものかネ。ソラく口は詐をお云ひでも顔は  
正直だよ、ハイ觀音様へ參りましたと、その笑つて居る眼が、チャ  
ンと左様いつて居るよ。』

『ホ、ホ、ホ、。』

『ホ、ホ、、それ御覽、御手の筋だらう。御精が出て眞實に御奇特の事だネエ。』

『あら姉さん、調戲つちやあ厭ですよ、あんまりですは。』

『左様さネエ。何も彼の人に御會ひでも無かつたらうに、調戲はれちやあ慙然だつたネ。』

『もうようござんすは、澤山いろんな事を仰あいよ。今日も不思議に落合つて會つて來ましたは。』

『オヤツ。そんな譯は無いぢやあ無いか。今日は平常の日だし、彼人は職務が有るつていふ談だつたもの。ぢやあ矢張打合でも仕て御置きだつたの?。』

『いゝえ、そんな事は有りあ仕ませんがネ。彼の人が職務の方を辭して仕舞つたので、それで今日は御午前に出て來たつて云ふんで。ひよつくりと御堂で會つたわけなのです。』

『へーエ、職務の方を辭したつて……。あ、解つた免されたんだネ。』

『左様なのよ、事實は免されたのですつて。其について姉さんに些お願があつて來たのですがネ。』

と、やゝ眞になつて談話をせんとするお龍の眼色を見て、お彤は輕く一寸制止めつ、

『御待ちよお龍ちゃん。彼室へ行つてから緩々と談を聞かうから。』

と、奥の方を指さし、

『あら姉さん、此室で澤山だは。』

とお龍の云ふを打消して、

『妾が茶の間に居るの、嫌なのはお前も知つて居るぢや無いか。』

と遮り、さて下手へ向つて小間使のお春といへる可愛らしき兒を喚び出し、

『妾の部屋の茶道具を能く清潔に仕てネ、そしてまた彼室へ持つて行つてお呉れ。お茶は妾が自分で淹れるからネ、お前は御菓子を出して、……ア羊羹はいけない、玉簾の方を切つておいで。』  
と命令け、



『さあ此方へ御いで。』

と立上つてお龍を奥へ伴へる時、恰も時計の音は三時を報じたり。

男にもいろくあれば、女にもいろくありて、まことにお形は今みづから言へるが如くに、平生長火鉢の前に坐りて茶の間<sup>ま</sup>に在ることは悦ばずして、おのが室と定めたる小座敷に端然として居ることを好めるなり。されば是程の好き茶の室をも、一ト風ある氣性からは、床の間さへ無き室と賤しく思ふなるべし。

## 其十二

市中まちなかの事ことなれば廣ひろくはあらねど、特わざと花物はなものを嫌きらひたる常磐木ときはぎのみの庭にはの、見みえぬところひとに人の手ての十分じゅうぶんに用もちひられたる證しるしとて、枝々えだくは好きよきほどに折おり合あひて茂しげりながら、隈々くまぐは汚むさからで明あかるく、わづかに大おほからず小ちひさからぬ燈籠とうろう一つの形かたちも佳よく時代じだいもありて一寸面白ちよつとおもしろきがほかには、別べつに此これといふ價ねの高たかき樹きも珍めづらしき石いしも無なけれど、一體いったいの調子てうしには、蟠屈わだまりな無なくすらりと、幽閑しづかにして、特設こしらへ氣きも無なく、見みる眼め安やすく穩和おだやかなるところに自然飽おのづからあかぬ床ゆかしさありて、夏なつは梢こすえに新月にひづきの低ひくう懸かる宵よひ、不如歸ほととぎすの一ひト聲こゑをも待ち得えば嘸さぞとおもはれ、冬ふゆは雀すずめ膨ふくる、寒さむき日の雲くも破やぶれて時雨しぐれはらくと落おつる夕ゆふべ、或あるは又雪またゆきの薄綿うすわた萬物ばんぶつを包つむ曉あしたなど、如何いかにと忍しのばるゝばかりなり。

されば折をりふしは此家こゝにも出入でいりする筑波つくばが氣きに入いりの骨董屋だうぐやの老漢ぢやまに、利齋りさいといひて、内々ないくは茶道ちやだうてんぐ天狗てんぐの小賢こざかしき男をとこ、此この庭にはを見みて、

『猫の額ぐらゐの庭だが彼の人の住居に彼の庭は何ともいへない。庭の出来が好いばかりでは無い、彼のこつくりした素樸の景色の中に、繪の浮いて出たやうに美麗な福相の美人の彼の人澄まして居る對照といふものは、何のことは無い、茶壁の、何も無い床に一輪の白牡丹を活けたやうなもので、一ト層人の眼を驚かす。彼の人が花だから花は要らない。これを思へば花と見られるほどの容姿も無い女なぞが、自分の庭前に花を植ゑたりなんぞして妙に優美がつて好い氣になつて居ても、下手に花の近傍にでも彷徨かうものなら、宛然海棠の下で狸がチンチンでも仕て居るやうに見えるのが多い。茶道を知らない奴はまあ其様なものだが、彼庭が彼の人の好みで出来たといへば彼のお彫さんといふ人は顔が美いばかりぢや無い、何も彼も解る人だ、中々一ト通りや二タ通りの人で無い。道理で物品買つても買ひつ振りが可い。そして倦きつばい彼の筑波さんが、何年といふものこびり付いて居る。どうも偉い、茶道を知つて居るから何様も偉い。』

と、自己が高慢を交せて評したる事ありき。

家の一角の小座敷の、僅四疊半には過ぎねど、此の庭を東南に受けて、  
 陽氣なれど廂を長く仕たれば明る過ぎず建てられたるが中に今しもお  
 形お龍は相對して坐れり。薩摩杉の天井板の木理美はしく、根岸茶の  
 壁の色沈着きて、床にはお形が好みか筑波が好みかは知らず明人らし  
 き書の小幅を掛けて、棚にはこれは慥に主人が玩弄に疑ひ無き繪卷な  
 ど取り繕はず載せたり。出入口、窓の取り方なんと總べて茶室めきた  
 れど、金を掛けることは嫌へるにや爐は切りてあらず、一面に美しき  
 敷物の敷きつめられて、一方の隅には今物ならぬ女用の螺填の黒き小  
 机の、漆光は既に脱けて好き頃に古びたる善美いふばかり無きが上に、  
 同じやうなる手の小さき硯箱置かれ、机下にも同じやうなる手匣の置  
 かれたる、此の前は女主人が常の座處なるべし。  
 お形は今其座を背後にして、是真が蒔繪の桐洞の手爐の小さきを横手  
 に、此方々向きて茶を淹れ居れば、お龍は清楚とこそ仕て居れ、おの  
 が銘仙織づくめの衣服の身の、居るには憚らるゝほどのお納戸緞子の  
 蒲團に、や、安きかぬるが如く坐りて、客といへば客ながら、おのづ

から貧富の相違に壓さる、氣味あるを如何とも仕難く、たゞおとなしく内端に控へたるが、猶持つて生れし氣象の徳には少しも萎げぬ顔つきは我は我だけに冴えて、毫末の隔て氣も無く人を親む眼の中涼しく相對へるさま、たとへば一人は晴の日の晝に笑へる牡丹ならば、一人は野の風のそよ吹く秋に、寒さ知らぬ色して咲ける木芙蓉ともいひつべし。

## 其十三

古薩摩か古九谷とありさうなところを然は無くて、永樂あたりの  
稀品なるべし、形状品格佳くして彩釉快く麗はしき京焼の茶器を、  
五指白玉の如く美しき手に自ら扱ひて、既に鍍目の銀瓶の湯を徐々に  
注し終り、今や一盞に玉露の花香を湛へて、お彤はこれをば與へ遣り  
つ、鍋島の菓子皿をば又聊かお龍が方へと推進めたり。

お龍は心底より悦びて茶を味はひつ。

『いつでも眞個に勿體ないやうな佳良な御茶ネ。』

『ホ、お茶ばかり褒めずとも淹れ方も褒めて、お呉れな。』

『ホ、そりやあもう、口へ出しては云はなくつても……。』

『オヤ左様、嬉しい人ネエ。ぢやあまあ澤山御菓子でも御食りなす

つて。』

『厭ネエ、ふざけて！。姊さんは人が悪いは。』

とお龍りゅうは一寸ちよつとおこ瞋おこつたるやうな顔かほして云いひ、

『それに此この御菓子おくわしは妾わたくしは澤山たくさんですよ。』

といふ。

『嫌きらひ?。』

と女主人あるじは輕かるく眞面目まじめに問とふ。問とはれて莞爾にこやかなる舊もとに復かへりながら、

『まあ左様さうなの。』

と氣きの毒どくさうに答こたへたるは、思おもはず我わが好すき嫌きらひの我儘わがままを口走くちばしつたる  
無遠慮ぶゑんりよを差はちて、今いまさら詮方せんかた無なくも猶なほ少すこし曖昧あいまいに言葉ことばを濁にごせるなる  
べし。

『いけなかつたネエ、甘味嫌あまいぎらひとばかり思おもつて居ゐて此品これが嫌きらひだつた  
とは知しらなかつたよ。もつともネ、一體いったい此これは御茶おちやにも餘あまり賞ほめたもの  
ぢやあ無いの。そればかりぢやあ無い、鳥貝とりがひの御鮎おすもじだの玉簾たまざねだの  
といふものは、惡わるく氣取きとつた女ひとに食たべさせて遣やれなんぞといふ位くらゐのもの  
のだつたのに、つい妾わたくしが氣きが注つかなかつたよ、堪忍かんにんおし。今他いまほかのもの  
を何なんぞあげるから。』

『何故？。氣取つた女が何様か仕でもするの？。』

『ソレ烏貝はお前早くは咬み切れないし、玉簾はホロ／＼と零れ勝だし辛くはあるしするからネ。いつまでも口をムグ／＼させて居たり、だらし無く膝を汚して、そして辛さを辛抱する泣顔を仕て居たりするのなんぞは見好いものぢやあ無いからさ。』

『あらッ！、妾あ其様な譯で嫌ひだつていふのぢやあ有りませんは。姊さんのところへ来て一寸だつて氣を置いてなんぞ居やあ仕ませんのに。好うござんすよ、一人で悉皆頂いて仕舞つて、其邊中食べ零して、そうして澤山見つとも無い泣顔をして、笑つていたゞきますから。』

『ホ、ホ、ホ、ホ、ホラ始まつたよお龍ちゃんの癩癬が。だがお前が一寸口惜しいといふ思入をすると、色艶は好し、眼は清しいし、眉毛は奇麗だし、それが悉皆役に立つて顔中が活きて見えて来て、ほんとに婀娜で可憐らしいよ。』

『好うござんすよ。』  
此度はいよく瞋りていよく言葉少く、恨めしげにぞろりとお彫を



睨みて、つんとして其の儘横を向かんとせしが、閑事は兎に角、云は  
で叶はざる用事はあるなり、霎時間を置きて面を擡げ、

『ネエ、姉さん、今彼室で云ひかけたのはネ、眞個に妾の御願ひの事な  
んですから聽いて下さいましな。』

と、心配氣にお彫が面色を見ながら、いつはりならず心を籠めて云ひ  
出したり。

『あ、可いとも。お前の御頼みの事なら何でも聽いてあげるとも。』

此は極めて易らかなる語氣のいと輕き答なり。

『ほんとに？。』

此方は力を入れて重ねて問へば、彼方は沈靜きつて平氣に、

『あゝ、ほんたうにさ！。』

と事も無げなり。

『あ、姉さん有り難うございます、一生記えて居ますよ。ぢやあ申しま  
すがネ。かういふ譯なんです。』  
と説き出さんとするをお彫は抑へて、

『可いよお龍ちゃん、かういふのだらう。彼の水野さんていふ人が職務を離れたに就いちやあ、何様か彼の人を困窮せたく無いので、妾に口をきいて貰つたら家の旦那の方にも好い口が有りやあ仕まいか、出来る事なら好い口を捜し出して持つて行つて遣りたい。と、かういふところからのお前の御頼みなのぢや無くつて?。』

と全くお龍の胸の奥の文を鏡に取りて見る如く云ひ出したり。  
云はれてお龍は驚いて眼を睜り、

『まあ、何様して然様不殘姊さんは知つて、?。姊さんの智慧の深いのは前から知つてますが、ほんとにまあ、何様すれば其様に人の意が解るの?。妾あ餘り其の通りなので怖いやうな氣が仕ますよ。全く然様いふ譯の御願でわざく來たのですが何様いふものでしやう?、姊さん、聽いて下すつて?。』

と正直になつて頼み聞ゆるを、お彤は憐むが如く憐まざるが如く冷かに見やりて、

『頼みを聴くも聴かないも有りやあ仕ないがネ、お龍ちゃん、お前そり

やあ詰<sup>つま</sup>らない事<sup>こと</sup>だらうよ。』  
と、いと物静<sup>ものしづ</sup>かに先<sup>ま</sup>づ一句云<sup>い</sup>ひ斷<sup>き</sup>りたり。

## 其十四

我が胸むねの中うちの所思おもはくの底そこを盡つくして説とき中あてられたるに、一度ひとたびは先まづ驚おどろき服ふくしたるも、其それを詰つまらぬこと、唯一言たゞひとことに斥しりぞけられては、物ものに堪こたへぬお龍りゅうの心こころ平たいらかならず、思おもはず顔かほを突つと擡あげて、

『何故なぜネエ。』

と詰なじ氣味きみに咄嗟とつさに言葉ことばを返かへし、が、見みれば古風こふうの内裏だいり雛ひなの如ごとくに端然しやんとしたる面かほつきの、細ほけれど亘わたりの長ながくして特ことにはつきりと明あきらかなる眼めを、我わが上うへにぶつとお形かたちの注そぎ居ゐたるに、其その沈靜おちつきたる態やう度すの中うちに具そなはれる自然おのづからの威ゐは、輕々かるくしく慌あわたゞしき我われを壓おす如ごとく覺おぼえて、何なんといふ事ことは無なけれど當あたり難がたき心地こころの爲ため、氣勢いきほ忽たちち挫くじけて語氣ごきも萎々なえくと、

『詰つまらないつて、其そりや然様さうかも知しりませんけれども、妾わかしにや些ちつとも然様さうは思おもへませんは。下くだらないかも知しりませんけれども、妾わかしの思おもつて

る事を、ネエ姉さんどうか一ト通り聞いて見て下さいな。』  
と、憐愍を乞ふが如くに云ひ足したり。

人に頼みごとするもの、心の中ほど苦しきは無し。強ひるほどに頼まねば願望は成り難く、強ひ過ぎて怒られて仕舞へばそれまでなれば、願ふ意の切なるだけ、我が言葉の斟酌に氣を使ひて、斯様云ひて宜かるべきか悪かるべきかの心配に、人知れず幾干の胸を痛むるなり。お形は我が愛するお龍がいぢらしき心の中を、早くも其の目色語氣に猜し知りて、たちまちに面を和らげ笑を爲りつ、『まあお龍ちゃんの思つてゐる事つて何様いふ事なの?。』  
と、云ひ出で易きやうに路を開きたり。

お龍はこれに勢を得て、

『経過を御話し仕ないぢやあ、何だか單、妾の餘計な物數寄のやうに聞えますからネ、長つたらしくても最初つからいひますよ。まあ一番初つからいひますとネ。』  
と、先づ語り出して縷々と語りつゞけぬ。

『もと彼の水野つていふ人は妾の知つてた人でも何でも有りやあ仕ません。今妾の世話になつてゐるお師匠さんに義女があるのです。會つた事が無いから面は知りませんが好い容貌ださうだし、學問も中々あるさうで教師さんを仕て居るんです。お五十さんといつて、沈毅者でネ、もとつから繼母とは氣が合ないので全然離れて居て、一人立で何様か斯様か遣つて行つてたのです。世話になつて居て悪く云つちやあ濟みませんがネ、お師匠様は随分我儘ぢやあ有り、品行だつて堅い方ぢやあ無い勝手な人ですから、眞正の理屈を云やあ端正として居るお五十さんの方が正しいのでしやうサ。だけれどもお師匠さんに云はせりやあ、變に高慢で、執拗な可厭な女だつて云ふんです。まあ其あ何方が眞正だか會つて見ない人の事ですから分りませんけどもネ、其のお五十さんといふのが弟の世話まで焼いてゐるのに、お師匠さんは何も少も管はないで、自分で取るものは自分で使つてお酒なんぞを飲んでるのですもの、まあ何様してもお師匠様の方に阿扇は上げられませんかやネ。ところが其のお五十さんといふ人が窒扶斯を患らつて、

生死いきしにの分わからない怖こはい瀬せにかかつたのです。それを何様どでしやう家の御師匠おしよさん様は振り向むいても見みないのです。もとよりお五十いそさんが財産もを有もつて居ゐやうぢやあ無し弟おとうとッ兒こはまだ一向いっかうの小兒こどもなんですもの、困こまつて仕舞しまふのは知しれ切きつて居ゐます。其處そこで彼あの水野みづのさんていふ人ひとが世話せわを仕したのでしてネ、彼あの人ひとはお師匠しよさん様にもお五十いそさんにも赤あかの他人たにんなのです！。』

## 其十五

『過日も一寸御話しを仕たのですから諄くは云ひませんが、其の赤の他人の彼の人とお五十さんとの間は、たゞ互に同じ學校に奉職めて居るといふだけの事です。そりやあ成程お五十さんを思つて居るからとはいふものゝ、何も有り餘つて居る人ぢやあ無し、學校の先生なんぞを仕て居るのですもの、その懷中合も知れて居ますはネ。その樂でも無い人が無け無しの中で何様か工夫をして、お醫者さんも頼んで來る、看護婦も附ける、下働きの小婢まで添へて置いたと云ふなあ、普通大抵の親切ぢやあ出來ません。でもまたお五十さんが彼の人と思ひ合つて居て、あの人の親切を身に沁みて悦んで心底から嬉しいとでも思ふといふのなら、随分彼の人も苦み甲斐がありまじやうが、性が合はないとでも云ふのでしやうか、御師匠さんの談では嫌つて嫌ひ抜いて、有難いとも嬉しいとも思ひさうも無いといふんですもの、彼の



人の立つ瀬は有りやあしませんはネ。それに段々と吾家の御師匠さんの口占を引いて見ますと、今度の事の起るずつと前から、お師匠さんは彼の人がお五十さんを思つてゐるのに附込んでネ、將來はお五十をあげましやうといふやうな事を巧く匂はせて、何とか彼とか口實を拵へては若干金かづつ絞つたらしいので、どうも後前を能く考へて見ると屹度さうなのですよ。』

『へーエ、罪な事を仕たものだネエ！、お關さんといふ人は。』

『罪ですともほんとに！。あんな生眞面目な初心な人を欺すのですもの。』

『ぢやあ、お前の御師匠さんていふ人は悪い人ぢやあ無いか。』

『唯、まあ善い人たあ御師匠様ですけれども云へませんネエ。で、吾家の御師匠様が萬一普通に人情合の分る人ならば、従前の事は何様でも斯様でも濟んだことだから仕方が無いとしても、今度は云はゞ水野さんの世話一ツでお五十さんを取り留めたのですから、床上げでも濟んだ其の曉にやあ、たとひお五十さんが何と云はうとも割つ口説いし

て、水野さんに嫁るやうにでも仕なくちやあならない筈だと思ひますは。ネエ姉さん、然様ぢやあ有りませんか、義理つてえものがネエ。』  
 『成程お前がお五十さんの御母さんだつたら然様も御爲だらうとおもはれるよ。』

お龍は此のお形が答に少からぬ不足の色を現したり。

『ぢやあ姉さんが若し御師匠さんだつたら?。』

『ホ、、挨拶が些氣に入らなかつたネ。妾がお五十さんの母さんならカエ。さうさねエ、妾ならまあ、先へ恩返しを仕て置いてネ、……世話になつた恩は恩で水野さんに恩返しを仕てネ、縁の事は其から後で決めやうと思ふネ。』

『然様!。それならそれで其もまた譯の分つた大變に良い仕方だと妾もおもひますは。ところが吾家の御師匠さんは妾の云つたやうに仕やうでも無けりやあ、姉さんのお云ひのやうに仕やうでも無いんで、たゞ病患い時やあ人まかせに仕て置いて、治りやあ自分の子つていふやうな勝手な料簡で、いつまでも水野さんは釣りつばなしに仕て打棄つて

置かうといふんですもの、酷いぢやありませんか。』

『そりやあ酷いとも！。酷い人だよ。聞いて見りやあ眞個にお前の御師

匠さんて云ふのは悪い人だよ。』

『でもまあ縁の事は當人同士の事で、親の思ふやうにばかりもならない理も有りましてやう。ですからお五十さんが嫌なら嫌で強ひるわけには行かないとして、其あ其で可いとしたところが恩は恩ですもの、恩は何處までも着なけりやあなりません。まして水野さんが困るといふ時節になりやあ、何様しても知らん顔ぢやあ居られない譯で、出来ないまでも心配だけなりと仕なくちやあなりません。』

## 其十六

『ところが吾家の御師匠さんと來た日にやあ眞個に酷い人で、妾がこれく〜だといふ話を仕て聞かせても、フーン然様かエと云つたばかりで氣の毒とも云はずに、黙つて懷手で高處で見物しやうといふんですもの、餘りぢやありませんか。それも水野さんが職を辭すやうになつた其の原因が、何も關係の無いことなら其で宜いかも知りませんが、彼の人が學藝が出来ないといふのぢやあ無し、怠惰たといふのぢやあ無し、たゞお五十さんに親切にして、信心まで仕た其事が目目に立つて、傍の風評が矢鱈に喧ましくなつて、其が爲に職を退いたといふのですから、云はゞ此方の爲に然様いふ譯になつたのですもの、石佛だつて氣の毒とは思はずには居られさうも無いところです。それを何様でしやう全然知らん顔で、濟まして行かうといふのです!。人間も其の位身勝手になれりやあ澤山だと思ひますは。』

『だつて悪い人なら其の位の事は平氣で仕やうぢあ無いか。』

『そりやあ云つて見ればまあ其様なもので不思議はありますまいがネ、丁度中に介まつてゐる妾が兩方を見ますとネ、つくづく吾家のお師匠さんを餘りだと思ふ其に連れて水野さんが愍然で愍然で、ほんとに何といふ愍然な人だらうと身に浸みて思ひますは。』

『さうさネエ、まあ愍然で無い事も無いネエ。』

『あらツ！、まあ愍然で無い事も無いネエだなんて、餘りですは。いくら自分が迷つたのだから仕方が無いとは云ふものゝ、助かるか死ぬかも知れない病人に對つて、心配も仕て遣る、お金も掛ける、書生さん風の人だのに信心まで仕て、此の節の人の爲さうにも無い觀音様に手を合せるといふやうな事まで爲たのは、まあよくくの事で無くつちやあ出來ませんは。それだのに其程思つてる人にやあ酷く嫌はれて、そして吾家のお師匠さんにやあ口頭だけで綾なされて、御腹の中ちやあ舌を出して笑つて居られて、揚句の果に取るものも取れ無い身になつて仕舞ふなんて、そりやあ男兒のことですから胸濶いであやうし、

氣性も毅然と仕て居るらしい人ですから、まんざらくよくも仕ます  
 まいが、妾が若し彼の人の身だつたら、まあ何様なでしやう！。此の  
 先お五十さんの氣が折れて優しくでもなつたら濟みも仕しやうが、  
 若しお五十さんはお五十さんで何處までも剛情を張り、お師匠さんは  
 お師匠さんで鼻の尖ばかりで待遇つて行つたら、何程男兒だつて迷つ  
 た心持の苦しさは女と異ひも仕ますまいもの、何様なにか泣きも仕ま  
 しやう、恨みも仕しやう、口惜がりも仕しやう。愍然に彼の人  
 云はゞ清玄見たやうなものになつて、終局にやあ段々との行掛づくか  
 ら、何様な怖ろしい恐い場に行き着かうかも知れません。もし然様な  
 つたところでお五十さんやお師匠さんは、身から出た錆だから仕方が  
 無いとしても、別に何も悪い事は仕ない彼の情の厚い、正直な、生無  
 垢な、彼の前途が有りさうな彼の人が……見す／＼一人廢つて仕舞ふ  
 のは愍然ぢやありませんか。ネエ姉さん、察しの宜い姉さんに其處  
 が解らない事がありますまい。悪い事も仕ない人が見す／＼人一人廢  
 りさうな、それが愍然で無い事がありますまい、ねエ姉さん。』

情<sup>じやうげき</sup>激<sup>ま</sup>してやお龍<sup>りう</sup>が面<sup>おもて</sup>はや、紅<sup>あか</sup>くなり、其<sup>そ</sup>の眼<sup>め</sup>は濡<sup>ぬ</sup>れ色<sup>いろ</sup>を帯<sup>お</sup>びて異<sup>あや</sup>しく  
光<sup>ひかり</sup>を増<sup>ま</sup>せり。

## 其十七

『そりやあもう屹度お前の御云ひの通りだよ。そのお五十さんといふ人やお前の御師匠さんが、いつまでもく然様いつた調子で居りやあ、それほど迄に思ひ込んだ彼の水野つていふ人の、落ちて行く前途は知れて居るよ。學問もあるといふ人の事だから、まさかに無分別沙汰も仕まいけれどもネエ、彼の人が若愚人かなんかだと、それこそ怖しい事にもなり兼ねない話だよ。』

『然様ですとも、ほんとに！。もし彼の人が無茶な人だつた日にやあ、随分刃物でも持ち出し兼ねないとおもひますよ。さうすりやあ差詰め吾家の御師匠さんが目ざされる人ですネエ。』

『あ、さうとも！。お前の御師匠さんといふ人は小な悪い人なんだけれど、仕方が餘り罪な仕方だからネ、随分鰹切で突かれる位の事は出来ても是非が無いよ。』



『ですが彼の人が無茶な人で無いだけに、何様間違つたつて下らない事なんかは仕やしますまい。百のものならまあ九十九まではぞつと堪へるだらうと思ひますが、何處までもぞつと堪へて獨りで苦しんで、思ひ死に死んで仕舞ふまでも穩しく仕て居やうかと思ふと、分別や堪へ情が有る人だけに猶の事氣の毒で、ほんとに何といふ愍然な人だらうと思はずには居られません。それでもまた彼の人が困らずにでも居たら、同じ胸の苦しい中でも氣の樂なところも有りましやうが、職務は無し、身體は閑なり、懷中合は惡し、差當り段々困つて來るといふところで、其の困るやうになつた原因のお五十さんは情無いし、お師匠さんは薄情の地金を露して、一昨日日出といふやうは挨拶を仕たら、彼の人の胸の中はまあ何様になるでしやう。火水が一諸になつたやうになつて、居ても立つても居られやしますまい。ですから妾が吾家の御師匠さんの子とか姪とか、何か親眷のものでゝも有るのならば、よしんばお師匠さんと論争を仕てもお五十さんと與るとか、恩返しをするとか、何の道にせよ彼の人の立つ瀬のあるやう

に、何様にか仕て遣るのですが、お師匠さんと妾たあ他人同士、養女  
 になれ養女にするつて此頃ぢや大切にしておいて優しくは仕て呉れても、  
 此方あ食客で、論争ふまでにやあ何も云へません、また論争つたつ  
 て無益なのは知れてます。ですけれど御師匠さんの代になつて行つ  
 て、彼の人と知り合になつてからいろいろのいきさつを聞いて一々知  
 つて見ると、妾あ眞個に彼の人が氣の毒で、お五十さんといふ人  
 が小憎らしい位に思つて居たところへ、これこれで職も無くなつたと  
 いふ話を聞いて見るとハア然様ですかと云つた限りにやあ出来無いや  
 うな氣もすれば、何だか知らん顔で打棄つて置いて下さるやあ不人情のやう  
 な氣もするんですよ。で、姉さんが口さへきいて下さりやあ必定譯は  
 無い事、多勢の人をお使ひなさる筑波さんところで人一人位に授けて  
 下さる職の無い事は有るまいからと、然様思つて、それで餘計なおせ  
 つかいか知りませんが御願ひに來たのです。

一體ならば吾家の御師匠さんが出来ないまでもかういふ苦勞を仕て見  
 なけりやあならない處なので、妾が爲るのは出過ぎても居ましようが、

お師匠<sup>しよ</sup>さんはお師匠<sup>しよ</sup>さんで澄<sup>す</sup>まして平氣<sup>へいき</sup>で居<sup>ゐ</sup>ても、妾<sup>わたし</sup>あ妾<sup>わたし</sup>の苦勞<sup>くらう</sup>性<sup>せう</sup>で安<sup>じつ</sup>然<sup>じつ</sup>としちやあ居<sup>ゐ</sup>られなくつて、斯<sup>かう</sup>樣<sup>やう</sup>して出<sup>で</sup>て來<sup>き</sup>て姉<sup>ねえ</sup>さんに縋<sup>すが</sup>るのです。まさか如<sup>これ</sup>是<sup>これ</sup>だけに細<sup>こま</sup>い理<sup>わけ</sup>由<sup>ゆ</sup>を御<sup>お</sup>話<sup>は</sup>仕<sup>し</sup>たら、そりやあお前<sup>まへ</sup>詰<sup>つま</sup>らないよと云<sup>い</sup>つても下<sup>くだ</sup>さいますまいが、ネエ姉<sup>ねえ</sup>さん、妾<sup>わたし</sup>の慾<sup>よく</sup>得<sup>とく</sup>で御<sup>お</sup>願<sup>ねが</sup>ひをすゐるのぢやあ無<sup>な</sup>いし、姉<sup>ねえ</sup>さんだつて彼<sup>あ</sup>の人<sup>ひと</sup>を愍<sup>かほ</sup>然<sup>いさう</sup>ちや無<sup>な</sup>いとお思<sup>おも</sup>ひなざるやうな事<sup>こと</sup>は有<sup>あ</sup>りやあ仕<sup>し</sup>ますまいもの、お願<sup>ねが</sup>ひですから妾<sup>わたし</sup>の所<sup>おも</sup>思<sup>ひ</sup>の無<sup>む</sup>にな<sup>ら</sup>ないやうにEby仕<sup>し</sup>して下<sup>くだ</sup>さいな、ねエ姉<sup>ねえ</sup>さん。』

思<sup>おも</sup>ひ入<sup>い</sup>つて頼<sup>たの</sup>み聞<sup>き</sup>ゆるお龍<sup>りゆう</sup>を優<sup>やさ</sup>しき眼<sup>め</sup>して見<sup>み</sup>居<sup>ゐ</sup>たるお形<sup>かたち</sup>は、先<sup>さ</sup>刻<sup>き</sup>より今<sup>いま</sup>に至<sup>いた</sup>つて猶<sup>なほ</sup>未<sup>いま</sup>だ鬢<sup>びん</sup>の毛<sup>け</sup>の一<sup>ひと</sup>筋<sup>すぢ</sup>をだに動<sup>う</sup>がさず、端<sup>たん</sup>然<sup>ねん</sup>として坐<sup>すわ</sup>りたるまゝなり。

## 其十八

お彤とうは其その美うつくしき手てに手爐てあぶりの縁ふちを撫なづるとも無なく撫なでながら、いと静しづかに口くちを開ひらきて、

『お前まへの云いふ事ことは、ようく分わかつたよ、だがネエお龍りゅうちゃん!。』  
と親したしげに呼よびかくればお龍りゅうも、

『ハア。』

と甘あまゆるか如ごとく輕かろく答こたへてお彤とうを見みつ、我わが姊あねの如ごとくに頼たのみ思おもへる人ひとは何なにと云いひ出いづるならん、多た分ぶんは我わが頼たのみを聞きいては呉くる、ならんがと思おもひながらも、だがネエと云いへる發語いはだしに、少すこし氣遣きづか氣味きみの、心配しんぱいらしき眼めして他ひとの眼めを見みたり。

『成程なるほどお前まへの御云おいひの通とほり水野みづのつていふ人ひとも慙然かはいさうだし、お前まへの御師匠おしよさんていふ人ひとの仕方しかたも悪いわるいがネエ、お龍りゅうちゃん、お前まへが何なにも彼あのお師匠おしよさんのがの眷屬みうちといふのぢやあ無いし、又また深ふかしい關係ひつかかりのある免のがれない仲なかとい

ふのぢやあ無いしき、お前まへが彼あのお師匠しよさんのところから身みさへ引ひいて終しまへば、其その話はなしあ全然まったくお前まへにやあ飛沫しぶきも飛とんで來こない話はなしになつて仕舞しつて、たとへ何様どんな喧嘩けんくわが始はじまるにしても泥仕合どろじあひが始はじまるにしても、彼方むかふが彼方むかふだけで何様どうにでも遣やり合あつて居ゐやうつていふ譯わけぢやあ無いか。彼方むかふ同士どうしあ一團たまになつてこんがらかつて居ゐる絲いとだよ、お前まへは其その一團たまの中なかに入はいつては居ゐてもこんがらかつては居ゐ無い——引張ひっぱればするりと脱ぬけて仕舞しふ事ことの出來できる絲いとだよ。だから早はやい話はなしを云いやあ汝おまへが其そののこんがかりの一團たまの中なかに入はいつて、氣きを使つかつたり目めを使つかつたりしてまごついて居ゐるよりやあ、するりと脱ぬけて仕舞しつた方はうが何程いくら好いいか知しれないよ。譯わけは無ないやあネ、妾わたしのところへ來きてお仕舞しひな、以まへ前のやうに妾わたしのところのんきで氣きを長閑のんきに仕して、小説せうせつでも讀よんで遊あそんでおいでが宜いいぢやあ無いか。彼あのお師匠しよさんていふ人ひとが何なにかぶつ／＼云いつたにしても、金錢おかねのぼつちりも興やりやあ尾をを振ふつちまふ人ひとだらうから、何もむづかしい事ことは有ありやあ仕し無いはネ。お前まへの爲ための好いいやうになら何様どんなにでも仕してあげるつもりなのだし、お前まへの身みの上うへに就ついちやあ妾わたしも

些<sup>ちよつとかんが</sup>考<sup>こう</sup>へてる事<sup>こと</sup>もあるんだし、又何<sup>またどこ</sup>處<sup>ところ</sup>までも引<sup>ひき</sup>受<sup>う</sup>けて世<sup>せ</sup>話<sup>わ</sup>を仕<sup>した</sup>度<sup>ど</sup>といふ道<sup>みち</sup>理<sup>り</sup>も有<sup>あ</sup>るんだからネ。決<sup>けつ</sup>して惡<sup>わる</sup>い事<sup>こと</sup>は云<sup>い</sup>はないから脱<sup>ぬ</sup>けて仕<sup>し</sup>舞<sup>ま</sup>つたら何<sup>どう</sup>様<sup>よう</sup>だエ。第<sup>だい</sup>一<sup>いち</sup>お前<sup>まへ</sup>の話<sup>はなし</sup>でも分<sup>わか</sup>つて居<sup>ゐ</sup>るお前<sup>まへ</sup>の御<sup>お</sup>師<sup>し</sup>匠<sup>じょう</sup>さんネ、そんな可<sup>や</sup>厭<sup>いと</sup>な人<sup>ひと</sup>と一<sup>いつ</sup>緒<sup>しょ</sup>に居<sup>ゐ</sup>て末<sup>すえ</sup>々<sup>々</sup>はお前<sup>まへ</sup>何<sup>なん</sup>様<sup>よう</sup>仕<sup>し</sup>やうつて氣<sup>き</sup>なのだエ。お前<sup>まへ</sup>程<sup>ほど</sup>にも無<sup>な</sup>い、分<sup>わか</sup>らないぢやあないか。』

『そりやあもう段<sup>だん</sup>々<sup>々</sup>と彼<sup>あ</sup>の人の御<sup>お</sup>腹<sup>なか</sup>の中<sup>なか</sup>が讀<sup>よ</sup>めて來<sup>き</sup>て見<sup>み</sup>ると、到底<sup>とてもしえな</sup>末<sup>ま</sup>長<sup>なが</sup>く一<sup>いつ</sup>緒<sup>しょ</sup>になんぞ居<sup>ゐ</sup>られる人<sup>ひと</sup>ぢやあ無<sup>な</sup>いのですし、妾<sup>わたくし</sup>に仕<sup>し</sup>た前<sup>まへ</sup>々<sup>々</sup>の所<sup>しやう</sup>行<sup>こう</sup>も此<sup>この</sup>頃<sup>ころ</sup>になつて見<sup>み</sup>りやあ、合<sup>が</sup>點<sup>てん</sup>の行<sup>ゆ</sup>く恨<sup>うら</sup>めしいことが澤<sup>たん</sup>山<sup>と</sup>あるのですもの。ですから表<sup>うは</sup>面<sup>べ</sup>こそは奇<sup>き</sup>麗<sup>れい</sup>にして居<sup>ゐ</sup>ますが、些<sup>ちよつ</sup>も一<sup>いつ</sup>處<sup>しょ</sup>に居<sup>ゐ</sup>たい事<sup>こと</sup>なんか有<sup>あ</sup>りやあ仕<sup>し</sup>ませんの！。ただ、今<sup>いま</sup>直<sup>すぐ</sup>に何<sup>なん</sup>様<sup>よう</sup>思<sup>おも</sup>つたからつて思<sup>おも</sup>つたやうにもならない身<sup>み</sup>だもんですから……』

『それで彼<sup>あ</sup>家<sup>すこ</sup>に居<sup>ゐ</sup>るとお云<sup>い</sup>ひのかエ。それ御<sup>ご</sup>覽<sup>らん</sup>、彼<sup>あ</sup>の人<sup>ひと</sup>は前<sup>まへ</sup>つから妾<sup>わたくし</sup>が推<sup>す</sup>量<sup>りやう</sup>した通<sup>とほ</sup>りだつたらう、云<sup>い</sup>はない事<sup>こと</sup>ぢやあ無<sup>な</sup>い。だから今<sup>いま</sup>お前<sup>まへ</sup>をちやほや云<sup>い</sup>つて家<sup>うち</sup>に置<sup>お</sup>いて居<sup>ゐ</sup>る料<sup>れう</sup>簡<sup>けん</sup>だつて、』

『つまり妾<sup>わたくし</sup>を猿<sup>さる</sup>廻<sup>まは</sup>しの猿<sup>さる</sup>にして、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>が食<sup>た</sup>べやうつていふ腹<sup>はら</sup>なんですよ。

その位の事は妾だつて、氣のつかない程人が好くももうありませんからね。それを何時までも小兒かと思つて、馬鹿にして居る氣の御師匠さんの仕方にやあ腹が立ちますは。』

『ホ、ホ、ホ、澤山苦勞をお仕だつたから、前のお龍ちゃんぢやあ無いものネエ。だが然様知り切つて居てそれであどけ無い風を仕ておいでのなんざあ、お前の方がお師匠さんよりも人の惡さが一枚上ぢやあ無いか知らん、ホ、ホ、ホ、。』

『ホ、ホ、ホ、だつて妾あ、あんな眞の悪い憎い人にだから然様して居られるのですは。善いとおもふ人に對つちやあ此つばかりだつて作り飾りは仕やあ仕ませんよ。』

『ホ、ホ、ホー。い、よ。誰もお前を眞個に悪い人におなりだつて云ひや仕ないから。で、さういふわけなら猶の事ぢや無いか。一日も早く其様な人と一つ御釜の御飯を食べあつて縁を深くする様な事を、仕無い様に仕た方が宜からうぢやあ無いか。』

『そりやあ其の譯はもう能く分つてますが、ぢやあ、姉さんの心持ちや

あ水野みづのさんの事ことは、まあ一體いつたい何様いどうしたら好いいんだと御思おもひなんでしやう？。構かまふ事ことは無い、何も彼かも抛なつてお仕舞しまひと御思おもひの？。』

此これは恨うらむるに似にて云いへど彼かれは感かんぜざるがごとし。

『一體水野いつたいみづのつて人ひとは彼ありやあお前まへの何なんに當あたるのだエ？。』

『……………』

『お前まへあの人ひとに其様そのんなに肩かたを入れて何様どうし仕やうつてお思おもひのだエ？。』

『……………』

考かんがへて御覽ごらん、餘あんまり詰つまらな過すぎるぢやあ無ないかエ。』

『……………だつて姊ねえさん。』

『だつてぢやあ無ないよ。え、お龍りゅうちゃん、妾わたくしあ何なんだか意地いぢの悪わるい事ことを云いふやうだがネ、ようく考かんがへてごらん。どうだエ、それ、お龍りゅうちゃん。』

『……………だつて姊ねえさん、』

『いゝえ。だつてぢやあ有ありま-tonよ。能ようく考かんがへてごらん。詰つまらない事ことは終局しまひまで行いつても矢張やっぱり詰つまらないよ。』



『だつて姉さん……。だつて姉さん……。でもそれぢやあ餘り恰憫過ぎ  
て薄情ぢやあ無くつて？。』

## 其十九

お龍<sup>りゅう</sup>は自己<sup>おの</sup>が身<sup>み</sup>の凡<sup>すべ</sup>てお形<sup>どう</sup>に及<sup>およ</sup>ばざるを<sup>し</sup>知るなり。第一<sup>だいいち</sup>今の身<sup>み</sup>の境<sup>う</sup>  
 遇<sup>へ</sup>は掛<sup>か</sup>けても及<sup>およ</sup>ばざるを<sup>し</sup>知るなり、有<sup>も</sup>つて生<sup>う</sup>れたる容貌<sup>きりやう</sup>ももとより  
 及<sup>およ</sup>ばざるを<sup>し</sup>知るなり、智<sup>ち</sup>慧<sup>ゑ</sup>は特<sup>こと</sup>さらに及<sup>およ</sup>ばざるを<sup>し</sup>知るなり、讀<sup>よ</sup>書<sup>み</sup>  
 筆<sup>かき</sup>札<sup>にねんさんねんくる</sup>も二年三年苦<sup>くる</sup>しみたりとて及<sup>およ</sup>ぶべきにあらず、挿<sup>は</sup>花<sup>なち</sup>茶<sup>や</sup>湯<sup>のゆ</sup>はいふま  
 でも無<sup>な</sup>く、我<sup>わ</sup>が最<sup>も</sup>も好<sup>す</sup>ける絲<sup>いと</sup>竹<sup>たけ</sup>の道<sup>みち</sup>、彼<sup>かれ</sup>の最<sup>も</sup>も悦<sup>よろこ</sup>ばぬ縫<sup>ぬひ</sup>針<sup>はり</sup>の道<sup>みち</sup>に掛<sup>か</sup>  
 けてすら猶<sup>なほ</sup>且<sup>かつ</sup>及<sup>およ</sup>ばず、随<sup>ず</sup>分<sup>ぶん</sup>人<sup>ひと</sup>には負<sup>ま</sup>くる嫌<sup>きら</sup>ひの、何<sup>なに</sup>事<sup>ごと</sup>を仕<sup>し</sup>ても人<sup>ひと</sup>後<sup>あと</sup>に  
 は立<sup>た</sup>つまじと思<sup>おも</sup>ふ身<sup>み</sup>ながら、何<sup>なに</sup>事<sup>ごと</sup>を仕<sup>し</sup>てもお形<sup>どう</sup>には及<sup>およ</sup>びかぬるを知<sup>し</sup>り  
 て、心<sup>こゝろ</sup>の底<sup>そこ</sup>の底<sup>そこ</sup>より深<sup>ふか</sup>く深<sup>ふか</sup>く尊<sup>たつと</sup>び敬<sup>うやま</sup>へるなり。されど唯<sup>ただ</sup>一<sup>ひと</sup>つ、情<sup>じやう</sup>合<sup>あひ</sup>  
 の深<sup>ふか</sup>き淺<sup>あさ</sup>きといふ事<sup>こと</sup>のみに掛<sup>か</sup>けては、ひそかに姊<sup>あね</sup>と頼<sup>たの</sup>むお形<sup>どう</sup>にも譲<sup>ゆづ</sup>ら  
 ざる心地<sup>こゝち</sup>して、我<sup>われ</sup>は何<sup>なん</sup>ぞの折<sup>をり</sup>には慾<sup>よく</sup>も得<sup>とく</sup>も何<sup>なに</sup>も彼<sup>か</sup>も棄<sup>す</sup>て、仕<sup>し</sup>舞<sup>ま</sup>ふ馬<sup>ば</sup>鹿<sup>か</sup>  
 なれ共<sup>ども</sup>、彼<sup>か</sup>の人<sup>ひと</sup>は恰<sup>り</sup>惻<sup>かう</sup>だけに同<sup>おな</sup>じ其<sup>そ</sup>の時<sup>とき</sup>に然<sup>さう</sup>様<sup>やう</sup>は爲<sup>す</sup>まじき人<sup>ひと</sup>と、却<sup>かへ</sup>つ  
 て流<sup>さすが</sup>石<sup>が</sup>に崇<sup>あが</sup>め慕<sup>した</sup>へる其<sup>その</sup>人<sup>ひと</sup>をも、聊<sup>いさ</sup>か物<sup>もの</sup>足<sup>た</sup>らず飽<sup>あ</sup>かず思<sup>おも</sup>へ氣<sup>き</sup>味<sup>み</sup>さへある

なり。

されば今お龍が云ひ出でしは、もとより率然の語なれども、意を用ひざる其の僅少なる語の中に、お龍はおのづからお龍の氣性の、然ばかりに崇め思へるお彫のためにも枉げられず屈せられぬものあるを露し出して、抑へんとして抑へかねたる不服の氣を我知らず洩らせるなり。お龍の持前を知りきつたるお彫は、走り來れる矢を幕もて止むる如く、柔軟なる語氣に却つて問ひ反しぬ。

『薄情ぢやあ無くつてッて。何故またネエ。』

『何故つて、姉さん。そりやあ妾さへ退いて仕舞へば妾の身の好いのは知れて居ますが、それぢやあ彼の人は否まんまで遺るので、矢張り彼の人は悠然ぢやあ有りませんか、ですから其れぢや薄情になりますネ。妾あ詰る詰らないは何様だつて好いんですよ。妾あたゝ彼の人が悠然だから何様か仕て遣りたいつて云ふんぢやあ有りませんか。』

『い、え、お前の心持はもう悉皆解つて居るのだがネ。妾あ又ただお前の朋友で、お前の利益になる事を仕てあげたいのだから。——い、

かエ。だから妾あ前途の前途まで考へるので、お前の詰る詰らないを  
關はないなんて、そんな事は出来ないよ。』

『でも詰る詰らないで云やあ、何だつて詰らないは！。妾みたやうな  
種々な目にあつて來たものは生きて居るのからして詰らないは！。何  
様せ妾が彼の人を慇然だから何様して遣りたいと思つたつて、結局妾  
にやあ何にもならない——詰らないなあ知れてますは……。でも妾の  
氣が届けば妾の心持は宜うござんすは。知らん顔で済ますなあ薄情  
なやうな氣が爲ますは。』

『オヤ、妾あ爲なくちやあならない事を爲ないのが薄情つていふものか  
と思つて居たが、お前のは爲なくとも済むことを仕無いのに薄情とい  
ふのだネ。』

『爲なくちやあならない事を仕無いのは、そりあ不義理ですは、爲なく  
ても済むことでも、爲てやりやあ他人の利益になる、それを爲ないの  
が妾あ薄情かと思つて居ますよ。』

『お龍ちゃんのやうに云つた日にやあ、お龍ちゃんの他の出間の人は

悉皆薄情者のやうになつて仕舞ふよ。ホ、ホ、まあ其りやあ何様でも  
宜いが、それぢやあ詰つても詰らなくつても水野つていふ人は妾が引  
受けて何様か仕てあげるとすると決めて置くがネ。』

其二十

『ぢや姉さん、ほんとに受合つて下さるの。』

お龍の眼は既に罪も無く悦びて笑めるなり。お彤は其の様子を見て却つて微に愁ふる色あり。

『あゝ、彼の人が困らないやうにするだけの事なんぞは旦那に云ふまでも無い、妾が何様にでも必定爲てあげるがネ。お龍ちゃんは何だつて然様彼の人の事に肩を御入れのだらう?。』

『だつて姉さん、然然なのですよ!。』

『たゞ然然だつていふばかりで?。』

『ハア然様ですは。』

『全くたゞ?。』

『いやだ事ネエ、何だか異アしく御聞きなさるのネ。』

おもてやうやふあんあらはこはせはそとひさへきとて  
面は漸く不安を現し、言は忙しく其の問を遮り止めんとしたり。お彤

は口のほとりに見ゆるか見えざるかの笑を浮めて、猶追求して已まず。  
『もしやお龍ちゃん、お前、あの人が好になつたのぢやあ無くつて?。』  
『エ。』

『ひよつとしたらお前、胸の底ぢやあ彼の人を思つてるのぢやあ無く  
つて?。』

眼の上に白刃を閃めかさるゝが如く、一語は一語より急に逼り立てら  
れて、お龍はさつと面を紅くし、

『あら姉さん、其様な事を云つちやあ妾あ嫌ですよ。妾やあ基様な氣な  
んぞを些も有つて居やあ仕ませんは。』

と、明らかに答へたれど、驚き慌て狼狽へてどぎまぎせる態はあ  
りくゝと見えたり。お彤は此度は嫣然と笑をつくつて、

『必然?。』

と重ねて問へば、お龍は既浮き足を踏堪へ身構へを仕直して、

『だつて、知れきつてる事ぢやあ有りませんか。彼の人はお五十さんて  
いふ人を思ひに思ひぬいてるのですもの、横合から妾が思つたつて何

様なりましやう!。いくら妾が馬鹿だつて酔狂だつて、其の位のは知つてますから空店へ郵便を抛り込むやうな事を何で爲ますものかネ。ホ、ホ、ホ、ホ。』

と戯言まで云つて自ら笑つて何氣なき態なり。

お彤はお龍の言を信じたりや信ぜざりしや知らず、

『然様かエ。そんなら何も既云ふことは無いのだがネ。妾あ又、お前が彼の人を好いてでも居るといふことなら、次第に依つちやあお前の爲に一ト苦勞して、お前の身の収まりの好いやうに仕てあげやうかとも初手にはふつと思つたのだよ。』

『エ。』

全然おもひの外なりし言葉にお龍は復驚かされつ、我知らず心を動かして答さへ答へ鈍りしが、お彤は早くもその眼色を見て取りたり。

『だが彼の人は彼様だし、何様なものだらうかと思つて居る中、また別に一條の話が出て來たので、お前の爲に彼の人は棄てる者に仕た方が宜いと決めて居たところ、丁度お前も左様いふ氣だと今聞いて妾も安



心しんしたよ。さうで無なけりやあ彼あの人ひとを思おもたつて詰つまらないといふ事ことを云いはうかと思おもつて居ゐたところだよ。』

その云ふところは、うそ 假設にや、ほん 實際にや、ちから お龍はたゞ、わ 我が心、こゝろ 蜘蛛の圖に  
から 擲められ行きて、あ 抵抗はんに抵抗ふべき力、い の入れどころも知らぬ中、  
しだい 次第々々に自由を奪はれ奪はるゝが如く覺ゆるのみ、

『ネエお龍ちゃん、仕様が無いやネ、あゝいふ人は。お前彼の人をどういふ人だと思ひだエ?。なる程情も有らう、正直でもあらう、學藝も出來やうがネ、一生の所天にするにやあ、氣むづかしやで、貧乏性らしくつて、ヘチ頑固なところが有つて、彼あ餘り有り難くは無さ、うだネ。といつて情夫にするにやあ、容貌が悪かあ無いが愛嬌の足りない、面白味の薄い、無粹の、世間を知らな過ぎる——何様もお前の相手にやあ些不足な男ぢやあ無いか!。』

## 其二十一

お龍はお彫の水野を評するに平らかならねども、反駁さんも何と無く後見らるゝ心地せしが、其の言ふところ多くは當れるを如何とも爲る能はず、たゞ僅に、

『あら姉さん。てんで妾あ全然其様な事を思つてや仕無いのですから、彼の人が貧乏性だつて無粹だつて何様だつて宜いぢや有りませんか、不足でも過ぎて居ても關係の無い事です。随分酷い事ネエ、姉さんの言も。』

と、知らざるを粧ひて我には聞き辛き談を少しも早く外さんと仕たり。『然様さネエ。ホ、關係の無いものを兎や角いふのには當らないのだがネ、此あまあ無意の話だと思つて聞いて居て御覽よ。お前はどうぞ彼の人を何様の彼様のとなんぞ思つては御いでゝ無いといふのだから、別に何にも心配は無いがネ。こゝに氣が優しくつて而して侠

氣のあるやうな若い女があつて、何様かした心の機勢から彼の人を  
 思ふやうなことが有るとするとするとネ、早く氣がついて引返して  
 仕舞へば其限で済むけれども、田舎道なんか歩いて也能くある事で、  
 二十丁三十丁も間違つた路踏込んで仕舞ふと、あ、間違つたと氣が  
 付いても後へ返る氣にはなれないで、何様かして出抜けやう出抜けや  
 うつて云ふんで餘計變な路へ入つて、下らない苦みをする事が得て  
 有るものだが丁度其様な譯で下手に人を思つて、少し宛少し宛深みへ  
 入つて行くと、終にやあ飛んだ目を見無けりやあならないやうな馬鹿  
 などところへ行つて突當りもするよ。何でも前途の知れない怪しい路へ  
 入つたら、一二丁しか歩かない中立止つてネ、ぶつと考へるかに聞  
 くかして、引返すのがまあ肝心で、無暗に歩いて行くのは一番危  
 事だよ。彼の水野つていふ人は一ト目見ても分る、性は良い、眞人間  
 だよ、不實な人ぢや無い。だから彼の人が別に人を思つてるので無  
 けりやあ、彼の人を好いたといふ女が有りやあ其りやあ好いたで宜  
 いのさ。而して其の女の思も屹度彼の人に分つて、小説ならばまあ

芽出度めでたしめでたし芽出度といふところにもなるだらうがネ。彼あの人が他ほかの人を一心しんに思おもつてゐるからにやあ、性の良い人ひとだけに傍わきからの思おもひは受け付けまい、眞人間まにんげんだけに二心ふたこころは持つまいよ。然様さうすりやあ彼あの人を思おもふなあ死路つぎあたりへ向むかつて行くやうなもので、行いけば行くだけの草臥くたびれまう儲けたから、そんな路みちへ若もし一寸ちよつとでも歩あしが向むいて居ゐたらば、其方そつちへ踏ふみこ込んだか踏ふみ込まない中後うちあとへ引返ひつかへして仕舞しまふと、然程さほどく苦にもならない、損そんも仕し無ないで済すむといふ譯わけなのだよ。誰だれしも損路そんみちを仕しないで世よの中なかを歩あるいて來くるものは中々なか／＼無ない。お前まへはお知しりでないが妾わたしだつて損道そんみちを澤山たくさん仕して來きて居ゐる。お前まへは妾わたしも知しつてゐるが既もう一度いちど甚ひどい冗道むだみちを歩あるいて、踏ふみぬき拔きも仕しておいでだし生爪なまつめも剃はがしておいでだし、散々さん／＼な目めにお會あひだつた人ひとだから、今いまさらまた前途さきの知しれない怪あやしい路みちへなんぞ、無暗むやみには入はいつて御おいでは有あるまいから宜いいがネ。』

お形とうは云いひ終をはつて黙もくし、お龍りゆうは聞きき終をはつて黙もくし、互たがひに言葉ことばの絶たえたるところへ、小間使こまつかひのお春はるは次室つぎのまより現あらはれ、

『あの昨日きのふお來臨いでなすつたお婆ばあさんの方が御出おいでになりました。』

と云へば、

『お、丁度好いところへだった、此方へと御云ひ。お龍ちゃん、お前、  
吃驚おしで無いよ。お前の大嫌の静岡の叔母さんだよ。』  
と、お彤は笑を含んで云ひたり。

## 其二十二

お彫と我が叔母とは相識なるべき筈の無ければ、此家にて叔母に會  
 んとは夢にも思ひがけざりしお龍の、主人の言葉を聞きても猶信じか  
 ねて、よもやと疑ひ訝かれる間も無く、既お春に導びかれて、身體は  
 一體が小粒なる上に老いたればいと小さく見ゆれど、石の如くこつ  
 りと堅さうに緊り切つたる小さき顔、薄くなりたる癖毛のびつたりと  
 地に緊着ける小さなる頭、負けぬ氣が尖つて露れたるやうなる小さき  
 三角の眼、都べて小さきが中に毫も緩みの無き、我が叔母のお近は忽  
 ちに現はれたり。

監の味噌漉縞の衣を襟元窄く着て、疊み皺見ゆる黒の紬の羽織に、古  
 ねて堅くなつた茶の細紐を少し胸高にきつちりと結び、妙に角張つて  
 坐つてしなやかならず挨拶せるさまは、何様見ても静岡の在より出で  
 來りたる田舎婆と見えて律義臭し。されど明治の初年に兩親に連れら

れて、東京とうきやうを離はなれしまゝ、茶圃ちやばたけむぎばたけ麥圃あなかもの間に齷齪あくせくとして年としを取りは仕した

れ、根ねからの田舎者あなかもならぬに言語ものいひだけは然さのみをかしからず。

『何様どうも昨日さくじつはまことに喧やかましうございしましたらう。老年としよりではございま

すし、我張がっぱり婆ばあではございますし、それに田舎あなかに居をりますので自然しぜんと

馬士まごかなんぞのやうな大聲おほこゑになつて仕舞しまひまして、自分じぶんの勝手かつてばか

り饒舌しゃべり散ちりましたから嘸さぞめい御迷惑ごめいわくでございしましたらうと、是これでも

又殊勝またしゆしょうらしいもので、後あとでは御氣おきの毒どくに存ぞんじましたのでございます。

どうも種々いろいろ何や彼かや御深切ごしんせつさまに有あり難がたう存ぞんじました。それに御馳走ごちそう

にまでなりまして、夜分やぶんにまでお邪魔じやまを致いたしましたりなんぞして、ま

ことに既年はやとし甲斐がひも無い自分勝手じぶんかつてばかりの婆ばあだと、御蔑視さげすみのところも

御差おはづかしうございました。若もし萬一ひよつとさてく勝手者かつてものだと御愛想おあいそづ盡づかしも

有あらうかと、宿やどへ歸かへりましてから些心ちとしん配致はいいたしましたが、ナア二馬鹿ばかに

やあ恰りかう愼かたな方の事ことは分わからなくつても恰りかう愼かたにやあ馬鹿ばかなもの、事ことは能よ

く分わかるだらうから、此方こつちの何程どれほどか有あり難がたく思おもつて居ゐる位ぐらゐの事ことは御分おわかり

だらうからまあ安心あんしんだ、屹度きつと馬鹿婆ばあだけれど腹はらの中なかは人並ひとなみだ位ぐらゐには思おも

つて居て下さるだらうから、と斯様まづ勝手に決めて仕舞つて、安堵  
いたのでございます。ハ、ハ、ハ、何様か御恩には必らず着ますから宜し  
く御願ひ申します。では此女ももう貴女様が今日招び下さいまし  
たので?。』

と、人の云ふ事は餘り聞かずに獨りで饒舌つて、お形には語を挿む間  
をさへほとく與へざるほど、身體には似合はず大な頑健なる聲もて  
先づ語りたり。



其二十三

お形はお近ちかが言ものへる間あひだにも、少すこしの受答うけこたへを爲しつ、語ぐちを挿はさまんとせざるにはあらざりしも、立板たていたに水みづとはいふべきならねど下くだり坂さかに走はしる小車をぐのやうに騒さわがしく忙せしく話はなしつづけられて口くちを入れ兼かね居ゐしが、今いま斯かく問とひかけられて僅わずかに言葉ことばを出いだし、

『いゝえ然さう様ようぢやあ有ありませんが他ほかの事ことでもつて、丁度ちやうど自然ひとりでに先刻さつき方見がたみえたので、』

と云いひかけてお龍りうの方はうを莞爾にこやかに見みやり、

『お龍りうちやんお前まへ、黙だまつておいでぢやあ不可いけないよ、叔母をばさんぢやあ無ないかネ。』

と輕かろき一いっ句くを與あたへつ、またお近ちかに向むかひて、

『きまりが悪わるいもので羞澁はにかんで困こまつて居ゐるのですよ。ホ、まだ若わかくつて、いつそ可憐かはらしいぢやあ有ありませんか。どうかまあ今けふ日ふのところ

は御叱りなさらないうでネ、貴卿が御目上ですから優しく仕て御與りなすつてネ。』

と、二人の間をば取り繕ふやうに云へり。

此の叔母が擇み定めし婿を嫌ひしより、朝となく夜と無く論ひ合ひ睨み合ひて、さらだに性の合はぬ中の、いよ／＼おもしろからず、え、あた忌々しい、何となるものぞと、後の迷惑も思はずに無言つて駈け出したるまゝ、恩のある事は知つて居れど憎らしさもあるに、手紙一本も出さで知らぬ顔に濟まし來りし今日、突然に此處に相會ひてはお龍も聊か驚きつ、顔を見ては流石氣の毒さに面伏の思ひもすれど、勝手のみ強くして遠慮を知らぬ性急の話聲の、いつもながら喧しく耳に響くを聞きては、もう薄腹の立つほど蟲が嫌つて厭で／＼堪らず、出ずとも可い人が出て來てと迷惑がりて、出るも引くもならぬに心そげて居たりしが、お彫に斯く云はれては横を向いてばかりも居られず、不承々に、

『叔母さん……』

と云ひし限り、あとはぐずぐずと口の内にて何を云ひしやら知れず、術無げに頭を下げて漸と挨拶すれば、叔母はなかくもう黙つては居ず、三角の眼をきらりと光らせ、

『でもまあ能く忘れずに叔母さんと御云ひだつたネ。ハイ、其後はあばらく。お前も御達者で、別に御天道様にも愛想を盡かされずに御暮しで、まあ結構だネ。まことにお前の御蔭ぢやあ恐ろしい沸湯を飲ませられました。會つたら引掟へて耳でも扯り取つてあげて、何の位妾が痛かつたか苦しかつたか、此様なものだつたよと、察して貰ひましようと思つて居ましたがネ、此方様の御言葉だから堪忍してあげる。まかし彼の事は何様か此様か既濟んで仕舞つたが、一つ濟めば又一つでお前の御蔭様で、斯様して砂塵ばかり立つ東京くんだりへ、田舎婆さんがゑつちらおつちらと得々出かけて来て、此方様へも御厄介を掛けたりなんぞ仕ます。婆さんを苦勞ばかりさせて御手柄の事ですネ。ほんとにお前の仕た事に碌な事は有りやあ仕ない。お前の仕た事の中で好い事といふのは、此方様に可愛がつて頂いて居るといふ事

ばつかりだ。此方様にでも見離されりやあお前のやうなものは、それこそ最終は倒れ死だよ。身に染みて覚えておいでなさい、もうお前の身體はお前の料簡ぢやあ勝手にはなりません。妾がすつかりと願つて置きました。もう何も彼も此方様の仰やる通りにするのです。三絃の師匠だなんて、彼様悪い人のところへ、身を置いては決してなりません、出入りしてもなりません。早速これから其家を出て此方へ御厄介になつて、此方様を有り難いとおもつて身を責めて御働きなさい。』と獨り合點して、まくし立て、指揮したり。

お形は訝り疑ふお龍を見て、

『叔母さん、其ぢやあ此の人にやあ分りますまい。かういふ事なのだよ

お龍ちゃん。』

と靜に説き出したり。

## 其二十四

最初さいしよつから云いふと如か是しなのだよお龍りうちゃん。それ一昨年をど、しの夏なつの事ことだつたね、これこれで此度こんど叔母をばに伴つれられて、厭いやだけれども静岡しづをかへ行きま  
すからつて、お前まへが暇いとま乞こひに御おいでだつたことがあつた、其時それからとい  
ふものは随分ずぶん長い間あひだ、此方こつちから手紙てがみをあげても返辭へんじは少すくないし、たまに  
御遣およこしても極々ごくく短みじつかい眞ほんの義理ぎり濟すましただけの事ことだし、是これあ何なにか知ら  
ないけれども甚ひどく氣きを取とれておいでの事ことがあるのだらう、と思おもつて  
居ゐる中うちに今年ことしの三月さんぐわつ、ふらりつと妾わたしの處ところへ御おいでだつたが、顔付かほつきは  
全然まるで變かはつて仕舞しまつて、前まへに見みた處女むすめらしいところは無なくなつて御終おしまひ  
だし、様子やうすは何なんだか知しらないがそはくとしておいで、妾わたしに御話おはなし  
の談話はなしにも辻褄つちつまの合あはないところは有あり、何様どうも氣きになる事ことばかりだ  
から妾わたしは心配しんぱいして、すこし置おいて呉くれと御言おひのことだからあ、宜いい  
ととも、表面うはべは何なんの氣きもつかない風ふうで家うちへは置おいて進あげたもの、何ど

様ないろいろと物をおもつたか知れないよ。此處に居ることを静岡へ知らせては呉れるなど、念に念を押しての御依頼だつたけれども、今白状してお前に謝罪がネ、何様も物の道理が然様は行かないと思つたので、お前には内密でもつて静岡の叔母さんへ、これくうの様子で、如是々々してお龍ちゃんは妾の方に御いでだと、妾が全然知らせて仕舞つたのだよ。』

此まで語り掛けし時、叔母はお龍を見て、

『それ御覽。汝のやうな分らないもの、云ふ事や思ふことばかりが何で通るものかエ。此方様のやうな方は何程御優しくつても、角々は嚴然と道理のある方へ御就きになる！。お前は知らないで好い氣になつておいでだつたらうが、ちゃんと妾の方へ御知らせくだすつて、いろく御注意まで仕て下すつたのだ。七分通り八分通り話の定つた婿を嫌つてお前には出られる、何處へ行つたかともかくれ知れず、また短氣を仕て若しや淵川へでもか何程妾が苦勞して困り抜いたか知れない、其處へ此方様からの行届いた御手紙で、やつと胸の凝塊が

すこし下つた。居所は知れたし、引掟へても思はないでは無かつた  
 が、何様せ其程嫌つて居る婿ならば、仕方がないからいつそ破談にな  
 すつたが宜からうし、破談になさるなら又當人が其地に居ないで、何  
 處へ行つたか知れないといふ分になすつた方が、事が済み易からう  
 し、若し強ひて無理な事をなさるやうでは當人の爲にも、却つてなら  
 ないやうな事になりは爲まいかと思はれるから、次第によつたら姑く  
 此儘御預かり申しても宜い、と能く分つた此方様の御親切な御仰あり  
 やうでもあり、また此方様の御噂も豫て聞いて何様いふ方かと合點し  
 ても居たので、とても妾には制道の就きません我儘者でございますか  
 ら既諦らめました、御甘え申しては濟みませんが然様いふ譯でござい  
 ますれば、此方の話も解けて濟んで仕舞ふまで御預かりを願ひます、  
 成程今妾が出て参りまして當人に會つても何にもなりませんまいから、  
 御迷惑でもござりましやうが其では何分宜しく願ひます、若し又當  
 人が不心得なぞを致して、御厄介を掛けますやうなことがございま  
 すれば屹度引受けます、と斯様いふ御挨拶を仕て願つて置いたのだ。

今解つたかエ、妾の心持も此方様の御思慮も。それはど妾にも此方様  
 にも人知れず氣を揉ませて置いて、それだのに何だエ、月日も経ない  
 中に又此方様を駈け出して、——妹のやうに思ふ子のやうに思ふとま  
 で云つてくださる此方様の御親切も、妾はお前の眞實の叔母だけれど  
 も然様は濃かにお前のためを思ふことは出来ないと我的折れるほど  
 に仕て下さる有り難い此方様の御恩をも全で餘所にして、何が不足  
 で無言で三絃の師匠だなんて彼んな悪い奴のところへ行つた。これ、  
 何故此方様を後にして稽古所なんぞの手助けを仕て自墮落に暮したの  
 だエ。彼女あお前、お前に碌でも無い男なんぞを取り持つた狸婆ぢ  
 や無いか。性凝りも無く、まだ浮氣が仕たくつて、彼様な奴に未始終  
 は食はれるのも知らないで、此方様を出たのかエ。猫！。いやらしい  
 猫！。ほんとにいやらしい猫！。猫だつて畜はれた恩を三日経つてか  
 ら忘れる、汝あ畜はれて居て可愛がられて居て既時に忘れたのだ。妾  
 にも然様だつた、此方様にも然様だつた。お前のやうな好い姪をもつ  
 て人様の前で、妾あほんとに肩身が廣くつて何様なにか嬉しいよ。』



と、  
例<sup>れい</sup>の眼<sup>め</sup>を動<sup>うご</sup>かしく思<sup>おも</sup>ふさまに罵<sup>のの</sup>つたり。

## 其二十五

然様いふ氣性の人と思へば腹は立たぬながら、理由も知らず唯一概に  
 猫よ畜生よ猫にも劣るとは何程叔母様なればとて餘りなる言葉。靜  
 岡から唯一つの頼にして出て來たほどの此家を無言で出たのは、よ  
 くく口惜しい悲しい事の有つたればこそ、生きて復顔を見たり見ら  
 れたりする氣が些でもあつては、お形さんの親切を餘所にして、何様  
 して彼事な事の出来るものでは無し、全く憎い憎い源を殺して自分も  
 死んで仕舞ふ氣で、濟まないことは悉皆冷くなつてから謝罪の積りの、  
 遺書さへ身に着けて持つて居て此家を脱けて、出會つたが最後一發と  
 思つて居た、其は其の事無くて其の意の見えずに濟んだゆゑ、たゞ  
 勝手淫奔の心から彼様なところへ行つて、身を自墮落に稽古所に置く  
 と思はれても仕方無けれど、自分の姪を其様な悪いものにして罵詈  
 せば何が面白いのか、辯解すれば又男を殺さうとした叔母の知らぬ一

條の談を、こゝで新規に仕出さねばならぬ故、知らぬを幸ひにして黙つて悪く云はれて濟ませば、それで濟むことと濟ましも仕やうなれど、餘りといへば同情の無い、我ばかりの人と、私に口惜く思ふか眼さへ沾ませて、お龍は小さくなりしまゝ、咳嗽一つせず、たゞ頸垂れて凝然としたるさまは、首の座に直れる罪人の罪狀讀まるゝを、何と詮方も無く聞き居るにも似たり。

『其様なにまあ苛いことを仰らないでもの事で、お龍ちゃんが妾のところを出て彼家へ行つて居るやうな經歷になつたのには、いろ／＼の理由もあることで我儘ばかりぢやありません。それは濟んで居るとだから何様でも好いとして、此度叔母さんが此地へ出ておいでののは、お龍ちゃんお前の今居る家の彼の御師匠さんネ、彼の人がお前を呉れろと叔母さんのところへ、何だか變に搦んで云ひ込んで行つたといふ其から事が起つたのだよ。』

『ほんとにお前は何處迄人に世話を焼かせるのだから数が知れないんだよ。お前が此方様に御用介になつて靜穩しくさへ仕て居れば紛紜の無

いものを、性の知れない人の世話になんぞなるから、下らない苦勞を  
 無益にさせられる！。此方様の御音信で汝の様子も大抵は知つて居た  
 が、此頃になつて汝の師匠といふ人から、何でもお前を貰ひ度いから  
 との再々の云ひ込みだ。これよく御聞きなさい。一體ならお前のやう  
 なものは遣つて仕舞ふ方が苦勞拂ひだから、鯉節でも付けて遣つて宜  
 いのだが、見す見す食物になつて仕舞ふ前途が見えて居るから、然様  
 はなりませんといつて挨拶したら、まあ何といふことだらう、直に  
 狼物の本性を出して、長い間御世話をして居た費用がこれ／＼だ、  
 お龍さんを下さらなけりやあ御立替を如何かなすつてと、吃驚するや  
 うな法外のお金を妾から取らうといふのだ。人を田舎婆に仕て小馬鹿  
 に仕たつて、野へ出ても座敷へ上つても人にやあ負けない婆だ、先方  
 が然様出るなら、此方も出様がある、お龍は妾の姪だ、妾が連れて歸  
 ります、お龍に御注ぎ込みなすつたのは汝さんの御親切だ、妾あ  
 些少でも御恩になつた覚えはありません、何も誘拐を御商賣にやあな  
 ざりますまいから、人の姪甥に指を御さしになる事は有りますまいと、

お前<sup>まへ</sup>を拉<sup>ひつちよび</sup>去<sup>おほて</sup>いて大<sup>ふつ</sup>手を振<sup>しづをか</sup>て靜岡<sup>かへ</sup>へ歸<sup>ど</sup>つて、何<sup>か</sup>様<sup>ほん</sup>な顔<sup>かほ</sup>を仕<sup>し</sup>て膨<sup>ふく</sup>れるか  
見<sup>み</sup>て遣<sup>や</sup>らうと思<sup>おも</sup>つて、東<sup>とう</sup>京<sup>きやう</sup>の生<sup>い</sup>狡<sup>けする</sup>い狸<sup>たぬき</sup>婆<sup>ば</sup>の皮<sup>かは</sup>を剥<sup>む</sup>く氣<sup>き</sup>で出<sup>で</sup>て來<sup>き</sup>たの  
がネ。』

と、面<sup>ま</sup>前<sup>あたり</sup>にでもお關<sup>せき</sup>が居<sup>ゐ</sup>るやうに怒<sup>おこ</sup>り立<sup>た</sup>つて力<sup>りき</sup>んで云<sup>い</sup>へる語<sup>もの</sup>氣<sup>い</sup>面<sup>か</sup>色<sup>ほつき</sup>、  
なかく當<sup>あた</sup>り難<sup>がた</sup>くあしらひ難<sup>にく</sup>き婆<sup>ば</sup>なり。

## 其二十六

『だがお龍、お聞きなさい、妾あ敵手が角で向つて來りやあ此方も角で向つて行くけれど、お前のやうに眞になつて世話を仕て呉れる叔母にも自分の勝手ぢやあお尻を向けたり、折角優しく仕て下さる此方様をも時の都合ぢやあ袖にするやうな、其様な自分勝手ばかりは夢にも仕ません。お前は何ぞに付けぢやあ、叔母さんは無理壓制だ、頑固だ、自分流義で何でも押して行かうとすると御云ひだが、そりやあ頑固でもあらう、自分流義でもあらう、然し恩は恩、仇は仇でちやんと記えて居ます、お前のやうに恩も仇も見さかひの無い事は妾あ仕ません。だから今そのお關つていふ奴のところへ押し込んで行つて、田舎婆は田舎婆だけの意地も有りやあ根性つ骨も突張つてゐるところを見せつけて遣つて、間違つたことは云はない妾だもの何負けるものか、思ふさま振ぢ合つて振ぢ合ひ抜いて、勝鬨を吐いて歸らうと思つたが、ま

づ其の前に此方様へ伺つて、段々御世話になつた御禮も云つたり、ま  
 たお前が我儘に此方様を出て御親切を無にした御謝罪も仕たり、一應  
 は此方様の御思召も伺つてから、それから争ひ合ふなら争ひ合はな  
 くては義理が悪いと、それで突掛けに此方様へ伺つて、御噂にばか  
 り伺つて居た方にはじめて御目にかゝつたのだよ。ところが、これ  
 お龍、お聞きなさいよ。道理に違つたことを云は無いものは何處に  
 でも味方があります。いろ／＼とお前のことを御話し申したところ、  
 悉皆妾の云ふことを道理だと仰あつて下すつて、お前は何ぞの時には  
 此方様を楯に取つて、妾の云ふ事を肯くまいなんぞと思つてるか知ら  
 ないが、もう然様は行きません御生憎様！、何様して何様して判然と  
 物の道理を御見分けなさる此方様だもの、可憐からつて御前の味方に  
 はなつて下さない、すつかりと既妾の味方になり切つて下すつたの  
 だよ。彼様なところに居るのなんぞは全くお前が悪い、と散々に仰あ  
 つて、彼家を出させるやうにとの御思召なのだ。然し何も態々とムキ  
 になつて悪い奴を相手に争ひ合つても仕方が無からう、お前が彼の御

師匠さんていふ人の腹さへ解めたら彼家に居やう氣も有るまいから、  
 力を入れてお前を梶ぎ取りに行かなくつても濟む譯だ、と仰あつて下  
 すつたから、成程と妾も思ひついて、何も老年が皺つ顔へ筋を立て、  
 喧嘩しずとも濟むことならば、と狸婆の面の皮を拗りに行くことだけ  
 は思ひ止まつたが、』

此處まで語れる時、お彤は後を取つて、

『で、ネエ、お龍ちゃん、叔母さんも實のところは、お前を直に前のや  
 うにまた連れて歸つても、何様も田舎の人は嫌ひだなんて云つて取つ  
 て遣る婿を嫌ふやうでは始末が着かないからつて、あぐんで居らつし  
 やるのだから、そこで妾が叔母さんに對つて、何様にでも彼様な可厭  
 人の傍からお龍さんを離して御仕舞ひなさるのは其りやあ宜うござ  
 いましやうが、それもお龍さんが彼の御師匠さんの腹の悪いのを自  
 分から氣が付いてで無くちやあ可けません。それから田舎へ連れて御  
 歸りなさるのも、矢張りお龍さんが其の氣にならなけりやあ、末始終  
 が詰りますまい。妾のところへ來て氣樂に遊んで居るのが一番お龍さ



んの利益だとも思ふし、又妾が此様な境遇で居ながら立派な口をきく  
 のでは夢更無いけれども、其の中には末々のお龍さんの身の収まりも  
 妾の分別や力て出来るだけは仕て上げたいとおもひますが、これも  
 お龍さんが妾のところへ來て居るのを嫌つちやあ仕方は無いし、若し  
 又餘所の堅いところへ奉公住みでも仕やうといふやうな氣でもあるな  
 ら、それもお龍さんの料簡次第だし、又些は遅けれども此節柄の事では  
 有り、學校通ひでも仕て、何でも女一人で人の世話にならずに遣つ  
 て行かうといふのなら、それも其で妾の手で三年や五年は蝦茶袴さん  
 で過させても上げたいと思ひますから、何事も無理壓制は可けません、  
 ようく當人の所存もゆつくりと聞いて見て、其の上で何様ともする  
 方が宜うございます。お師匠さんといふ人にやあ、お金を遣せなら遣  
 つても宜うございますが、餘り仕方が憎いから、お金は惜くは無いけ  
 れ共奪られるのは業腹です、お龍さんの心次第で、何様とも仕て遣り  
 ましやうつて、斯様いつて妾あ御挨拶を仕たのだよ。』  
 と、張りも弛みもせぬ例の調子に述べたり。

## 其二十七

「解つたかエお龍、まあ何といふ有り難い御優しい御思召だらう。小兒の時から可愛がつて下すつた上、お前は御恩に負いて狗猫のやうな事を仕ても、別に愛想づかしも仕て下さらないで、お前が稽古事を仕たければ其も爲せて遣らう、家に居たいなら家に置いて遣らう、未々の身の終局も頼むなら心配して遣らうと、斯様なに親切にして下さる方が何處にあると御思ひだ。早く料簡を入れかへて眞人間になつて、あやんと女は女一人だけ羞かしくないやうな今日の送り方をする身になつて、御恩返しは出来無いまでも御親切を無に爲ないやう仕なければ、叔母の此の妾にやきもきと幾干の苦勞させる、其の罰はよしんばお前に當らない迄も、此方様の罰が未始終は屹度當つて、お前は碌な死狀は出来すまいよ。花が奇麗だ、蝶々が可憐い、人形が氣に入つたなんぞと、其様な下らない浮々としたことを云つて居て過せるもの

ぢや無い世よの中なかだから、宜いい加減かへんに目めを覺さまして確乎しつかりとした氣きになつて、片目めつちちでも跛足びつこでも構かまはないから食くふに困こまらない男をとこを持つて、そして子こでも生うんで末すゑの安堵おちつきを見るやうに仕無しなくつては濟すむ譯わけぢや無い。自惚うぬぼれて居ゐたつて可いけは仕しない、情夫をとこに棄すてられる位ぐらゐの容貌きりやうで居て、飛とび抜ぬけて何なにが一つ出で来るでも無い天稟うまれつきのお前まへなんぞは、自分じぶんで理屈りくつを付つけりやあ理屈りくつも有あるだらうが、世界せかいから云いつて見みりやあ圓中はたけの蠻南瓜たうなすか茄子なすか白瓜しろうりで、何様どうやうせ其邊中そこらぢうにある數物かずものなのだもの、好いい加減かへんに熟できた時分じぶんに何様どうやうかなつて仕舞しまふのが當然あたりまへの事ことで、早速さつそと縁えんのあるところへ行いつて一代働いちだいはたらいて、種子たねでも遺のこすより他ほかにいざもござも有ありやあ仕しないのだよ。だから妾わたしが其その積つもりで世話せわを焼やいて遣やつたのに、何だの彼かだのとだゞを捏こねて妾わたしを御困おこまらせだつたが、其それもまあ縁えんが無なかつたのだと其そのの事ことは濟すまして仕舞しまつたところで。蠻南瓜たうなすを眞綿まわたに包くるんで藏しまひ通とほしたつて何なんになるものでもない、矢張やつぱり何様どうやうかして片づくところへ片づけてやつて、持つて生うれた役やくを濟すまささせなけりやあなら無いから、そこで妾わたしがお願ねがひを仕して、それでは静岡しづおかに連つれて歸かへる

ことは廢案に仕まして、御甘え申して濟みませんが何様か此方様で  
 御使ひなすつて頂きたくございます、何でも手や足に鞍垢切のきれま  
 すやうにこき使つて下さいまして、其の中に破鍋に綴蓋で、彼様な奴  
 ても貰つて遣らうといふ方でもございましたら、此方様の御鑑識次第  
 で豆腐屋へでも炭團屋へでも何でも宜しうございますから身を固めさ  
 せて頂きたくございます、と斯様いつて妾が御願ひ申して居るのです  
 よ。もう可けません、我儘は云はせません、何でも彼でも妾の云ふ通  
 りに此方様の御世話を御願ひなさい。朝は味いから起きて夜遅くま  
 で、火も焚き水も汲み、炊事雑巾掛け、何から何まで御奉公人と勵み  
 合つて働かなくてははいけません。嫌だなんぞと云つても既承知しませ  
 ん。さあ丁度宜い、妾と一緒に、判然と改めて今後の御世話を御願ひ  
 御仕なさい。考へて居る事も何も有りは仕ません。』

## 其二十八

『然様まあ叔母さんの御言のやうにばかりもお龍ちゃんにやあなるまいけどもネ、ネエお龍ちゃん、聞けばお前も彼の御師匠さんていふ人の胸の中が解つて居ないぢやあ無いしするのだから、他のいろゝの事は後廻しに仕て置いて。何様だエ、彼家を出ることだけは先あ兎も角も出ると決めては。』

もとよりお關には密に愛想を盡かし居れるなれば彼家に居りたき事は微塵ほども無きなり、且つお彫に如是優しく云はれては背かうやうは無けれど、今彼處を去りて離れんは、春の野行きしたる折、圖らずも乗つたる田舎渡しの檻樓舟より振顧り視たる岸に、落ち零れの菜の花のあをらしくも咲きて、歪める茅屋の背門に桃の盛りなる風情などを見出し、とても何時までも眺むべきにはあらずと思ひながらも今少時目にしたきを、野川の甲斐無く小くても早くも着きたりとて逐ひ上げら

る、時、猶未練に其の船の中の戀しき様なる心地のして、頓には何とも答へわづらひたり。されども何處から何處まで氣の走るお形に、彼處を去りてはおのづからに水野と縁の遠くなるべきまゝ、其を厭ひて見すゝ悪い人と知れるお關が許に居たがるかと思はれんほど物憂くて、

『そりやあ妾だつて彼家に居たいことは有りませんが、でも彼家を出てからの妾の行先が定まらなくつちやあ。』

と僅に語のみを出して煮え切れぬ答をすれば、

『だから此方様に置いて頂くやうに妾が願つて居るでは無いか、分らないネエお前つて人は。』

と横合より叔母は焦燥に焦燥ぬ。

『ホ、ゝ、叔母さん其様に御急きなさらくつてももの事ですよ。ぢやあお龍ちゃん、お前も彼家に居たい事は無いのだから、彼家は出ること定め御置きで、そして其の次にお前の行く先を腹一杯に御考へが宜いぢやあ無いか。何日だつたか何かの話の序に、妾あ自家が富裕でお

嬢様で居られるやうな身なら、畫をかいて一生遊んで居たいと御云ひの事があつたが、今でも若し其様な心持を有つておいでゞ、そして畫でもつて遣つて行かうといふやうな氣でも御有りなら、そりやあ其でもつて妾が何様でも仕てあげるが……。遠慮無しに何でも思ふ通りを云つて御覽な。畫を習はうといふやうな氣も今ぢやあ無いの？。習やあお前は屹度出来る人だよ。』

『いゝえ、もう其様な事は些も思つてやしませんは。それでも自分の天稟が大した上手になれない位の事も分らないほどの盲目ぢや無いのですもの！。』

『ぢやあ鳴物は一體お前の性に合つては居るし、身に染みてほんとに好ぢやあ有るし、若し音樂でも學つて見やうといふやうな氣なんぞも無くつて！。』

『まあ厭ですネエ、人に教へたり人に聞かれたりするのには妾あ餘り好ぢやあ無いんですもの。』

『ホ、ホ、ホ。他にお龍ちゃんの好きな事は無いし。ぢやあ藝事で身を立

てやうつて氣も先あ無いのだから、修業沙汰なんかは一切御やめなの  
だネエ。』

『だつて今更、何か爲て一人で何様の彼様の仕やうつていふやうなこと  
も思つては居ないんですもの！。』



其二十九

『でも、それかと云つて叔母さんと一緒に田舎へ引込んで仕舞つて、叔母さんの鑑識で持たせて下さるお婿を持つて暮さうといふ氣は無いと再々御云ひぢや無いか。』

『そりやあもう然様ですとも！。妾あ何様あつても、何だか分らないで牛かnny馬うまみたやうに持いでる田舎の人の、御飯を喫べるために生きてるつて云つたやうな其様な分らない人と、一生暮すなんかつていふ事はnnygo到底出来とてもできないんですから。』  
叔母は堪へかねて口を挿みたり。

『それ、それ、其の根性が碌で無い、正當で無いのだよ。傍目もふらずにせつせと持ぎ通すのが上人といふもので、お前のやうに何だの彼だのと下らない事ばかり云つて居るのが間違ひきつて居るのだ。皆誰だつて御飯を喫べるために持ぐのぢや無いか。喫べる爲に持が無くつ

て何様なるものかね、下らない。』

『だつて其様なに大騒ぎを遣つて御膳を食べりやあ其でもつて何が嬉しいの?。』

『そんな馬鹿な氣樂なことを云つて居るから皆お前の考は間違つて居るのだよ。人間つてものは三度三度御膳さへ満足にいただいて行かれりやあ其で結構なので、嬉しいも嬉しいくないも要つた事ありや仕無い。お前なんざあ甚い苦勞といふものを仕た事が無いものだから、其様な下らない事ばかり云つて居るんだよ。』

『御膳を食べるばかりに齷齪して死んで仕舞ふのだつて、何程下らないか知れや仕無いは。』

『ホ、お龍ちゃんお前が悪いよ、目上に逆らつて!。第一談話に枝が咲いて仕舞ふはネ。ぢやあお前は稽古事は爲る氣は無し、静岡へは行くまいと云ふし、何様仕やうと御云ひなの?。妾の處へ來て妾の遊び相手になつてお呉れの積りなの?。』

『……………』

『いエもう遊び相手なんぞと仰あやると直に増長致します、矢張り引遣つて遣ると仰あつて下さいまし。』

『お龍ちゃんが黙つて居ちやあ仕様が無いぢやあ無いか。黙つてるところを見ると吾家へ来るのも厭なの?。』

『厭つて事は毫末も有りやあ仕ませんけれども……』

『ぢやあ何も其様なに考へてゐる事は有りさうも無いものぢや無いか。』

『でも姉さんのところへ来て居ると……』

『何か厭な事があつて?。』

『いえ、然様なぢや有りませんけれども餘り丁寧に仕て下さるんで、

——まるで眞實の妹かなんどのやうに、御嬢様あつかひに仕てくださるので、何だか居辛くつて仕方が無いんですもの。此の春だつて然様なのですよ。彼の時は彼様した譯で二度と姉さんにやあ御目に掛らないつもりで出たんですけれども、後になつても一つは其の爲に此方へは歸つて來なかつたので。彼のお師匠さんのところに居ることに仕ましたのも、いろ／＼の事を云つて引留められるからばかりぢやあ有り

ませんので。彼家に居りやあ居るだけの事を爲て報復しますけれど  
 も、姉さんの處に居ますと、何一つ用事を爲るのぢやあ無し、着物も  
 美麗に仕て下さりやあ髪から穿物まで氣をつけて下さる、それで三度  
 が三度とも据膳に對つて、姉さん同様に御給仕をされて御膳を頂くの  
 は、妾にやあ何だか結構過ぎて濟まないやうな氣がするのですもの！。  
 小間使や何かと一緒になつて何か用を仕やうとすりやあ、お止し、お  
 止し、不見識だよ、つて姉さんが御止めなさるのですら、あれだけ  
 御厄介になつて居た中に姉さんの爲に何か仕たと云つたら、たつた  
 一遍相思鳥の餌を摺つたことが有るつ限りなのですから。何程兒童の  
 時から一緒に寝たりなんか仕て、姉妹よりも仲好く暮して來たからつ  
 て、妾あ姉さんにやあ縁も由縁も何も無い身だし、そりやあ今が今で  
 も姉さんの爲になら火水の中へなり入らうつていふ氣だけは有つて居  
 ますけれども、今日までのところぢやあ何一つ姉さんの爲に仕た事で  
 も有るぢやあ無し、ただ甘つたれて可愛がつて貰つて居たと云ふだけ  
 の事なんですから、そんなに好くされるやう譯は有る筈が無いので、

何様も妾やあ氣が狭小なんでしやうけれども氣が咎めてならないので  
す。ですから、いつそ叔母の言葉の通りに扱き使つて下さるならば、  
願つても姉さんの傍へ置いて頂きたいのですけれど、何様も姉さんは  
姉さんの氣象でもつて然様は仕て下さるまいと思ふと、何も仕も仕無  
いものを餘り好くして下さるのが、妾にやあ心苦しくつて居られない  
のですから。』

『オヤ、オヤ、お龍ちゃんは大層他人兒におなりネエ。わかつたよお前  
の優しい奇麗な心持は善く解つたよ。何かと思つたら、ボ、ホ、ホ、  
其様な事だつたの！。つい過般までのお龍ちゃん此様な人ぢやあ無  
くつて、花簪の大きいのをお悦びだつた頃といふものは何を買つて呉  
れ、彼を買つて呉れつて妾をせびつちやあ、稀に買つて上げ無からう  
ものならブーツとお膨れでネ、夜になつて一緒に寝ても彼方を向いて  
口一つきかないで、そして足でもつてぼん／＼と妾をお蹴だつたぢや  
あ無いか。』

『あら厭な姉さんだこと！。兒童の時の事なんか御云ひ出しなすつち

やあ。』

『ホ、そのお龍ちゃんがまあ大層にませて、ほんとに遠慮深くお成りのネ！。い、よ、其なら其で其の様に爲るから。ぢやあ吾家に居ることにお定めが好いぢやあ無いか。』

お龍は辭せんとして今は辭する能はざる境に臨みぬ。お關の許を離れてお彤の世話になる事の嫌なるにはあらねど、何故にや前の日と今日とはお彤の語氣の異ひて、彼の水野をば悦ばぬ氣なるが何と無く心にかゝりて、此の人の許に明日よりの我が身を寄せんことの何かは知らねど窮屈らしき心地して、嬉しかるべき筈の事ながら然のみは嬉しからぬなり。

## 其三十

色ある蓋のいと艶に美しき電燈の下、上座にお彤、や、隔たり下つて  
 お龍の叔母、それよりまた下つて坐れるお龍の三人は今しも夜食の膳  
 の既に引き去られたる後を、心靜かに茶に物語るなり。  
 二人三様の心の思あれば面の色あり。お龍はおのが頼まんと思ひて來  
 しことは自然と半分は餘所にされて、思ひもかけざりし我が身の上の  
 彼家を出でて此家に居るべきやう定められたるに、可厭といふでは無  
 けれど何となく勇まぬ心地のするか、常とは違ひて沈めるやうなり。  
 お龍が叔母は、全く我が思ふ如くになりたりと云ふにはあらねど、兎  
 に角お龍を我が嫌ふお關が許より移し奪ひて、豫てお龍より聞きしに  
 違はず富みて美しく智慧深き此家の主人が許に預かり貰ふ事となりた  
 るに、心安堵きて莞爾つき勝なれば、根は善き人の徴とて顔に曇りな  
 く、例の小なる三角の眼さへ、其の眼尻に寄る小皺に却つて可愛らし

く貝ゆ。たゞお彫のみは心の動くこと無くてや、能く笑ひ能く語れども悦べるともなく樂まぬとも無く平然として、今猶前刻の如く澄まし返つたり。

お龍は何をか思へる、沈黙りて頭を垂れつ、頻に譯も無く自己が衣服の袖膝などに吸ひ出されたる綿を摘みては除り摘みては除りながら、人の話をのみ聞きて居れば、叔母はお龍が様子などには眼も遣らずして、

『どうも誠に種々有り難うございます、お蔭様で私も安心いたしました。では私は直接にはお關に會ひませず、此儘で國へ歸りまして、憚りさまでございますがお關の方の事は、一切此方様次第に願ひます。もしまたまるでにぎこちなく、若又全然握り拳でも濟みませぬやうの事でございましたならば、悪い奴に關りあつたのが不祥でございますから、三十四十の金を出し惜みは致しません、御話さへございますれば直にも差出します。何も彼も此女の爲宜かれと思ふからの事でございますから忍耐も致します。全く彼様な奴に鰐錢一つ呉れて遣ります因縁は無いと思ひますけれど



些少ばかりの事で煩い關係を残すのも可厭ですし、此女と彼の婆と往來で逢ひました時、此女に氣の怯けるやうな思ひをさせるのも可厭でございますから、其の位の事なら出しも致しやうと思つて居りますのです。其邊は御含み下さいまして、何様でも宜しいやうに御計らひを願ひます。此女の上は改めて今日私から御縫り申して御願申します。至つて我儘な無分別者ではございしますが、心から底から悪い奴といふのも無いやうでございますから、何様か十分に御斟酌なく御使ひなすつて、そして其中相應なものでもございました時に、御鑑識で夫でも持たせて遣つて下されば其上はございませぬ。私は斯様ながさつ者でございまして、姪一人叔母一人でございますから此を棄てる氣はございませぬ。何處までも好くして遣りたいのは山々でございしますが、とても私には制道の付きかねる氣まぐれ者めでございしますので、此方様へ願ふよりほかには願はうどころも無いやうな譯でございますゆゑ、御迷惑でもございましてやうが何様か御世話をなすつて下さいますやうに、汚い婆でございしますが是でも人様の御恩を忘れる

やうな獸畜けだものでもございませぬ田舎者ゐなかもものが、折入をりいつて此この通りとほにお願ねがひ申まをします。』

と、云いひさま頭かしらを下さげて染々しみぐと眞心まごころせめて頼たのみ聞きこえつ、

『歸かへりましたら早速衣類さつそくいりも送りましやうし、又、當人たうにんの小遣こづかひなんぞは御ご厄介やくかいにならないやうに致いたしましやう。萬々まんぐ一當人いちたうにんが不都合ふつがうな事ことでも仕し出だしましたらば、決けつして御迷惑ごめいわくは掛かけませぬやうに、屹度私きつとわたくしが引請ひきうけまするから、何卒御奉公人どうそごほうこうにん同様に御扱おあつかひなすつて、末々すゑぐを宜よろしく御願おねがひ申まをします。ほんとに少い時ちひさから御馴染おなじみ申したのが當人たうにんの幸福しあわせとは申まをしながら、是これといふ譯わけも無いのに斯様こんな我儘者わがまものを御願おねがひ申まをしまして、そして快こころよく御引受おひきうけくだすつて頂いたくといふのも、思おもへば餘り有あり難がた過ぎまして、何なんだか不思議ふしぎなやうな氣きが致いたします位くらゐでございます。』

『なあに、其様そのんなに恩おんに被きて下くださる事ことは有ありやあ仕しませぬ、人は各自ひとめいの氣性きせうで種々いろんな事ことを爲するのですもの！。好すいた盆栽うゑきの世話せわを仕したからつて、盆栽うゑきに御禮おれいを云いはれやうつて思おもふ人は一人ひとりも有ありやあ仕しませぬ、

ただ其の樹が好くさへなりやあ其が嬉しいので。不思議な事も何も有りやあ仕ませんは、妾あ一體お龍ちゃんが好きなんですもの！。ただお龍ちゃんが好くさへなつてお呉れならそれで本望なので、何様にか嬉しく思ふか知れやしません。』

と軽く答ふれば、何不足無き人の氣の持ち方はまた違ふもの、世には此の様な人も有ることか、と田舎者の我が心の狭く堅くろしきに比べてつくづく感じ入る時、

『あの、お富の親父でございますつて、妙な老夫さんが御臺所口へまゐりましたが、お杉さんも知つて居る人のやうに見えます、何様致しませう。』

と、其の來れる客の如何なる人なるかを小き胸に危むが如き眼色して、年若く可憐らしきお春は取次ぎたり。

『い、よ。彼方へ行つて會ふのも面倒だから、此室へ連れておいで！。』

『お富の親つて、彼の妾の好きなお富さんの？。』

『ア、彼女の？。』

『彼女は退つたの？。』

『いゝえ、然様定まつた譯ちやあ無いが、大方それで來たのだらう。』

お龍とお彤との間に問と答へとの交はさるゝ間も無く、お春に導かれ  
て屈みながら此方へ來れる男は、お彤の面をば見るや見ざるや、室の  
内へは入りも得せず恐れくゝて鳴居の外に坐りつゝ、先づ其の瘤せ枯び  
ていと薄く長う見ゆる掌を疊に並べ貼けて、頭を其の上に摺りつけ町  
寧に挨拶したるが、電燈の鮮やかなる光りは、光澤無き細き毛の烟の  
やうにほやくと薄く残れる頭を照らして、悲しき老のさまを見はし、  
左のみ見苦しき檻樓を纏へりとはあらねども、肩窄りて何處と無く  
寒げなる様子は、見るものをして此の人貧に窶れて苦めるにはあらず  
やと思はしめたり。

其三十一

『好くお入來だつた、さあ遠慮仕無いで此方へ御入り。』

と、お彫に優しく言葉を掛けられて、老人は漸くに頭をこそ擡げたれ、

『ハイ、ハイ。』

とばかりにて猶中々に席を進まず。

『お富は何様仕ましたえ?』

と、親しげに復問はれて、

『ハイ、ハイ。イエ、どうも不都合な奴でございまして、何共ハヤ、ど

うも申上げやうもございせんぞ。』

と、脱け上りたる額、細き鼻、たださへ貧相の面に虚偽ならぬ當惑の

色を見し、甚く恐縮して同じ様の事のみを云へるは、傍眼のお龍にさ

へもどかしく聞えたり。

身に光澤も無く氣に張りも無くて、ただ老猫の寢ぼれたるやうの、此

の老人らうじんの様子やうすを、お彫とうは心底しんぞこより可笑おかしがりてか、唇くちの邊あたりにちらりと笑わらひをば上のぼせしが、忽たちまち地みづかにして自ら抑おさへて、

『そんなに謝罪あやまつてばかりおいでぢやあ話はなしが出来できませんよ。何様どうしたのだえお富とみは?。』

と、極きはめて平穩おだやかに問とへば、老人らうじんは辛からくも力ちからを得えたりと覺おぼしく、

『ハイ。イエ、どうも飛とんでも無い大變たいへんな過失あやまちを彼女あれが致いたしまして、』と云いひかけて復またていねい叮嚀かしらに頭さを下さげたり。

笑わらふべき事ことにはあらねど何なんと無く其その眞面目まじめ過ぎ萎縮いぢけ過ぎたる様さまの、氣きの毒どくらしきを越こして稍可や、をかし笑わらきに、お龍りうは思おもはず眼めのみに笑わらひたり。

『そんなに謝罪あやまつてばかり居ゐないでも宜ようござんすといふのに。』

『ハイ、イエ、然様仰さうおつしあつて下さいますと、愈いよく恐おそれ入いりますので。廻まはり

くどうございませうが御託おわびを申まをし上げます、何卒どうぞ知聞おきき下さいますやうに。もうこれお詫わびにも出でそびれて十日とほかばかりになりましたが。然様よう、エ、ト、コート、丁度ちやうど今日こんにちで十一日じゅういちにちになります。彼女あれが貴女あなた、眞ま青さな顔かほをして駈かけ込こんでまゐりまして、御主人様ごしゅじんさまの御大切ごたいせつな御菓子鉢おかしばち

を仕舞はうとする時、つい取り落して割つて仕舞つたと申すのでございます。』

『ハア、大方其故で駈け出して行つて仕舞つたのだらうと妾も思つて居たが、今に何とか云つておいでだらうと思つて人もあげなかつたの。然様です、古渡りの繪南京の、一寸無い鉢を破つて仕舞つたので。』

『ハ、ハイ、ハイ。どうも飛んでも無い麁忽を致しました事で。其品は利齋とか仰ある方が納めました品でございまして、其折色々とその御器の結構な事を御話しなさいました其談をちらく〜と彼女が承はつて居つたさうで、何も分りません彼女でも大層結構な貴い御品だといふ事だけは存じて居りました故、これは御詫の仕やうも無い事を仕たと、ト胸を衝いたと申すのでございまして。何様も何ともハヤ相濟みません事で。ハイ、ハイ。それから私が貴女、代りの品を差出しまして御勘辨を願はうと存じまして、彼女と二人で東京中を捜しました、中々どう致しまして似たやうな品もございせん。』

『まあ詰らないそんな餘計な苦勞を仕て貰はうとも何とも此方ぢやあ思

つて居も仕ないものを!。」

『ハイ、ハイ。まことに何様も恐れ入りましたことで。然様仰あつて下さいまして、夫では濟みません譯で。貴女、彼女が此方様へまゐります前に御奉公致して居りました御邸は伯爵様とかでいらつしやいましたが、彼方様では都べて女中の毀しましたものは皆其の毀したものが償ひまする御定規でございまして、彼女なぞは頂戴するものが少うございますから、始終持出しになりますやうな事でございました位で。』

『へーエー!。』

『でございますから貴女、私は一生懸命に捜しまして、終には利齋といふ人まで尋ねまして仔細を話しまして、これくの鉢が欲しいと申しましたところ、今欲しいと云つても今有るものでも無いし、有つたに致しても如是の價のものと承はりまして、私連の力には及びかねます大變なものでございましたのでいよく吃驚致しまして、とてもめくと御詫に出られた段ではございませんが、死ぬやうな氣になつ



て漸<sup>や</sup>つと今日<sup>こんち</sup>御託<sup>おわび</sup>に出<sup>で</sup>ましたで。』

こゝまで云<sup>い</sup>ひさして埋<sup>うづ</sup>むるが如<sup>ごと</sup>く疊<sup>たみ</sup>に頭<sup>かうべ</sup>を擦<sup>す</sup>りつけたる時<sup>とき</sup>、薄<sup>うす</sup>き髪<sup>かみ</sup>の下<sup>した</sup>に透<sup>す</sup>きて見<sup>み</sup>えたる頭顱<sup>あたたま</sup>の地<sup>ぢ</sup>には、如何<sup>いか</sup>ばかり弱<sup>よわ</sup>き心<sup>こゝろ</sup>の苦<sup>くる</sup>しくや感<sup>かん</sup>じけん、慚<sup>はづ</sup>かしさと切<sup>せつ</sup>無<sup>な</sup>さに絞<sup>しぼ</sup>り出<sup>いだ</sup>されたる熱<sup>あつ</sup>き汗<sup>あせ</sup>の點<sup>てん</sup>々と玉<sup>たま</sup>をなして、蒸<sup>ゆ</sup>氣<sup>げ</sup>さへいさゝか立<sup>た</sup>つごとく見<sup>み</sup>えたり。

## 其三十二

『何様も何と申上ましても相濟みません無調法で。ハイ。口ばかりで何を申し上げましても、實以て相濟みません譯で、ハイ。お羞しいことを申し上げませんければ理が聞えませぬが、實は段々と不幸は續きますし、私は病身で商法は止めて居りますし、少しばかりの地所家作で細々と遣つて居ります中を、不孝者めの伴に大無しにされまして、まことにはや何様も斯様もならいやうになつて居りますので、ただもう明暮、倅めの碌で無しの料簡の直りますやうにと、信心を致すのを今日の勤に致して居るやうな意氣地の無い次第でございますから、何共恐れ入ります身勝手な申分ではございますが、今が今何様にか致さうと致しますれば、私一人のところへ夫婦掛向ひの人を置きまして、その貸間の料で食べて居りまする住家をでも、何様か致して算段致すより他はございませんので、それでは何様も後々のところが……』

貧相な顔をいよく、貧相に仕て困難の趣きを述べ哀愍を乞はんとする、其の言語は人の同情を惹くに足るほどの氣合さへ乏しけれど、其のくどくどしく惡叮嚀なるに愚直さは盡く知られたり。

お彤は最早聞き居るに堪へかねてや、言葉の澁みに付け入りて又靜に又爽快に、

『まあ其は大層に心配をお爲だつたねえ。お前さんは當世にあ珍らしい律義な氣性なこと！。なあに彼様な鉢の一つや半分、麁忽で毀したものを何で妾が償へなんぞといふものですかネ。』

と云ひ出せば、老人は何と聞き取つてか慌て、遮りて、

『ど、何様致しまして貴女、伯爵様の御邸でさへ、』

と、身に入みて記えたる事にても有るなるべし、伯爵邸の定規を例に引きかくるを、二の句を續がせず、お彤は冷やかに笑つたり。

『まあ御聞きなさいよ。伯爵様の御邸は伯爵様の御邸で、妾の家は妾の家ですよ。い、身分の方の眞似を妾等が仕ちやあ成りませんからネ。金屬でも有りやあ仕まいし、根が磁器ですもの、破れることも

有りましやう、其の磁器が鹿忽で破れたのを何様まあ酷く咎め立を仕  
ましやう!。』

『ハ、ハイ、ハイ、ハイ。』

激しく感じたるならん、氣息の詰まるやうに老人は急き込みて挨拶し  
たり。

『それも平常の勤め方でも悪いといふのなら叱言を云ふまいものでも有  
りませんが、何も彼も悉皆好く爲て呉れて居る彼のお富の爲た過失で  
すもの!。』

『ハ、ハ、ハイ、ハイ。』

『少し位の品を毀したからつて何を云ひましやう!。使つてる中に器物  
が毀れるのは當然の事で、其を厭やあ箱の中へでも藏つて置くより  
他有りやあ仕無いと思ひますよ。器物をいたはつて人をいたはらない  
やうな事は妾あ大嫌ひで、あんな磁物を十個集せたつて百集せたつて  
お富が出来るのぢやあ無いんですもの、幾干お富の方を大切に思つて  
るか知れや仕ません。』

『ハ、ハ、ハイ、ハイ。』

『だから過失は過失で、一言詫を云はれりやあそれまで、濟まして仕舞ふがネ、それよりやあお富が大變に濟まない事がありますよ。』

『ハハツ、ハイ、ハイ、ヘイ。』

『其あ黙つて駈け出して仕舞つて妾に不自由をさせたことです。何も彼も彼女にさせて居るのに、急に出て行かれちゃあ何様なに不自由に思ふか知れません。丁度好い代りがあります有ったやうなもの、眞底詫びる氣があるなら、歸つて來てちゃんと勤めつづく方が何程好いか知れやしません。』

『ハ、ツ、ハイ、ハイ。で、では麓忽を致しましたのは御免し下さいまして、そ、そして今迄通り御使ひ下さいまするので。』

『使つて遣りますとも、使つて遣りますとも！。あんな忠義もの、氣立の好い兒が、磁器の三つや四つ破したつて何の何とも思ふもんで。』

『ハア、ツ、有り難うございます、有り難うございます。早速彼女に唯今の有り難い御思召を申聞かせませんでは。』

老人は嬉しさに泣かぬばかりの顔して、許しをさへ得ば立たんとし追立尻になつたり。

『お富に話すつて、近處へでも連れて來て居るの?。』

『ハイ、イエ。一緒に連れてはまりましたが、御裏口の戸外に立たせて置きましたので。』

『ホ、ホ、、愍然に!。何だつて戸外になんか立たせて置くのだらう、早く此方へ連れておいでなさい。』

其三十三

『妾は東京にやあ今時彼様いふ人は無からうとばかり思つて居ましたが、たまには矢張り彼様な正直な篤實の人もございますのネエ。』  
お龍の叔母の如是云ひ出づるを主人に答へさする迄も無く、お龍は代つて、

『そりやあ叔母さん東京だつて狡猾い人ばかりぢやありません、廣いんですもの。今の話の伯爵のやうな卑格な人も有る代りにやあ、姊さんのやうな氣の大きい人もあるぢやありませんか。』  
と云へば、

『ほんにね！。だが、其様な高い磁器なんか有るものか知ら？。』  
といふ。

『なあに、高いと云つたところで多寡の知れたものですが、つまり氣の小さい人にやあ何様なものでも大したものに思へるのでねえ、それで大

變に心配したのでしやう。』

とお形の打笑ふ此の問答の中に老人は復入り來りしが、背後には恐れ惶みて小くなりたる若き女を連れたり。お龍の叔母は何氣無く打見やるに、面貌は老人を其儘に眼も細く鼻も細けれど醜きかたにはあらず、卵子形の顔の上品に優しくて、慾には色のや、青白く束髪(そくはつ)の毛の纖過ぎて嵩(かさ)少きを治して遣りたけれど、年齢には似氣無く靜に沈着いたる様如何にも恰(り)恹(こ)らしく、お龍には慥に三歳四歳劣りなるべけれど、見比ぶればお龍の方若く浮々として、既に生死の苦勞を知るにも似ず猶あど無く見ゆ。今の談のお富とは是なるべし、成程平常は過失など中々仕出すまじき愼み深げの、氣の能く廻りさうなくすみたる女かな、これで若し此程に縞の粗き銘撰を着居らずば、能く見ぬものは二十歳とも見做すべしと一度は思ひしが、流石に年齢は年齢なり、主人と眼を見合すや否や、いと幼き素振りの繕ひ氣も無く頭を疊に掛けて、『飛んでも無い鹿忽を致しましたのを、御免下さいまして眞に有り難うございます。それから御斷りも致しませんで宅へまゐりましたのは



猶相濟みませんでございました』

と素直に謝罪れば、お彤は莞爾やかに、

『平常のお前の仕方が好いから叱らうとも何とも思つてやしません。過失は過失だから仕方が無い。これからさへ氣を付けてお呉れなら其で可よ。さあもうをかしな顔を仕ないでお前の馴染のお龍ちゃんにも挨拶をお爲。』

といふ。叱りだにされず免されたる嬉しさに、さしぐむ涙の目をあげて、さてそつとお龍を見て懷しげに叩頭すれば、お龍もまた懷かしげに其方を見やりて、

『お前さんが此方に見えなかつたので、妾あ何様なにか眞實に淋しく思つたらう！。丁度好い事ねえ、かうして歸つておいでだつたのだから、またこれからお前さんと仲を好くして、先のやうに又毎朝起して貰ひましやうかネエ。ホ、ハ、ハ。』

と埒無きことを早語り掛く。

『また其様な下らない好い氣ぜんの事をお前はお云ひだよ。』

苦々しげに叔母はたしなむるをお彤は餘所に聽きて茶をや得んとする、お春くと呼ぶに、お春は如何にしけん更に出で來らず。かゝる事を甚く悦ばぬお彤の、聲こそは彷彿なく高めね、

『お春、お春、』

と復呼べども更に答へなし。

『お春！。何様したえ？ お春！。』

一ト聲は一ト聲に癩の募るさま歴々と見ゆるに、

『何でございますか、妾が』

とお富の立ちにかゝる時、臺所とおぼしきところにて、

『お春さん、お春さん、御召しなさるやうぢや無いかえ。おや、お前さん、何を泣いて居るの？。』

とお杉が平素馬士聲とて叱らるゝいと大きな丈夫さうな其の馬士聲の聞えぬ。

其三十四

「鶉うづらといふ鳥とりは自分じぶんの身みから出る香氣かきを止とめて仕舞しまつて、獵犬かりいぬに嗅かぎ出だされないうやにする機能はたらきを有もつて居ゐると銃獵者とりうちに聞きいたが、お形どう、汝きさまは一體いつたいが嫌いやに治をさめきつて居ゐやがつて、そして時時鶉ときときうづらのやうな藝げいをする奴やつだなあ。』

とは嘗かつて筑波つくばが爛醉らんすゐののちに罵ののりし語ことばなるが、吉よきに遇あひても齒齦はぐきを露あらはして笑あみくつがへる程ほどは悦よろこばず、凶あきに遇あひても眉まゆを皺しわめて沈しづみ入いる程ほどは悲かなし、何時いつも自分じぶんの顔かほつきの不齊むらの無ないうやにと心こゝろがけて居ゐるでも有あるまじけれど、自然おのづと胸むねの中うちのさまを鮮あざやかに他人ひとに讀よめるやうには面かほに出ださぬお形どうも、烟草たばこには烟草たばこの蟲むしの有ある道理だうりにてや、矢張やはり或機あるをりには心こゝろの悶もたをば盡ことごとく面おもてに現あらはすなり。

何時いつの事ことなりけん、一劇場あるしばゐに西洋婦人せいやうふじんの奇術きじゆつの興行こうぎやうの有ありし時とき、姊ねえさん、大變たいへんに面白おもしろいといふ噂うはさですから連つれて行いつて見みせて。』

とお彫に請求りけるに、

『観たけりやあ汝一人で行つて御覽な。魔術は妾あ大嫌ひだよ。』

と膠も無く云はれしより不圖お龍は心付いて、差當り我が智慧にて何共解らぬ事にあへば、お彫は甚く面白からず思ふと見えて、必らず可厭な可厭な顔して不快さを示すを知りぬ。

何事の悲しくてお春は泣けるぞや、誰も其の故を思ひ得しものは無けれど、誰もまた其の故の分らねばとて何と思ふも無きに、お彫は例の我が合點の行かぬといふことをば強く忌々しがつて、其の故を解かんと、苦み悶ゆるなるべし、たゞ轉瞬するほどの刹那の間なれど、星のやうなる兩眼をや、寄せて上眼づかひしたる其の様子、何とも云へぬ可厭なところありて、牙彫の小町のやうな申分無き眼鼻立の美しさを人も人をして忘れ果しめたり。

かねて心づき居ればこそ、お龍ただ一人はお彫が其の不快げなる面を爲したるを早くも見たれ、他の人々は更に氣の付かぬ間に、其人は復忽ち舊の様子になりたり。

お形はお春に復び管はず、お富に命令くればお富は心得て、人人に茶を侑め菓子を薦めなどしけるが、其の中良久しくお杉お春は何をか語りける、やがてお杉は次の間に來りて打笑ひながら、

『お春さんの泣いて居りましたのは斯様なのでございますよ。ほんとに可憐らしいぢやあございせんか、あの斯様なのでございます。お富さんといふ方が歸つておいでになれば妾はお暇になるでしやう。折角こんな好い御家へ來合せたのに、また吾家へ行くのかと思ふと餘り情無いので、今伺つて居れば結構なお道具をお富さんといふ方が僣忽なすつても、器物よりやあ人が可愛いと仰あつて御叱言も無くつて済みました、其のお優しい御話を伺つて居る中に妾あ胸が痛くなつて參りました。つい先月の末、詰らない茶飲茶碗一つ妾が僣忽して破りました時は、そりやあ繼母の事ですから仕方無いのですけれども、妾あ一時間も二時間も口ぎたなく叱られました上、終にやあ性の付くやうにつて火の點いて居る煙管の雁首をまつと手の甲に捺し付けられました。今の御話を伺つて居る中に其の事を思ひ出しましたら、妾

あ猫になつても宜うございますし、御膳を頂かなくつても宜うございますから、何様か此方の御家の何處かの隅へ置いて頂きたい氣が仕て……何様せ何も知ませんので御役には立ちませんし、無益ですから、置いては下さいますまいつて、それでつい、泣いて仕舞つたといふのでございます。ほんとに聞いて見ますりやあ繼母だもんですので慇然でございますが、猫にでもなりたいたいなんかつて、ホ、ホ、何ぼ何でも可笑うございます。併しそれに付けてもよくくだと思はれます。』  
と告げたり。

聞けば何でも無き事なるにお形は晴やかなる面して、

『ホ、何かと思つたら其様な事なのかえ。慇然さうに、其様な居たがるものなら置いて遣りましよう。恰恠で、そして毅然としたところがある中々の好兒だから。』  
と云へば、其の語を聞きて物蔭に居たりしお春は如何ばかり嬉しくや思ひけん、誰が面前に居るとも無きところにて唯主人の方に對ひ、疊に手を突き頭を下げて恩を謝したり。

先刻より始終を見聞きせるもの、お富は云ふに及ばず、お富の父、お龍の叔母、お春、お杉の末に至るまで、誰が今寛大にして情ある此の家やの美うつくしき女主人ぢよしゆじんに心こころを寄よせざるもの有らん。あはれお彤とうは一つの器うつはを失うしなつて六人の心こころを得えたるなり。

お彤も流石さすがに心樂こころたのしきなるべし、鶉うづらのやうなる藝げいをすると云はれし人ひとながら、例れいの治め切きつたる顔かほつきの口くちの邊あたりに、見ゆるか見えぬほどの誇ほこりの笑わらひを含ふくみたり。

## 其三十五

お彫とうが分別ぶんべつに長たけたる事は對談たいはんの中うちにも知りしが、今又眼いままたまのあたりに  
其その胸むねの廣ひろく慈悲なげの厚あつきをば見て、隨分ずぶん負けぬ氣きのお龍りうの叔母おばも全まつた  
く我がを折をり盡つくくして、好よいと思おもひ込めば何處どこまでも好よいに仕して終しまふ  
田舎氣あなの正直しやうちき三昧さんまいに、此この人ひとにさへ頼たのみ置おけば何樣どう轉ころんでも間違まちが無ひなし  
と盡くく信しんじて、何分宜なにぶんしく願ねがひまするを百遍ひやくべんほども云いひたる末すえ、何事なにこと  
もお彫とう任せにして其次そのつぎの日ひに靜岡しづおかへ歸かへりぬ。

『お龍りうちゃん、お前一寸まへちよつ今いままでの居處うちへ歸かへつてネ、叔母おばのいひつけで今これ  
後からこれ／＼のところあに居ゐるやうになつたといふ事ことだけを斷ことわつておい  
でな。』

叔母おばの歸郷かへりを停車場ていしやじやうまで送おくつての後のち、何なにを思おもふにや茫然ぼうぜんとして爲なす事こと  
も無なく居ゐたるお龍りうに向むかつてお彫とうはかくの如ごとく云いひ出いだしたり。お龍りうは迷めい  
惑わくさうに眉根まゆねを寄よせながら、何なんの思案しあんも無なく、



『行かなくつちやあいけませんかね、ネエ行かなくつちやあ。』  
と、然もく其の事の宥免を乞ふが如くに云へり。

『ホ、嫌なの？ 其様に。怖いやうにでも思つて？。』

『怖いって事は有りませんけれどもネ、今日つから御暇を致します、左様ならつて云ふのが何だか云ひづらいやうな心持がするんですもの。』

『だつて何もお前が不義理なことを爲るつて云ふのぢやあ無し、お前にも分つて居るとほり先方のお腹の中が良くないんだから、ことわりを云ふだけの事に譯は無いぢやあ無いか。』

『そりやあ、理屈は、もうほんとに其通りなんですけれども。』

『ぢやあ、また、何故ネエ？。』

『何だか妾にも理由は分りませんが、妾にやあ判然と斷りが云へさうも無いんですもの！。心はほんとに可厭な人ですけれども、表面だけにしろお龍くつて可愛がつて呉れまして、斯様やつて衣類も着せて呉れますし、一個あるものも半分は取り分けて呉れるやうに始終爲れて居るんですから、いつそ悪口でも云はれて喧嘩でも仕たら妾の胸

の中なかを有あり體ていに云いひ出だす事ことも出で來きるか知しれませんけど、嘘うそでも優やさしい顔かほを仕して呉くれて居ゐるのに對むかつちやあ、其そん様な譯わけの有ある筈はずは毫ちつと末もも無ないんですが、何なんだか彼家あすこを出でやうつて云いふのが我儘わがまゝ過ぎる不人ふにん情じやうのことのやうに思おもはれてならないんですもの。』

『ホ、ホ、餘あんまりお前まへは性しやう分ぶんが美きれ麗いなものだから氣きが弱よわいねエ。ぢやあ思おもひきつて特わざと冒頭のつけから喧嘩けんくわを仕したら何様どうだえ。』

『あら！、姉ねえさんはまあ甚ひどい事ことねえ、喧嘩けんくわつていふものは自然ひとりでに出來でくるものなのに、わざと噴嘩けんくわをするなんて、そんな事ことがあるの？。』

『ホ、ホ、ホ、あ、有あるともサ。妾わたしなんぞは仕馴しなれて居ゐる位くらゐだよ。どうだえ、吃驚びっくりお仕しかえ、人ひとが惡わるいだらうネエ。』

『ホ、ホ、眞實ほんとかと思おもつて居ゐたら戲談じやうだんばかり。』

『イ、エ、戲談じやうだんちやあ無ないよ、一寸ちやつとい行いつておいでな。一人ひとりで心細こころほそいならお富とみを付つけてあげやうはネ。年としは行ゆかないけれども大だいのしつかり者ものだから、彼女あれにすつかり口上くつじやうを教おしへて遣やりましよう。お前まへが何なんにも云いはなくつても可いいやうに。』

『まさか妾わたしだつてお富とみさんに口上こうじやうを云いつて貰もらはなくつてもですが、眞實ほんとうに何様どうしても行いかなくつちやあ不可いけないのでしやうか?』

如何いかにも苦しくるげにお龍りうは再び尋たづぬれば、お形どうも憐あはれみて一寸考ちよつとかんがしが、

『お待ちよ。それほどお前まへが困こまるつて云いふのなら、ア、可いいよ、仕方しかたが無い、手紙てがみで云いふことにお爲し。さうしたら向むかふから足あしを運はこんで来るだらう、どうせ一度は膨ふくれつ面つらを持もつて來くるに定きまつて居ゐるのだから。』

と負まけて答こたへぬ。談話はなしは是これに終をはつてお龍りうは手紙てがみを認しためはじめしが、三行書さんぎやうかきては破やぶり、五行書ごぎやうかきては丸まるめ、幾度いくたびと無く書かき損そんじたる後のちやうやくと恐惶かしくまで纏まとめて、先づ初はじめに世話せわになりたる恩おんを謝しやし、次つぎには田舎氣質あななかたぎの叔母おばの片意地かたいちなる指揮さしずの負そむき難がたき由よしを云いひ、扱さて其後そのちに、我わが意こゝろよりの事ことならねども其方そちらを離はなれて此家こゝに留とどまりあるやうになりたる趣おもむきを記しるしたりけり。

如何いかばかり文ふみの言葉ことばは優やさしく書かかれたりとも、吾わが物ものと思おもひ込こみたる禽とりに他家よその檐端のきばで鳴なかれては堪忍がまんなり難がたく、お關せきは慾よくの算盤そろばんの置違おちがひとなりたるに手紙讀てがみよむ眼めの玉たまを頻々しきりとパチ／＼させ居をりしが、やがて

手紙てがみを揉もみ丸まるめて投礫つぶての如ごとく投げ捨すて、  
『彼女あいつも彼女あいつだが、お彫とうつて奴やつが忌々いまくしい。誰だれが指ゆびを啣くはへて引込ひっこむ？。  
人ひとを馬鹿ばかに仕あがる！。』  
と男をとこのやうな言葉遣ことばづかひして獨ひとり罵ののりつ、紫色むらさきいろになつて怒いかり瞋いかつたり。

其三十六

『え、ぢれつたいネ、煙草一つ入れるのに何を其様に愚圖愚圖して居るのだえ。百足に足袋でも穿かせや仕まいし、宜い加減に早速と仕てお呉れな。』

煙貪聲に罵りながら、腹立ち紛れの力を籠めてぎうと吾が帶を緊く締め、猶帶揚を締め、帶留を締むる時、小婢のお熊が馴れぬ手つきのたどくしく漸くにして煙草を詰めて差し出す煙草袋を引奪るやうに取つてばたくと拂き、

『仕やうが無いねえ、此様に外部に煙草をくつつけちやあ。まるで毛が生えたやうぢや無いかな。フツフツフツ。』

と吹けば、煙草の粉は空に飛び飛んで、うつかりと仰向いて、頻りに怒り立つ主人の面を訝り呆れながら視居たりしお熊が小さき金壺眼にむざんや舞ひ入ったり。

『アツ、ア、痛い！。あんまりなこと！。』

思はず叫びて眼を抑へ、泣きながらお熊の俯伏すを、愍み氣も無く見下して却つて冷笑ひ、

『下らなく汝がぼかんと仕て居るからだアネ。妾の知つた事ぢやア無い。痛いつても火が入つた程ぢやア有るまいから、其様なに泣く事は無いやネ。さあ下駄を出しておくれ。え、うぢうぢして居るネ、分らない！、跳足ぢやア出られ無いぢや無いか。一々此様な事までも、ソレ／＼と云はれなくつちやア分らないかえ、困つた人だネエ。チヨツ、いつまで半間な顔を仕て泣いて居るんだネ、鼠色の涙なんか零して。火傷へ唐辛子味噌をつけられた狸に其様な顔を仕て居るのが有つたつけ。』

と、自己が煩悶の八ツあたりに口ぎたなく叱り嘲れば、悪口を浴せらるゝには既慣れたるお熊も膨れ返つて、色黒き小き身體をプリ／＼とさせつ、いと狭き額越しに恨みの眼を遣りて、言葉無くプイと立上り、疊に躓けるやうに歩いて出口の方に至り、がたりびしりと物音荒

く下駄箱に當り散らしたり。

『ぢやあ一寸往つて来るから氣をつけて居なくちやあ不可よ。オヤ、狸さん、怒つて膨れておいでだネ。怒つてりやあ睡くならないから其も宜いだらう。留守番が性も無く坐睡を仕て、魂魄が鼻の穴から獅子の洞入り洞還りなんかを仕て居られるよりやあ、其の方が優らしいから。ハ、ハ、ぢやあ頼むよ御留守番、好い御土産を買つて來やうネエ。』  
纔に胸の中の鬱々を洩すか、益も無い惡口に目下を𦵏つてお關は出で去れば、主を送り出して後に残りしお熊は室の眞中に取り散らされたる主人の脱つからしをば片付くるとて、其の片手に衣紋竹を持ちたれども片手は更に使はで、足の先に幾度か衣類を蹴返し蹴返しつ、終に片手業に衣紋竹に引掛けて壁に掛けたりしが、たま／＼催したる噴嚏を遠慮も無く大きくして、

『ハツクシヨン。』

と特さらに我が顔を今掛けたる衣類の胴のあたりに持ち行きつ、去たゝかに汚き唾液の霧を注ぐが如く噴き掛けぬ。

土瓶どびんの底そこを抜き、桶けの箍たがをはじけさするなど、下司げすの復讐しかへしは都て陰かげでする習ならひなれば、それよりお熊くまの戸棚とだな捜し仕して、白砂糠しろざたうを舐なめ、奈良漬ならづけを荒あらし、自己おのが嗜すきなものは暴あばれ食くひして、蓋物ふたものの蓋ふたを除とつて自己おが好すかぬ鹽辛しよからなんぞに遇あへば唾液つばきを仕込しこんで搔かき廻まはし置くやうの事ことを仕居しゐるとも知しらず、お關せきは勢いきほひ込んでお彤とうが家いへを尋たづねたり。

便利べんりなる場處ばしょの聊いさか引退ひっこんで靜しづかなるところに、すべて金子かねのかかりたる造つくりの、見みるから知しらるゝ其その贅澤ぜいたくさの小憎こにくらしき家いへを、此家ここと尋たづね得えてお關せきの訪問おとへば、折をりから此このむづかしい世よを餘所よそにして、此所ここは日ひの短みじかい盛さかりをも長ながく暮くらすやうなる長閑のどかさを現あらはす賑にぎやかなる手物てものの撥音鮮ばちおとあそやかに、二人ふたりして彈はく絃いの音おとの冴さえて、然さも面白おもしろげに樓上にかいあるべく思おもはるゝ奥おくの方かたより洩もれ聞きこえ來きつ、婢等をんなどもも其方それに耳みみや奪とられ居ゐる、御免ごめんなさい、御免ごめんなさい、と云いへど應いらふるものも無なく、拭ふいて除とつたやうに奇麗きれいなる三和土たの履脫くつぬぎに良久や、ひさしく立たたされたり。



## 其三十七

なにし 何知らぬ耳にも面白きは面白く、連弾の三味線の音、急なる時には  
 あられぎんばん 玉霰銀盤を拍ち、緩き時には寒水せ、らぎに咽んで、一高一低、一挑  
 いっぱつ 一撥、前聲は後聲を呼び、後聲は前聲に應へて、斷えつ續きつする間  
 に、おのづと人の心を攝り去れば、彼は何といふ曲ぞとも知らぬお春  
 さへ聞惚れて、身はこゝに在りながら思を彼方の樓上に馳せて、ただ  
 うつとり 恍然と我を忘れたる折しも、怒るが如く罵るが如き案内乞ふ聲を聞き  
 つけて、吃驚して我に復り、周章で、立出で見れば、衣服こそ見苦し  
 くはあらね、五十近き女の、たださへ下品に肥りたる平顔を、目に見  
 ゆるほど膨らませきつたる不機嫌の氣色怖ろしく、嫌味らしく細く剃  
 りつけたるをかしき眉を挙げ、白睛の赤濁りせる汚き眼の小きに稜立  
 て、「此の小びつちよめが」と云はぬばかりに頭から見下し、その言  
 葉つきも憎らしく刺々しく、

『お龍に然様云つて下さい、本銀町から來ましたと。ハイ、然様云つて下さればそれで分るのですから。居不在なんぞは使はせませんよ。それあの上調子を付けて居る——彼は屹度お龍に定つてゐるんですからネ。』

と無遠慮にも程度のあるに、不在を使はれやうかとの先潜りまでして、撥音を聞いて其の人を猜することの出来るものやら出来ぬものやら知らねど、抜けさせぬつもりからの當推に、硝子箱の中のものを見ても仕たやうに確に其と指して云ひたまゝ、を云ひたり。

其の慳貪さ、其の無作法さ、其の尊大さ、その下作さに、優しきお春は驚き呆れつ、一寸の蟲にも五分の魂魄あれば、胸の中には可厭なく人と侮蔑みながら、

『お待ち下さいまし、然様申しますから。』

と冷やかに答へて徐々に身を起し、奥深なる樓上に至りたり。

見れば主人のお彤は常の如く沈着きたる面の色、逼らず急かず、ただ白く、下品の人を今見たる目には宛も女雛などを見る如く上品に見

え、お龍はまた思はず知らず興に乗り心はずませて我おもしろく彈くと思しく、汗ばむといふほどにはあらねど氣勢込みたる面色や、紅色として美しく見えしが、主人は我が方を見も返らねどお龍は活々としたる眼にちらりと此方を見しまゝ、ただ一心に弾きつづけたり。遠く聞きしにだに賑やかなりしを、近く聞けば又一層おもしろき絃の色音の、或は強く撥き或は軽く挑ひ或は弾く彼絃の餘韻未だ消えずして此絃の響新に起る音と音とは、一條の玉の鎖の環と環と相連り、一聯の花輪の花と花と相襲なりて、いづくに斷目も見えざるが如くなれば、言を出さん機會を知らずして、困りくつて躊躇しけるが、いつまでかくては濟まじとお龍の傍にや、近づきて、

『お龍さん、あの、本銀町からまりましたつて何だか可厭な人でございしますが、五十ばかりのお方が……。』  
と云へばお龍はそれと聞いて、弾く手は止めざれども眼はお彫の方を見て、許可をさへ得ば直にも立つて下に行かん素振をあらはしたり。お彫はこれを見てお龍には答へず、居るか居ぬか知れざるやうに先刻

より我が後の隅にかしこまりて控へ居しお富を一寸見れば、お富は早くも其の意を悟りて、お春の袂を引きに引きて樓下に去りぬ。

『何？、お富さん、無理に妾の袂を引ばつて。』

解し得ぬお春の訝り問ふをお富は冷笑つて、

『何ぢやあ有りませんは、下らないよ、お前さんは。あ、やつて遊んで

居らつしやる最中に下らない事なんぞ云つて行くのだもの。御邪魔に

なるぢやあ無いかネ、何でも自分の仕て居らつしやる事の腰を折られ

たりなんぞするのは大嫌ひの御方なんだからネ。もう今お龍さんが立

たうとなすつただけで餘程可厭に思て居らつしやるのだよ。何様し

て、そりやあく御届きなさる方だけに恐ろしい高慢の強い御氣象

なんだからネ。人が來たら待たして置いてお濟みになつた時申し上げ

さへすりやあそれで、宜いぢやあ無いかえ。こんどから氣を付けない

と、馬鹿だといつて御笑ひになるよ。』

と自己も一度は笑はれたる事のあるなるべし、姉ぶつて教へたり。

『然様、だつて何だかぶりく怒つて居る、やかましい事でも云ひさう

な権幕けんまくの人が來きたんですもの。』

と、負惜まけをしみ氣味きみに辯解いひわけを、試こころみるを、

『何なんだえ、やかましいことでも云いひさうな人ひとだつて。へエー。ナニ、何ど

様な人ひとだつて關かまふことがあるもんかね、下くだらない！。妾等わたくしたちあ御主人様ごしゅじんさま

の御氣おきに入るやうにさへ爲すりやあ宜いいぢやあ無ないか。ぢやあ妾わたくしが待まつ

て居ゐろつて、待またせて置おいて遣やりましやう。』

と此これは飽あくまで姊あねぶつて入口いりぐちの方かたに行ゆきたり、樓上ろうじょうの絃聲げんせいは盛さかんに續つづ

けり。

## 其三十八

『おなじ身分ながらも新參だけに我が下につけるお春に對ひては、神經質の本性を露して偶然したる氣の向き方のはずみにかゝり、意地でも惡き人のやうに、つけくと思ふまゝを自己が心の廻るに任せて、年齢の十歳も違ふほど大人ぶりで鋭くも言へ、根が粗豪からぬ氣象の心細かければ、客に對ひては打つて變つて、顔色も恭しく言葉も慇懃に、』

『さあ何様かまあ此方へ御上りなさいまして、』

と入口近き一ト室に通して、會ふとも會はぬとも其の挨拶は云はず、待てと特更には告げず黙つて待たせ置き、物の値でも定むやうに室の中をきよろ／＼眼に見回す客を其儘殘して身は蔭に退き、

『ほんたうにお春さん、何だか可厭な人ネエ。でも宜いは、お茶と火とだけ與つて置いて、黙つて引込んでさへ居りやあ、それで濟むのだもの。關ふことは有りやあ仕ません、柔軟にあしらつて、そして無言

でさへ居りやあ。妾あ彼方で御用があるか知れないから……』

と云ひさして既樓の方へ去れば、お春は言葉の如く唯謹みて火を運び茶を運び。

お富が樓へ上りたる時は曲は既終りに近く、やがて二人は弾き仕舞ひけるが、お彤は此の時はじめて莞爾としてお龍を見遣りつ、

『面白かつたこと！ 久しぶり二人で弾いたので、だが妾樂ぢやあ無かつたの、たまに弾いたんだから。』

と、何處に人が來て待つて居るかも知らぬやうに、悠然と云へ、

『あら嘘ばつかり、妾こそ姉さんと弾くと氣が詰まるやうな氣が仕て樂ぢやあ無いの！。姉さんは餘り奇麗に、そして餘りきつかり／＼に几帳面にお弾きなさるんですもの！。』

と、お龍も是非無く受答へは仕て居れど、此は來客の聊か早く、お彤は今しもお富が薦むる一碗の茶を然も心好げに飲み味はふにも似ず、此は茶碗を手に取り上ぐる事だに爲さざるなり。

『然様ネエ、どうも妾の弾き方は器械かなんかが動く様で、味が無くつ

ていけないよ。詰り習つて記えたつて云ふつ限りの技で、ほんたうは藝事の出来るつて云ふ人の性質ぢやあ無いのだネ。お前はまた大變に出来不出来がお有りのやうだけれど、今日のやうに機勢に乗つてお弾きのときは、ほんとに憎らしい位見事に御出来だよ。詰りお前のは、何様かした時にやあ、おぼえたつて云ふつ限りの技ぢやあ無いものが何處からか知らないが出て来るんだネエ。生れついて藝の味といふものを有つておいでなんだよ。』

『なあに、然様ぢやあ無いんですけれどもネ、一人でなんか弾くと、妾あつまーらないと思つて弾く時が多いんですがネ、姉さんと弾いたりなんぞすると、何様かすると不思議に自分でも面白くなつて來ることがあるんですの、そして然様いふ時は屹度自分の思ふやうに自然に弾けるんですよ。やつぱり一生懸命になるからなんですしやうかネエ?』  
 『ホ、、、一生懸命になりやあ巧く弾けるけれども、然様でない時あ弾けないつて云ふんぢやあ、ぢやあお前は横着者見たやうだ事ネエ。』  
 『ホ、、、屹度然様なんかも知れませんか。でも妾あ故と然様や



るのぢやあ無くつて、自然ひとりでに生れうまついて居る横着者わうちやくものなんでしょうから……』

『悪い横着者わるわうちやくものぢやあ有るまいとお云ひの?。』

『ホ、ホ、ホ、』

『ホ、ホ、ホ、マア蟲むしが宜いネエ。』

『ホ、ホ、、美いい横着者わうちやくものでも悪い横着者わるわうちやくものでも其そりやあ關かまひませんが、樓し

下したの彼あの人ひとが待つて居ゐましやうから……』

斯かく云いひて立たたんとするお龍りうを抑止とどめて

『宜いいよ、お前はまへまあ此室こにおいで。妾わたしが會あつて談はなしを仕して仕舞しまふから。』  
とお彫とうはやをら身みを起おこしたり。

其三十九

こゝに居よと云はれては逆らふべくもあらねば、お龍は残り止まりて  
三味線の絃を戻し緩めなど仕ながらも、我が上に就きて來れる彼のお  
關が事の氣になりてならねば、そこら取片付くるお富をば一寸視て、

『お春さんの云つたやうに、ほんとに怒つて居て?。』

と問へば、お富はさもく其の人を厭ひ嫌ふといふやうに、さらでも  
淋しき顔を妙に皺めて、

『ほんとに恐ろしくぶりくして居ますの!。まるで御酒にでも酔つた  
人のやうな顔を仕まして、』

と先づ答へつ、

『何だか自分勝手の無理屈でも云ひさうな可厭な人ですことネエ。』  
と添へたり。

『マア可厭なことネエ!。そんなやうに見えるほど恐ろしい怒つた顔を

仕て居て?。』

『然様なんですよ、怒り切つて居るといふ顔つきなんです。それに一體が地腫の仕たやうな顔なんでしやうかネエ、随分おそろしく膨れかへ

つて、宛然……』

『宛然何なの?。自分でばかり承知して笑つて。』

『マア止して置きましやう他人様の悪口なんか。』

『ホ、をかしな人ネエ、一人で合點して一人で可笑がつたりなんかして。』

『ホ、でも悪うございますもの。』

宛然河豚が五合も引掛けたやうと云はんと仕たりし歟、風船玉に眼鼻を付けたやうと云はんと仕たりし歟、終に口を啓かねば知るものは當人の胸のみ。

『マア勘忍して置いて頂戴よ。』

と軽く謝びて根問さるゝを遮り止めつ樓下に去りたり。  
人去つて小樓靜に、剗拔の桐の手爐の小なるを擁して、雪と白き蠣灰

に織ほそき火箸ひばしもて譯わけも無く假名文字かなもじを書かきては消けし書かきては消けしつ、お  
 龍りゅうはじつと心こゝろ一筋ひとすじに彼方かなたの談話はなしの何なんとなり行ゆくかを想おもひやりつ、  
 『彼の勝手あかつての強つよい慾よくの深ふかいお師匠ししやうさんがまあ何様どんな事ことをお云いひのだら  
 う。そりやあもう智慧ちゑも分別ふんべつも確固かくことしておいで、而さうして言語もといひだつ  
 て拙まつい事ことなんぞはお云いひで無い姉さんねえの事ことだから、何なにを對手むかひで云いつた  
 譯わけも無く捌さばいてお仕舞しまひなさるには違ちがひ無なからうが、對手あひてが無茶むちや  
 な人ひとなだけに御困おこまりなさりは仕しまいか知らん。自分じぶんの勝手かつてづくに掛かけ  
 ちやあ理合りあひや情合じやうあひに構かまつて居ゐる様やうな其様そのんな上品じやうひんな人ひとぢやあ無なさ、う  
 な彼あの人ひとを對手あひてにして、くだらない惡口あくぐちや無理むりな難題なんだいでも云いはれて困こま  
 つておいでゝは有あるまいか知ら。對手むかひが無茶むちやな人ひとでさへ無なければ宜よい  
 のだけれども、男をとこにでも何なんでも負まけては居ゐない様やうな氣きの強つよい人ひとではあ  
 るし、また大變たいへんに怒おこり立たつて來たきのだとはいふし、一體いったいが勝手かつてのひど  
 い甚ひどい人ひとだから、いくら姉様ねえさんが冷惻れいさくでも扱あつかひ難にくいかと思おもはれるが、ま  
 あどんな事ことを云いつて來たきもので有あらう。若もし下くだらない事ことを云いつて哦鳴がな  
 り立たてでもされた日ひには、ほんとに姉さんねえにお氣きの毒どくで、妾わたしはまあ何ど

様したら宜からう。何様か彼の人が姉さんの理解に折れ呉れ、ば宜いが、いくら姉さんでも對手が悪いから、何だか覺束無いやうな氣が仕てならない。あ、氣の揉める。一體まあ今日の談は何様結局がついて、そして妾はまあこれから前途何様なつて行く身なのだらう。』  
と取り止まらず物を案じて耳は彼方にのみ走れど、距離隔てたれば音も聞えず、人もあらぬが如く此家靜なり。  
や、久くして階段を上り來る人の跽音し、やがてお春は襖を開きて面を出せば、

『妾に來いつて、』

とお龍は此方より問ひかけたり。

『ハイ、左様仰あいましたので。』

今さら胸のだくつくやうおぼえて、話の模様を測りかねつ、お龍は却つて頓には起たざりけり。

## 其四十

我が眼めの力ちからの及およばぬ闇やみの夜よに歩あしの進すすまぬやうに、お龍りゅうは鬼胎おそれを懷いだきながら室へやに入りて見みれば、朝日あさひの光ひかりのあるところ自然おのづこと心強こころづよきやうの感おもひの仕して、先まづお形かたちが平常つねにも増まして位くらゐを取とつて沈着おちつき切きつたる面おもての上うへに、掛かれる雲くもの影かげだに無なき様さまなるに氣きも勇いさみ立たち、其その横手よこての方に、や、下さがりて坐すわりつ、いろ／＼の思おもひに小波さざなみの文あや立つ胸むねを鎮しづめて、言葉ことばは無なけれど叮嚀ていねいに挨拶あいさつしたり。

ちらりと見みしお關せきが顔色かほいろの、お春はるお富とみが言葉ことばとは違ちがひて、思おもひのほか平穩おたやなるやうなるに、心こころひそかに疑うたがひながら徐しづかに頭かしらを擡あぐれば、これはまた如何いかなることぞやお關せきは滿面まんめんに春はるを湛たへて、さも／＼親したしげに又また懷なつかしげに、

『マア立派りつぱにおなりなこと！、吃驚びっくりして仕舞しまつたよ。少し粹すこだけれども全然まる如此これぢやあ立派りつぱな御邸おやしきのお嬢様ぢやうさまだよ。好いいことネエ、お龍りゅうちゃん

は大變たいへんな幸福しあわせを御仕おしねエ。ほんとにマアく見違みちがへて仕舞しまふよ。平常ふだん  
 でさへ斯様かうぢやあ外そとへでもお出での時はマア何様どんなに、見事みごとにお仕しだら  
 う！。ほんとにお前まへさんはマア大變たいへんな幸福しあわせな身みにおなりネエ。妾わたしの處ところ  
 なんぞに御在おいででござらん、何程いくら妾わたしがやきもき思おもつて好遇よくしてあげたから  
 つて、精々せいじん外出衣よそいきが銘仙めいせんか節絲位ふしいとぐらゐの物もので、それより上うへあ妾わたしが千圓せんえんの  
 籤くじにでも中あたつたら知しらないこと、まあくお前まへさんに御召縮緬おめしやうがづなん  
 か引張ひっぱらせてあげることあ出來できつこは有りやあ仕しないのに、お正月しやうがつ  
 でも無なけりやあお節句せつくでも無ない日に、然様さういふ衣服なりを仕してお在いでのやう  
 におなりたあ、眞實ほんじつにマアお前まへさんは大變たいへんな幸福しあわせネエ。それもこれも  
 悉皆みん此方様こちらさまのお庇蔭かげで、私等わたしらの働はたらきやお前まへさんの力ちからなんぞからぢやあ、  
 皺鉾しやつちよこだち立しを仕したつて出來できるこつちやあ有ありませんよ。だから眞實ほんじつに仇  
 や疎略おろそかに思おもつちやあ濟すみませんよ、何でも此方様こちらさまの仰おつしあり次第しだいに身みを  
 粉こにしても働はたらか無なくつちやあ濟すみませんよ。若もしお前まへさんの仕方しかたにそ  
 で無ないことでも有あらうもんなら、此方様こちらさまぢやあ容赦うつちやあつてお置おきなすつ  
 ても私わたしが承知しょうちしや仕し無ない心算つもりで居ゐるからネ。

屹度妾きつとわたしがで出て來てお前まへさんを折檻せつかんすると御思おもひよ。ハ、ホ、ハ、ハ、  
 オヤマア此これあ下くだらないことを云いつたものだネエ、お龍りうちゃんが如在じやうざいで  
 も有ある人のやうに！。ハ、ハ、だが、ただ此これあ其程それほどまでに私わたしあ此方こちら様  
 をお前まへさんに取とつちや有ありがたいと思おもつてるといふ心持こころもちを打撒ぶちまけた  
 ばかりなんさ。ほんとに戲談じやうだんちや有ありませんよ、身みに染しみて有あり難がた  
 いと思おもはなくつちやあ罰ばちが當あたりますよ。妾わたしもネエ、お前まへさんから縁えんを  
 牽ひいたお蔭かげでもつてネエ、此方こちら様のやうな結構けつこうな方かたにもお目めにかかつ  
 たり、それから又種々またいろいろ優やさしく仰おつしあつて戴いたゞいたりなんかして、此様こんなな嬉うれ  
 しいことは有ありませんのですよ。何様どうかネエお前まへさんからも能よくく御禮おれい  
 を申まをしてネ、そしてネ、今後これからも時々ときどきは御邪魔おじやまでも御出入おでいりをさせて戴いたゞ  
 やうにネ、何様どうかお前まへさんからも能よくく願ねがつて下さいよ。そして妾わたしあ又  
 お前まへさんに一つ御願おねがひがあるのだがネ。ナア二面倒めんだうな事ことでも何なんでも無ない  
 んで、ただ今度こんど他よそへ出る時とき一寸ちん回り道まじを仕してネ、汚きたなくつても妾わたしの宅うちへ  
 寄よつて御茶おちやの一つも飲のんで行いつて貰もらひたいのさ。ただもう、お前まへさん  
 が如是こんなに立派りつぱにおなりだといふことを誰だれか知しらに見みせて、私わたしが腹はら一杯いっぱい



に天狗を云つて威張たいんだから。ア、それから又、此様な何不足  
ない結構なところへ御いでの中から、何も彼も要ることは御有りぢや  
無からうがネエ、私のところにお前さんのこざくした物や何かがそ  
つくり仕て居る、彼品は悉皆明日にでも持たして遣しますからね。』  
と、追従やら諛辭やらを混滞に、叮嚀と粗略との虎斑の言葉遣ひに、  
何か知らず無上に機嫌よく饒舌り立てられ、お龍はただただ煙に巻か  
れて、すべてが我が思のほかなりしに返辭にさへ迷ひつゝ、如何に  
應對ひて如是は虎のやうなるべきお關をば、甘へて戯る、猫のやうに  
は仕たりしかと、不審さに堪へぬ眼を張つてお形を見たり。

## 其四十一

尾もあらば振つて見すべき程悦びかへつて、お關はおのが賤しき詞の  
 端々に下卑たる心の限々を残りなく露すをも顧みず、知ら知らしきま  
 でお彫お龍に諛辭の數々を云ひ盡したる後、あまり長居して愛想をつ  
 かされてはと思ひてか、但しはお彫が餘り多くも言はず餘り多くも笑  
 はで、いつまでも面正しくなし居るに、流石の勝手者も氣の置けてか、  
 呉々も此後とも疎み棄てられぬやうにと頼み聞えて、お富お春にまで  
 無理捏ねに捏ねつけたるやうの愛想の有る限りを振り撒き、來りし時  
 の荒々しかりしには引かへ、歸る時には疊もそつと踏むやうにして  
 漸くに出去れば、其背影の見えずなるや否や、送つて出でたるお春は  
 堪へかねて、フ、ワ、と笑ひ出し、  
 『マア、何ていふ現金な得手勝手な人でしやう！。來た時にやあ  
 まるでやまひいぬみ宛然狂犬見た様に、手でも出したら噬ひつきさうな怖しい顔を仕て來

て、歸る時にやあ小狗かなんかの様にころくして悦で行くんですもの！。お、可厭なをかしなお婆さんだこと！。』

と、引返しながらお富と顔を見合せて云ふを、これも何處やらに笑を含みながらも叱るが如く上眼つかひして制し止めつ、お富は小聲に、『でも彼様いふのが正直つて云ふんで、可愛い性分なんですかも知れませんよ。罪も何も無くつてネエ。』

と冷やかに罵る。お春は此語を聞いて猶笑ひ止まず、

『左様ネエ、毫も奥底が無いんですからネエ。だが、左様いへばお富さんなんぞは大變に可愛らしくない人なの？。何でも遠慮深くつて、慎みが深いのですもの！。』

と小聲に語り合ふ此方は此方、彼方は彼方にて、お龍は先づ訝り糺し、

『姊さん、彼の人を何様なすつたの？。』

と問へば、お形は微笑含み、

『何故？。別に何様も仕やうは有りやあ仕無いぢや無いか。』

と澄まし切つて云ふ。

『でも大變に怒つて來たといふのに、妾が下りて來て見りやあ、毫もそんな様子は無くつて、怒るどころぢやあ無く、莞爾してばかり居るぢやあ有りませんか。』

『そりやあ何お前、何も不思議は有りやあ仕ないはネ。些少ばかり金錢を與つたので如是悦んで仕舞つたのさ。』

『金錢を?。』

『あゝ。』

『あら!。何も姉さんがそんなものお與んなさる理由は無いぢやあ有りませんか。さうして姉さんも彼の静岡のに、お金は惜かないけれども取られるのは業腹だから、と御自分でちやんと然様仰あつたぢやあ有りませんか?。』

『そりやあお前の叔母さんには然様云つたけれどもネ、彼りやあ云はば叔母さんの氣の濟むやうに云つただけの事でネ、何も妾あ彼様な慾張りの人と爭り合はうといふ氣は最初から無かつたのだよ。』

『でも理由も無い金錢を。』

『取られたつて口惜しかあ無いぢやあ無いか、物事さへすらりツとそれで濟んで仕舞へば！。妾あ彼様な人を對手に仕て爭り合ふなあ何程得がいつでも可厭だよ。』

『そりや然様でしやうけれども、餘りそれぢやあ……』

『だつて仕方が有りやあ仕ないやネ、蚊を拍けばお前掌が汚れやうぢやあ無いか、蚤を潰しやあ矢張爪が汚れるはネ。下らない人を相手に仕て居りやあ、始終下らないことを仕て居なけりやあならないやうな譯になるもの！。』

## 其四十二

氣位高しと云はば氣位高しと云ふべし、憎しと云はば憎しと云ふべし、お彤は眉をだに動かさで澄ましかへつて斯く云ひて、然も然も我が言に無理はあらじ、然は思はずやと云はぬばかりにお龍を徐に見けるが、お龍はや、頭を垂れて獨り物を思ひ居つ、自己はおのれだけに何事をか考へ居れり。

『お龍ちゃん、何を其様にお前は考へ込んで居るの?。』  
不快氣といふまでにはあらねど、言葉の優しきには似ず聊か悦ばぬ色してお彤は尋ねたり。

『何つて、何も考へてやしませんけど、ただ餘り何様も……』

『餘り何様も……世話になり過ぎるとでも思つておいでの?。』

『唯。だつて何様も何だ彼だつて餘り御厄介ばかり掛けるんですもの!。』

『ぢやあ其（それ）が可厭（いや）だとても御思（おも）ひなの？。』

『あら飛（と）んでもない、然様（さう）ぢや有りませんけども、餘（あ）り重（かさ）ね重（かさ）ねですから、何（なん）だか姊（ねえ）さんに濟（す）まないやうな氣（き）が仕（し）て仕方（しかた）が無（な）いもんですから、それで茫然（ぼんやり）と考（かんが）へて居（ゐ）たんですよ。』

『宜（い）いぢやあ無（な）いかえ、そんな事（こと）を考（かんが）へ無（な）くつたつて。妾（わたし）が好（す）きで爲（す）る事（こと）だから放擲（うつちや）つて任（まか）してお置（お）きでも！。何（なに）もお前（まへ）に頼（たの）まれたから爲（す）るつて云（い）ふんぢやあ無（な）いだから、妾（わたし）の道樂（だうらく）で勝手（かつて）な事（こと）を仕（し）て居（ゐ）るんだと思（おも）つておいでな。』

『でも何（なん）だか餘（あ）りなんですもの。彼様（あ）な人（ひと）にまで妾（わたし）の故（せい）でもつて……』

『宜（い）いよ、そんな詰（つま）らないことを。氣（き）にお仕（し）で無（な）いといふのに。ホ、お前（まへ）は近頃（このごろ）は氣（き）が小（ち）きくおなりだネエ。構（かま）はないぢやに無（な）いか。そんな事（こと）ばかり云（い）つて御（お）いで（い）のやうぢやあ、お前（まへ）にやあまだ妾（わたし）の氣性（きしやう）も心持（こころもち）も能（よ）くは解（わか）らないのだネエ、いやな人（ひと）だことネ！。』

『いゝえ、姊（ねえ）さんの心持（こころもち）だつて氣性（きしやう）だつて其（それ）あ知（し）つてますは。いくら妾（わたし）が伶俐（りかう）ぢや無（な）くつても其（それ）あちやんと知（し）つて居（ゐ）ますよ。』

『然様、それぢやあ宜いぢやあ無いか、そんな事を氣に仕なくつても。妾あお龍ちやんの先から知つてゐる通りにネ、何にもこれといふ慾も願も有りやあ仕無いけれども、ただ毎日々々を心持宜く、不快なことや馬鹿な事や汚穢い事にたづさはらないで、それで消光つて行きさへすりやあ、好いと思つてゐるのだから。』

『そりやあもう姊さんばかりぢやあ有りませんは、妾だつて、誰だつて。』

『それ御覽な。そんなら彼様な人にかゝりあつて争りあつてなんぞ居るより、些細ばかりの阿賭物で奇麗事に埒を明けた方が、何程理屈が好いか知れや仕無いやネ。下らない人を相手にする位下らないことは有りやあ仕無いもの！』

『そりやあもう然様には定つてますけれども、其の些少ばかりの物だつてただ湧いて來やあ仕ませんから。』

『ホ、ゝ、そんな下らない見つとも無いことを二度と云つてお呉れぢやあ可厭だよ。可惜お龍ちやんの器量が下つて仕舞ふよ。今が今の心持



さへ好<sup>よ</sup>けりやあ其<sup>それ</sup>で可<sup>い</sup>んだもの、何も<sup>なんに</sup>惜<sup>をし</sup>いものは無<sup>な</sup>からうぢやあ無<sup>な</sup>  
いか。妾<sup>わたし</sup>あ妾<sup>わたし</sup>の身<sup>からだ</sup>體<sup>だ</sup>だつて惜<sup>をし</sup>んで居<sup>ゐ</sup>や仕<sup>し</sup>無<sup>な</sup>い身<sup>み</sup>ぢやあ無<sup>な</sup>いか。何<sup>なん</sup>でも  
可<sup>い</sup>いから、妾<sup>わたし</sup>あ妾<sup>わたし</sup>の周<sup>まは</sup>圍<sup>り</sup>にお前<sup>まへ</sup>のやうな妾<sup>わたし</sup>の好<sup>す</sup>きな人<sup>ひと</sup>達<sup>たち</sup>を置<sup>お</sup>いて妾<sup>わたし</sup>  
の好<sup>す</sup>きなところ<sup>ところ</sup>に居<sup>ゐ</sup>て妾<sup>わたし</sup>の好<sup>す</sup>きなことを仕<sup>し</sup>て遊<sup>あそ</sup>んで居<sup>ゐ</sup>りやあ其<sup>それ</sup>で可<sup>い</sup>の  
だよ。』

其四十三

『そりやあもう姉さんは何をなさらうと隨意におなんなさる事ですから、姉さんの氣性一ぱいに生活して行かうと御思なさる、そりやあそれで宜いんですが、妾あまた妾で、働きも意氣地もないもんですから……』

『それで?』

『……………』

『あ、解つたよ!。恩を受けるなあ可いやうなもんだけれど、返しやうの目的が無いから困ると御おもひなだらう。』

『困るといふんでもありませんけど、まあ然様なの。何も姉さんが人に恩返しを仕てもらはうなんて云つたやうな其様な氣を有つておいでぢやあ無いのは知りきつてますが、何様したら妾が嬉しいと身に染みて思つて居る此の心持を、何かに爲て姉さんに見ていただくことが出

来るだらうと思つて、それが氣になつてならないのです。妾あ如是な  
ぶらんさんの身ぢや有りますし、何一つ遂げて出来る技が有るんぢ  
や有りませんし、これから前途何年だけ經ちやあ何様な身だつて云  
ふんでも無いのですから、心にやあ斷えずに思つて居ても、何時にな  
つたらまあ些少ばかりでも御禮らしいことが出来ることだらう！、と  
思ふと何だか妙に味氣なくなつて、妾の行末が情無い果敢無い……薄  
暗い路を薄寒い日に辿るやうな、何とも云へない心細いやうな氣が仕  
て、とても自分の氣の濟むだけの事を仕て姉さんに見ていただく事な  
んかは、一生たつても出来無いやうな可厭な感じがするんです。斯様  
いしたら御笑ひなさるでしやうが嘘ぢやあ無いのです、今になつて叔母  
が云ひました言葉が妙に胸に浮んで來て、いつそ前途も見えも仕ない  
のにうか／＼と日を過すより鋤や鍬を擔ぐ男でも實直な堅い人を、自  
分の一生の柱に頼んで眞黒になつて働いて、さうして適には姉さんの  
ところへ大根や竹の子を持つて來て、これは妾が作りました、これは  
わたしの背戸の藪で掘りましたつて云ふやうなことを云つて、ほんと

にお龍りゅうがまあ田舎者あなかもになりきつて御仕舞おしまひで、何と好いお土産みやげをお呉れ  
ぢやあ無いなか、とお富さんとみやなんぞと御笑おわらひ合あひなすつて頂くいたゞ様な其  
様な身みになつて仕舞しまつたら、其の方ほうが宜いいか知しらと思おもふ氣きさへ仕します  
が、まさかに然様さうも思おもひ切きれないで……』

眞面目まじめに云いふ言葉ことばは、笑聲わらひに打消うちけされたり。

『ホ、ホ、ホ、可笑おかしなお龍りゅうちゃんだよ、ホ、ホ、ホ、何だネエ急きふに  
年としをお取りだネ。詰つまらない！。濕しめつばい、そんなことを言いふものぢ  
やあ無いなよ。大根だいこや竹たけの子こなんかあ妾わらしあ可厭いやだよ、女をんなは所天次第をそこしだいぢや  
あ無いなか、立派りつぱな所天をそこを御持おもちで、そして妾わらしにやあ金剛石だいやんどの首飾くびかざりで  
もなんでも澤山たくさんお呉くれ！。買物かいものは勝手かつてだあネ、男子をとこは撰えらみ取りにする  
が宜いいぢやあ無いなか、腕うでのある確固しつかりした男をとこさへ持ちやあ、何も彼も湧わ  
いて來こやうぢやあ無いなかえ。そりやあお前の胸中むねなかに働はたらきのある好漢い、をそこが  
無いなもんだから、そんな陰氣臭いんきくさいことを云いふやうになるんだよ。いく  
ら好い人ひとでも手腕はたらきの無いなあ、所天をそこに仕やうとすりやあ淋さびしくつてい  
けないよ。彼の人あひとなんぞはまあ抛擲うつちやつて置いて、搜さがしてごらん、何程いくら

も好<sup>い</sup>男<sup>をとこ</sup>はあるよ。お前<sup>まへ</sup>に一人<sup>ひとり</sup>見<sup>み</sup>せてあげやうかネエ。其<sup>それ</sup>男<sup>おとこ</sup>なら屹<sup>きつと</sup>度<sup>ど</sup>お前<sup>まへ</sup>の行<sup>ゆく</sup>末<sup>すえ</sup>を春<sup>はる</sup>の日<sup>ひ</sup>に好<sup>い</sup>海<sup>うみ</sup>邊<sup>のはた</sup>でも歩<sup>ある</sup>かせるやうに爲<sup>す</sup>るに定<sup>きま</sup>つて居<sup>ゐ</sup>るよ。其<sup>それ</sup>に引<sup>ひ</sup>代<sup>きか</sup>へて水<sup>みづ</sup>野<sup>の</sup>つていふ人<sup>ひと</sup>ネ、彼<sup>あ</sup>の人<sup>ひと</sup>ネ、彼<sup>あ</sup>の人<sup>ひと</sup>と連<sup>つ</sup>れ立<sup>た</sup>ちやあ、お前<sup>まへ</sup>は成<sup>なる</sup>程<sup>ほど</sup>薄<sup>うす</sup>暗<sup>くら</sup>い路<sup>みち</sup>を薄<sup>うす</sup>寒<sup>さむ</sup>い日<sup>ひ</sup>に辿<sup>たど</sup>るよ。』

## 其四十四

『いやですは姉さん、また其様な事を云つて！。妾あ何も彼の人を何様の彼様のと其様な事なんか胸の中で思つてや仕ません云つたぢやあ有りませんか。』

『あ、然様だつけネエ。』

と云ひたる限り後は何とも云はで止みたれども、お形はお龍の言葉をば信ずるが如く疑ふが如く其の面を見やりて、心解けてにもあらず、さればと云ひて嘲みてにもあらず、ただにやりと笑つたり。

氣の直なるお龍はお形の言葉を言葉通りに聞けるなるべし。

『そして其様な戯談なんか御云ひなすつたつて、其りやあ姉さんみたやうに何も彼も能く出来て、おまけに世の中のほんとの事が悉皆解つて居て、容貌も百人千人に勝れて美しいといふんなら、妾でも出来るか知れませんか。』

男子擇み取りだなんて、マア其様なことは、生

れ代つてでも來なけりやあ到底出來やしません。妾なんか圃の中の  
 蠻南瓜や茄子だつて、ほんとに叔母の云つた通りの下らない稟賦なん  
 ですもの。出世しやうと思つたつて、運に乗らうと思つたつて、何が  
 何様なりましやう。加之もうく所天を持たうなんて、そんなことは  
 ふつく厭に思つて居るんですから。持つ位なら虚言ぢやあ有りませ  
 ん、蠻南瓜や茄子に相應な何首烏球に手足の生えた様なお百姓さんで  
 も持ちましやうが、それも矢張可厭ですから、一生一人で居ます。氣  
 の利いた男を持ちたいの、出世を仕て見度いのと、其様な蟲の好いこ  
 とを考へて居るほどに身の程を知らなから有りません。ですから前途  
 の事を思ふと、心細くなつて仕舞ふんです。』  
 と云へば、

『オホ、何様か仕ておいでだよお龍ちゃんは。そんな老けた事ばかり  
 し云つて何様するつもりなんだらう。蟲の好いことを考へてるからこ  
 そ人間は生きて居られるんぢやあ無いかえ。お前見たやうに其様なこ  
 とを云つてた日にやあ終局にやあ坊さんにでもならなきやあ追付かな

いことになるはネ。いけないよいけないよ、そんな弱い氣ぢやあ。何も一生だはネ、面白く生活すが可いぢやあ無いか。擇み取りに仕て取れ無くつたつて本なんだもの！。また擇み、また擇み仕て居りやあ其の中にやあ氣に入つたので縁の有るのも出て來やうぢやあ無いか。』

『あら！。』

『ホゝゝ、何様だえ？、妾にやあ愛想が盡きるかえ？。』



其四十五

『ようござんすよ、お富さん、自分で展りますから。』

読みさしたる何やらの書物を燈の下に置いて、身を反りてお龍はお富を見かへりつ、愛想も深く制止むれど、

『でも御命令なんですもの、妾が仕ませんぢやあ……。マア其のまんまに御本を見て居らつしやいまし。』

と此室の次室の長四疊に附ける押入より、お納戸絹の中型の夜眼にはうつくしき小搔卷など輕げに取り出して、お富は今早速と手ばしこくお龍の爲に臥床を設くるなり。

『あら、ほんとに不要つて云ふのにお富さん！。お客さまぢやあ有りやあ仕まいし、此様な妾なんかが床の上下までお前さんたちに仕て貰つちやあ、それこそ罰が當つて冥利が竭きつちまふは。』  
立上つて自ら上掛の衣被を搬び來れるお龍と共に、終に二人して展べ

終りたり。

『風も吹いてや仕ないやうですがお寒い晩ですことネ。これで宜うございますか、御薄くは有りませんか知ら?。』

『いゝえ澤山ですよ。主人は?。もうお就眠?。』

『ハア、あなたにもお就眠つてお云ひつて。今しがた既。』

『然様。お春さんは?。』

『まだ裁縫を仕てゐます。』

『なかゝの人ネエー。』

『左様でございますとも、負けない氣の人ですよ。何でも妾にやあ負けたくないと思ひましてネ。』

『ホゝゝ、だが、あけすけで可愛らしい兒ネエ。』

『さうですよ、些も毒は無い人で。ですから今日のお客さまの最初の様子にやあ何様なにか怒りましたらう!。オホゝ、そりやあ可笑いほどでしたよ。』

『然様!。そんなに最初は彼方で怒り立つてつんゝ仕て遣つて來

たの？。

『さうですとも。そりやあ甚い権幕でしたの！』

『それを何様して姉さんが直に彼様にへい／＼するやうに仕てお仕舞だつたの？。』

『そりやあ何ですもの！。』

『何様したの？。お前さん悉皆知つてゝ？。』

『すつかり知つてます、斯様なんですよ。』

お富は諄々として始末を説き、お龍は黙々として一切を聞き終りたり。

## 其四十六

有りつる事のいろ／＼を語りて後、要も無き業したりと聊か悔みてか、御就眠なさいましを最終の言葉にして、年齢に似合はずくすみて老けたるお富は靜に此室を去りぬ。

階子を下りし音の彼方に消えてよりは、室毎々々の襖の隔てたればにや、但しはお春も共に皆眠りに就きたればにや、微妙なる音響だに聞えず、風無き冬の夜の、戸外は定めし星斗燦然と霜の降る最中なるべし、天地死せるが如く靜にて、ただ流石大都の市中なれば、此家よりはや、離れたれど、凍てたる路に車の走る轟きの、遠くより來りては復遠方に去るが斷えざるのみ、犬さへ鳴かず、穩やかに今宵は更けたるなり。

其故は主人ならでは知るものなけれど、樓上の此處には特と電燈を忌みてか其の設備あらずして、や、高き置洋燈のいと美しきを用ひたり。

電燈でんとうはこれを細ほそむることも油燈あぶらひの如ごとく自在じざいにはあらで、點ともせば明あかる過す  
 ぎ、點ともさざれば全まったく暗くらく、如ごとくものも無なき春はるの朧夜おぼろよの朧氣おぼろけなる光ひかりを、  
 時々とき／＼の心任こころまかせに加減かげんして趣致おもむきを取るやうなることの叶かなはねば、如何いかな  
 る折をりにか面白おもしろからぬことの有あるがためなるべし。お龍りゅうはやがて衣いを更か  
 へ、枕頭まくらもとの其燈そのひを熄きえんとするまで細ほそめて眠ねむりに就つきたり。  
 燈火ともしびの光ひかりは朦朧ぼんやりと一室いつしつを籠こめて、床間とこには軸ちくを掛かけずこれに此なのみを眺ながめ  
 と挿さしたる妙蓮寺山茶めうれんじつばきの、半咲なかばさきたるが一輪いちりん、咲かざるが一いっ點てん、浮うき  
 出いづるが如ごとく白しろく見みえたる他ほかには何なんの心こころを惹ひくものも無なし。お龍りゅうは此こ  
 の瀟灑せうしゃにして清きよなる室しつの中に、柔やはらかなる美うつくしき燈ひの光ひかりを浴あび、穩おだ  
 やかに沈ちん々と更ふくる夜よを寢ねて、優やさしく幸福さいはひ多おほかるべき夢ゆめに入いらんとし  
 たり。されど如何いかにしけん頓とみには夢ゆめに入りかねて、一度二度寢返ひとたびふたたびねがへりし  
 て、不圖眼ふとめを開ひらき見みれば、我が頭かしらの上に唯ただ一羽いちの白しろき鷺さぎの、羽はねを斂をさめ  
 頸くびを縮すくめて物思ものおもふが如ごとく、けろりと立ち居ゐたり。夢ゆめにもあらず幻影まぼろしに  
 もあらず物ものの精せいにもあらず、此これは是豫これかねてより此樓ここに掛かけられたる一面いちめん  
 の額がくの畫ゑなりしなり。

鷺<sup>さぎ</sup>は夕暮<sup>ゆふぐれ</sup>の小闇<sup>をぐら</sup>きに立<sup>た</sup>てるなり。燈火<sup>ともしび</sup>の光<sup>ひかり</sup>は弱々<sup>よわく</sup>として其<sup>そ</sup>の暗<sup>くら</sup>さに同<sup>おな</sup>  
じきなり。晝<sup>ひる</sup>には魂魄<sup>たましひ</sup>ありや鷺<sup>さぎ</sup>は今<sup>いま</sup>動き出<sup>い</sup>さんとす。

## 其四十七

我が眼の彼を見つむれば、彼の眼もまたありくと我を見詰めて、漸く此方に近づき來らんとする氣勢するに、お龍は思はず知らず慄然と仕たりしが、忽地にまた自ら笑つて、何の、燈火の工合にて浮出したるやうにこそ見ゆれ、不思議も更に無き普通の繪なるをやと思へば、驚はまた凝然として畫の中に靜に立てるのみ。

思へば此の畫は古くより姉さんの有てる畫にて、幾年の前なりしか明らかならねど、我が猶年ゆかで遠慮氣も無く明暮に遊びに來ては姉さんに甘へし十幾歳の頃、如何なる折にか此の額を見て、姉さん此の繪は淋しくて不厭な繪なことネエ、と云ひしに、其様な事を御云ひで無い、此りやお前の書いた繪ぢやあ無いか、と云はれて、調戲はれたりとは知らず、氣味の悪さに吃驚して顔の色を變へ、あ、悪い戯談を云つた、勘忍してお呉れ、ただ少し譯があつて妾が有つて居る此繪を

可厭だつてお云ひだつたのが甚く可厭に聞えたものだから、詰らない  
 ことを云つてお前を吃驚させた、妾が悪かつた、と謝罪られ、慰めら  
 れし記憶あり。其の時我が心直におちつきて、何、姊さんが好なのな  
 ら妾も好になるは、そして妾眞似をして書いてあげるは、と云ひて、  
 其の日筆を執つて見描しの覺束なくも、何様やら斯様やら似つこらし  
 きものを書きて與へて、大に褒められ悦ばれしことありたり。されど  
 其の理由といふことは聞きもせず、聞かんともせで、其儘に打過ぎ、  
 それより後幾度と無く此の繪を見、此の繪の下に寢たる事もありしが、  
 氣にもかけず、心にも止めず今日に至りしに、今宵はたま／＼夜の更  
 けて稀らしく靜寂に、燈火の光りの朦朧したる工合の繪に映り合へる  
 が上、我が心のさま／＼の事を思ひて異しく冴えたるあまり、ふと我  
 が眼につきて、我が思の此に牽かれしなるべし、此繪の昨日に今日は  
 何一つ異りたることもあらぬを、何時に無く鷺の動き出もするやうに  
 思ひ做すも愚なることなりと思ひ消しつ、お龍は眠らんとして強ひて  
 眼眶を合せたり。



寢苦しきといふにはあらねど猶夢に入りかねて、ふとまた眼を開けば、  
鷺は薄き闇に動きて今や此方に歩まんとするなり。

少し理由があつてわたしが有つて居る繪と慥に彼の時に姉さんの云ひ  
たる理由とは何の理由なるべきか、彼の時はうつかり聞流して其の仔  
細を尋ねもせず、又その後は此の繪につきて一ト言の談話を仕たるこ  
ともなければ、其の解らうやうは無けれど、今思へば此の繪につきて  
は何か深いわけの有しさうな心持のする！。姉さんは自分の過去話な  
ぞをなさつた事は些少も無ければ、眼に看たるほかには我は何一つ知  
らねど、往時は一體どういふ徑路を経た人？、此の繪にはまた何のや  
うな理由があるやら？、妾の身にしても種々の過去がある、姉さんの  
往時にも何も無い事は有るまい、他の事は兎も角も此の繪に就いてだ  
けでも！。あ、然し此の様な事をおもつても何の甲斐も無きことを、  
とお龍はいろ／＼に思へし末には心をなだらかにして、彼の鷺の繪を  
何氣もなく見たり。

## 其四十八

幾度と無く此繪も見たりしが、心の中に物のありし時は、ただ其に屈  
托して眼にも自然と着かず、また何事も無き時は氣にも止めず其儘に  
見て過したりし故にや、今まで幾年の間ただの一度も、古き疇昔の事  
などを思ひ出したる折も無かりしに、今宵は差當りて口惜しいといふ  
事も悲しいといふ事も又氣遣はしいといふこともあるにはあらず、ま  
して人には明かせぬ羞かしき思ひに胸の底を掻き撈りたきやうの心地  
するといふ事なんどの有るにもあらねど、さればとて又全く雲無き空  
のただ美しく青きやうに胸の中のさつぱりと乾淨なるにもあらず、取  
り詰めて此を思ふといふ事も無けれど、何も彼も忘れ果て、物覚えぬ  
夢路に入るといふほどにもなりかぬるより、偶然、眼の前の此の鷺の  
繪などの心に留まりて、昨日今日の事にもあらぬ古き記憶の新しいに  
現はれ來れるにや。お龍は猶忘れんとして其の鷺を忘れ得かねたり。

『それにしても書間の姉さんの言葉は、妾が心を引立て、下さらう  
とからの戯談交りの其言には相違無けれど、餘り強過ぎて強過ぎて  
一々妾の耳には可厭に聞えてならざりしが、若し彼言がまあ姉さん  
の眞實の意からのことなら、姉さんは矢張静岡の叔母さんも同じこと  
の人！。そりやあ智恵も有り餘るほど有り、同情も痒いところへ手の  
届く程有り、氣位も大層に違つて、何も彼も勝れてはお在なさるには  
相違無いけれども、種々のことが勝れて御在なさるだけに仰ある事  
も輪を掛けて、叔母はただ堅人を丈夫に有てといったところを、姉さ  
んは世を渡る伎倆のある毅然とした立派な漢子を擇つて配偶にしろと  
御云ひになつただけで、心は矢張差違は有りは仕無い。まさかに姉さ  
んの本心からとは思へぬけれども、全然意にも無いことを御云ひでは  
無かつた様子。一旦斯様いふ不幸な目を見て來た妾に、また男を有て  
と仰あつて、眞實に然様いふことを妾が唯々と云ひさうなやうに思つ  
ておいでゝも有らうか知らん。あれほど能く何も彼も御解りの姉さん  
で、あれほど妾を可愛がつて下さる彼の姉さんで、そして現今ぢやあ

此の廣い世界の中で妾に取つちやあ叔母よりも誰よりも一番馴染の深い彼の姉さんが、よもや妾を其様なことを爲さうなものとは思つて御在ぢやあ有るまいと思つては居るけれど……。成程二度三度丈夫を有つ人も稀らしくは無いから、叔母の云ふのも世間普通では有らうし、不思議は無からうけれども、そりやあ他の人の話で、妾は妾の性分。妾の性分を知りきつて御在のあの姉さんが、妾も矢張他の人と同じやうに、時が経ちさへすりやあ又新規に男を有つものと思つて御在ぢやあ有るまい。そんな氣になれるやうな薄情な妾ならば、人に棄てられたからと云つて、彼様は口惜がらない。姉さんは妾が何様な女だといふ事は知りきつてお在に違ひ無い。けれども過日からの御談といひ、今日の御言葉といひ、何だか妾には可厭に聞えてならぬ。若しや妾を矢張眞實に今後また男でも持ちさうなものに思つて御在のか知らん。まさか其様な事は有るまいが。いや／＼水野といふ人の事を幾度も御云ひで、然も妾が其の人を何様かでも思つて居るやうに御取りのやうに聞えた。あ、若し左様御取りのやうなら、其れあ働きのある男を有

てと御<sup>お</sup>勸<sup>す</sup>めなさるのも道理<sup>もつとも</sup>だけれども、何<sup>なに</sup>妾<sup>わたし</sup>が彼<sup>あ</sup>の人<sup>ひと</sup>を何<sup>どう</sup>様の斯<sup>かう</sup>様の  
と思<sup>おも</sup>つて居<sup>ゐ</sup>やう。妾<sup>わたし</sup>はただ彼<sup>あ</sup>の人<sup>ひと</sup>を氣<sup>き</sup>の毒<sup>どく</sup>なと思<sup>おも</sup>つて居<sup>ゐ</sup>るばかりで、  
妾<sup>わたし</sup>はただ彼<sup>あ</sup>の人<sup>ひと</sup>を嫌<sup>きら</sup>ひでは無<sup>な</sup>いけれども、何<sup>なん</sup>で妾<sup>わたし</sup>に乾<sup>きれ</sup>淨<sup>い</sup>で無<sup>な</sup>い底<sup>そこ</sup>心<sup>こころ</sup>が  
有<sup>あ</sup>らう！。そりやあ妾<sup>わたし</sup>は彼<sup>あ</sup>の人<sup>ひと</sup>を好<sup>す</sup>いては居<sup>ゐ</sup>るけれども、好<sup>す</sup>いて居<sup>ゐ</sup>る  
ばかりで何<sup>どう</sup>様の斯<sup>かう</sup>様のとは眞<sup>ほん</sup>實<sup>と</sup>に思<sup>おも</sup>つては居<sup>ゐ</sup>ない。眞<sup>ほん</sup>個<sup>と</sup>に妾<sup>わたし</sup>は乾<sup>きれ</sup>淨<sup>い</sup>で  
ない氣<sup>き</sup>なんぞは微<sup>み</sup>塵<sup>ちん</sup>も有<sup>も</sup>つては居<sup>ゐ</sup>ない。

## 其四十九

妾は自分からは其様な女では無いと思つても居れ、人には矢張り其様な女にも見えやう。成程其も仕方無い事ゆゑ、世間の人の誰彼が妾の心を知つて呉れない其を口惜しいとも情無いとも思ふでは無く、また叔母は彼の通りの木で造つたやうの人の事なれば、はじめから妾の心の分らぬも少しも無理とは思はず、解つて呉れなければとて情無いとも思はぬけれど、姊さんだけは妾が何様な女だといふことを知り抜いて居て下さるとばかり思つて居たに、矢張姊さんも妾を知つて下さないかと思ふと、もう此の廣い世の中に眞實の妾の心持を知つて呉れる人は一人も無いことかとつくづく情無くなる。もつとも憎い彼の男に欺されたそもくの始から終局までの間は、始終姊さんに遠ざかつて居て、何事も姊さんに隠して居た其は悪かつたなれど、後では羞かしい蹊蹟の何も彼も話して仕舞つてある故、猶のこと妾の氣心も御

わかりの筈なるに、水野さんの事について何様の斯様のつて二度も  
 三度も御云ひなすつたばかりか働きのある男を見せやうかの何のと、  
 戯談には違ひないけれども可厭な事を仰あつたのは、矢張妾の眞實  
 の心の持が御解りが無いからかと思はれる。年端のゆかない故で  
 つい欺されたにしろ何にしろ、女の廢つて仕舞つた斯様な身の上でも  
 つて、たとひ妾が彼の人に迷つたからにしてが、何様まあ正直で清潔  
 で純粹な實意の深い水野さんのやうな彼様な人を、加之に横合から何  
 様することが出來やう。そんな汚い心持をもつて、のめくとした事  
 を仕やうと爲もする女の様に妾が見えやうかと思ふと、餘り情無くて  
 味氣無くなつて仕舞ふ。まあ姉さんにさへ妾の心持がほんとは分  
 らぬのなら、然様いふ不正直のが一體の世間の女の常なので、妾のや  
 うなのは、よくよくの馬鹿なのだらう。つい氣の毒と思ふ心が募つて  
 いろくくと水野さんの爲に頼みごとなんぞを仕たので、姉さんにまで  
 可厭な事を云はれる。あゝ、これも妾が愚鈍過ぎるからの事で、も  
 うくいつそ可厭になつて仕舞ふ。姉さんに頼んだ事さへ首尾能く出

來たなら、水野さんの水の字ももう云ひ出さないで、當分は尋ねます  
 まい、會ひも仕ますまい。何でも些少の日數の中に、姉さんが水野さ  
 んの事を御云ひなさるやうの調子が、急に異つて來たやうに思はれる。  
 まかし、これも妾の僻見か知れぬけれど、何様も何かの譯があつて、  
 妾が水野さんに近よるのを御嫌ひなさり出したやうにも思はれる！。  
 此上も無い有り難い姉さんの所思が然様なら、其ても無理に彼の人を  
 何様の斯様のと思つて居る仔細のあるのでは無いし、妾が彼の人に遠  
 ざかるのに別に苦も無い譯、妾は何處までも姉さんの指揮を受けて、  
 何を修業するにしろ、何でも宜い一人立の出來る身になつて、ちゃん  
 と一人で過せるやうになつてから、それから自分の勝手に水野さんの  
 世話でも誰の世話でも、自分が親切にして遣りたいと思ふ人には親切  
 にして遣りませう。彼の優しい智恵の深い氣の大きい姉さんでさへ妾  
 の外には眞實に味方は無い！。然様思つては濟まない事ながら、此  
 の繪の中の鷺が物を云つたなら、屹度姉さんの往時も分らうけれど、  
 姉さんもやつぱり辛いかな悲しいかの瀬を越して、そして今のやうに



天うつ浪

第三終

ひとりだちどうやう  
一人立同様な身におなりに相違無い。そして此の鷺は其の因縁の紀念  
でもあらう。鷺も物を云はず、姉さんも御話しぢやあ無いけれど、自  
分に比べて姉さんの往時をおもふとあゝ何と無く朦朧と解るやうな氣  
がする！。』

お龍は眼を開いてまた彼繪を見れば、鷺はただ心も無く水に立ち盡し  
て、爾我が心を知れりや、我は謎なり、と云はぬばかりに黙々たり  
寂々たり。